嘘つき姫と竜の騎士

洸海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つき姫と竜の騎士

【Ｎコード】

Ｎ９３５９Ｖ

【作者名】

洸海

【あらすじ】

大国が滅んで数多の小国がひしめく、不安定な時代。旅芸人の少女ニアナは、訳あって一人放浪中に運悪く投獄されてしまう。そこで出会ったのは“共和国の文化委員”だという、風変わりな青年だった。二人はひとまず協力して脱出することに決めるが……。

嘘つき上手な少女と生真面目な青年の凸凹コンビが、小国の王家を巡る陰謀に巻き込まれる話です。サイトにも同じ内容で掲載。

※本編完結済み。後日談追加のため連載中に設定を戻しました。

1

序　幼子の見た風景

空を、飛びたい。

地を這う人間ならば誰もが一度は抱く夢だ。幼い少女にとって、それはまだ現実と分かたれていない。

今、ここから――高台にある古い給水塔跡、あちこち崩れてもう使われていない――両手を広げて飛び降りたら、そのまま風に乗って舞い上がれる。きっと、たぶん。

けれど心の片隅に埋まった小さく重い灰色の石が、それは無理だと、少女の足を根付かせる。だから少女は、無意識に蓋をする。

飛べるのは分かってる。でも、しない。できないのじゃなく、しないだけ。

風に吹かれて目を閉じると、心はもう自由に空を翔けていた。

ザアッ……

波の音が優しく耳を打つ。黄昏を告げる薄桃色の涼風が、少女の黒髪をなびかせて、彼方の空へと還りゆく。

広い、広い、空と海。そのあわいを、少女はどこまでも飛び続ける。

バサッ……

微かに羽ばたきが聞こえた。少女はどきりとして目を開ける。本当に、己が背に翼が生えたのか、と。だが、肩越しに見えるものは何もない。

空を振り仰ぐと、白い鳥が舞っていた。

「……？」

ちがう。鳥じゃない。

知らず、口と目はぽかんと開きっぱなしになっていた。

普通の鳥よりも遥かに大きく、堂々とした翼と長い尾を持つその

姿は、
「竜だ……」
遠い昔の伝説からよみがえったという、天竜に間違いなかった。
すごい。すごい、すごい！
深緑の瞳は憧れに輝き、頬は沈みゆく夕陽の色に染まる。どこへ行くのか、白い翼が天をよぎって見えなくなるまで、少女はずっとそれを見つめていた。
いつか、あたしも。
生まれたばかりの願いを、大切に胸に抱きしめて。

――それが、自分には訪(おとな)う術もない遠い国の竜であり、間近で見ることはもちろん触れるなど夢のまた夢だ、と聞かされたのは、家に帰ってすぐのこと。
よしんば竜のいる国まで行けたとしても、竜と共に飛べるのは、絆の誓いを立てた竜侯と呼ばれる特別な人間だけ。
下らねえことを考えるな。
言われて、夢は砕け散った。
踏みにじられ、打ち捨てられ――そのまま、年月だけが過ぎていった。

1

一章　旨い話には裏がある

牢獄を見れば、その街の程度がよく分かる。
清潔で、中の見える鉄格子の牢に一人ずつ入れられているなら、優等生。不潔な上に混雑していて、真っ暗だったり中が見えなかったりするのは、落第。
――その伝で行けば、この街は優等生からひとつふたつ格下ってところか。
ニアナは兵士に小突かれながら周囲を観察した。鉄格子で仕切られた小部屋が通路を挟んで整列しているが、ほとんどは空だ。清潔さに関しては、少々難あり。
「くっさ……」
鼻にしわを寄せて、思わずうめく。彼女をここまで連れてきた兵士が、うるさい、と唸って扉を開けた。
ドン、と背中を突き飛ばされる。大きく数歩よろけて、奥の壁に手を突いた時には、背後でガシャンと無慈悲な音が響いた。ニアナは振り向き、早くも立ち去ろうとしている兵に噛みつく。
「ちょっと、あんまりじゃないの！？　誤解だって言ってるでしょ、この街じゃ罪のない無害な人間にまでこんな扱いをするわけ？」
「黙れ、小娘。無害な人間は屋台の店主に言いがかりをつけて、食い逃げしようとしたりせんわ」
「だから、それが誤解だって言ってんのよ！　それに小娘は失礼でしょ、あたし十八の乙女よ！」
「だ・ま・れ。そこでしばらく反省してろ、処罰が決まったら出してやる」
兵士はニアナの鼻先に指を突きつけ、あとは振り返らず一切を無視して、行ってしまった。ニアナは鉄格子を掴んで揺さぶったが、

もちろんびくともしない。怒りをぶつけるだけぶつけ、最後に一蹴りしてから、造り付けの粗末な寝板に腰を下ろした。
「うぁ……もう、最低」
両手で頭を抱え、ふーっと大きなため息。まったく、ついてない。どんな処罰が下るだろうか。罪状自体は軽微なものだから、まさか殺されはしないだろうが、広場で笞打ちの刑は勘弁して欲しい。笞の傷はひどく痛むし、見物した人々は誰も彼女に手を差し伸べまい。傷が癒えるまで横たわる藁さえ、手に入らないかも……。
暗い気分でうつむいていると果てしなく滅入りそうなので、とりあえず両手を膝に下ろして、顔を上げた。そして。
「――？？」
思わずぽかんと口を開ける。
なんだ、あれは。
通路を挟んだ向かいの牢で、きらきら光っているもの。
それが人の髪だと判別できた時には、相手もこちらを凝視しているのが見えた。恐らく今の自分と同じぐらい、目を丸くして。
（なんなの、あれ。なんであんな金ぴかなの？）
牢に窓はなく、明かりは通路のずっと向こうにあると思しき自由の世界から、間接的に届くだけだ。昼の今でも、白っぽい光はあちこちに反射して弱まり、ニアナの足元で力尽きている。
だのに、向かい側の青年の頭は、まるでそれ自体が光を発しているかのように、陰にあってさえ仄かに浮かび上がって見えるのだ。そこらに散らばる陽光の欠片を、吸い寄せているのかもしれない。
（長髪だったら凄いことになってそうだわ）
ニアナは束の間、状況を忘れて想像してしまった。一般的な成人男子は短髪にしているものだが、青年の髪はその基準に照らしてもまだ短い。もし彼が女のように、あるいは一部の洒落者のように髪を長く伸ばしていたら……
（歩くお星様ね）
きらきら輝きを振り撒きながらしゃなりしゃなり歩く姿が脳裏に

浮かび、思わず失笑する。と、青年がわずかに眉を寄せて、不審げな顔になった。
「あ、ごめんなさい」
笑いを押し殺し、ニアナは軽く手を振った。
「すごいキラキラの金髪だなぁと思って。悪気はないのよ、失敬失敬」
どうにか申し訳なさそうな表情を作り、片手で拝むふりをする。考えてみれば、相手も何かをやらかしてぶち込まれた身だ、場合によっては鉄格子越しに石でも投げられかねない。
そう気付くと、愉快な気分は火が消えるように失せた。ニアナは真顔になり、相手の様子を窺う。幸いなことに、青年は自分が笑われたことは気にしていないようだった。ただ興味深げに、不躾なほどまじまじと彼女を見つめている。
しばしの沈黙。
そして、
「……あの」
耐え切れず、ニアナが先に口を開いた。
「何か気になることでも？　そりゃ、あたしはけったいな格好してるから、見られるのは慣れてるけど。なんて言うか、そこまで心底不思議そうに見つめられることってないわよ」
けったいな、と言ったのは謙遜でも皮肉でもなく、事実だ。
普通一般の女性ならば裾の長いスカートにサンダル姿だが、今のニアナは、男のようなチュニックとズボン、革靴である。しかし男装というのでもなく、チュニックには明らかに女物の装飾が施してあるし、手首は色とりどりの組紐で賑わっている。髪も半分ばかり結って、一部は流したまま。堅気の人間でないのは明らかだが、旅芸人にしても、ここまで奇抜な格好は珍しい。
青年はニアナに言われても尚しばし視線を固定していたが、ようやっと瞬きして、
「いや……失礼。随分と個性的なもので」

拍子抜けするほど淡白な声音で詫びた。ニアナは思わず苦笑をこぼす。
「褒めてるの？　それとも厭味？」
「見たままの事実だ」
これまたあっさりした返事。あれほど食い入るように見ていたのは、何だったのか。
（っていうか、この人、なんなの？）
ニアナは青年の真意がさっぱり読めず、当惑に首を傾げた。いくら初対面で、場所が牢獄で、通路を挟んだ向こう側だとは言え、少しは人となりが分かっても良さそうなものだ。せめて、冗談か嘘か皮肉か、区別がつくぐらいには。
（服装は、ちゃんとした身分がある人っぽいけど……）
全体に簡素な衣服だが、ニアナの見るところ決して安物ではない。何より、庶民が平時に身につけることのない、マントを羽織っている。薄暗くてよく分からないが、恐らく青っぽい色の。
「ふぅん。どっかの領主さんか偉いさんの、衛兵か役人って感じね。この街の人ならぶち込まれる筈ないし、よそから来たんでしょ」
ニアナが推測を述べると、青年は軽くうなずいた。
「共和国の役人だ。文化委員の職を務めている」
「文化委員？　何その胡散臭いの」
「散逸した美術工芸品の収集や復元に携わっているんだ。怪しい仕事じゃない」
青年は言い、そこでやっと、最初の驚き以外の感情を見せた。ため息をついたのだ。ニアナは眉を上げた。
「そう言ったけど信用されなかった、ってわけね。で、おのれ曲者、っとぶち込まれた」
「……」
青年が眉をひそめてこちらを睨む。ニアナはおどけて降参の仕草をした。
「ごめん、ごめん。悪気はないんだってば。自己紹介が遅れたわね。

あたしはニアナ、元は旅芸人の一座にいたんだけど、ちょっと色々あって今、一人旅してるの」
「それで路銀に困って食い逃げしようとして、捕まったわけか」
「違うって言ってんでしょ！　もう……あの屋台のヒヒ爺、張り倒してやりゃ良かったわ。ちょうど小銭がなかったから、銀貨でお釣りをくれってったのよ。そしたら釣銭切れだから端数はまけといてやる、って言われてさ。喜んで食べてたら、いきなり人の……っ、胸をっ、掴みやがって！　あああ思い出しても腹が立つー！　何が端数分だっ！！」
　厚かましく胸に食いついた太い指の感触がよみがえり、ニアナは身震いするや立ち上がって鉄格子を蹴りつけた。
「うるさいぞ！」
　途端に通路の向こうから、兵士の怒声が飛んできた。ニアナは相手から見えないのを良いことに、べえっと舌を出して、声に出さず罵倒する。向かい側の青年は、突然わめいたニアナにも動ずることなく、同じ姿勢のまま彼女を見ていた。

（2）

「なるほど。察するに、手に持っていた食べかけのパンをヒヒ爺の顔に叩きつけ、最前支払った代金を取り返して立ち去ろうとしたが、捕まって警備兵に突き出された、というところか」
「……まさか、見てたの？」
「君の態度から想像しただけだ。代金を取り返したのがまずかったな」
「パンの半分は返してやったし、残りの分は胸揉まれたんだからチャラよ！　むしろ慰謝料貰ってもいいぐらいだわ！！」
ニアナが憤然と言い返すと、青年は微かに苦笑をこぼした。「返した、ね」などとつぶやいて。ニアナは鼻を鳴らし、どすんと荒っぽく腰を下ろした。
「それで、文化委員の兄さんは何やったの？」
「……だ」
「え？」
小声が届かずニアナが聞き返すと、青年はなぜか少しためらってから、ぎりぎり聞こえるか聞こえないかという声で繰り返した。
「ネイシス、だ」
「ああ、名前ね。なんで小声？　聞かれちゃまずいの？」
「いや……」
曖昧に返事をごまかし、彼、ネイシスは咳払いした。
「私はただ、帝国時代の石像を見つけて買い取ろうとしただけだ。だがどうやら、今の持ち主はそれを……表立っては言えない方法で手に入れたようでね。私が提示した買値で本当の価値に気付いて、もっと高く売れる所へ流すために、邪魔な私をしばらく身動き取れない状態にしておこうと決めたらしい」
「わー、ありがちー」
棒読み口調でニアナが言った。それを専門の仕事にしている役人

にしては、無用心すぎたのではないか、という皮肉だ。ネイシスも自覚はあるらしく、肩を竦めた。
「どうしても買い取りたいほど貴重なものではなかったから、半端な気持ちで交渉してしまったんだ。それで足をすくわれた。私のことより、君はどうなんだ。一人旅と言ったが、それこそ無用心に過ぎるぞ。共和国の領内ならまだしも」
「分かってるわよ。ちょっとの間だけ。長く続けるつもりはないわ」
ニアナは説教から逃げるように肩を竦め、あっけらかんと応じた。
彼女が旅しているのは、大陸北西部ヴィティア地方。北部都市同盟の勢力圏内で、大小数多の都市国家が乱立しているが、ほとんどの“国”は名ばかりだ。小さな村や町が勝手に自治を行っており、法も秩序もバラバラ、特によそ者には随分と適用の仕方が厳しい。今まさにニアナ自身がその好例となっているように。
こんな世情になったのは、およそ八十年前からだ。大陸全土を支配していた帝国が、衰退の末に瓦解した。以来どこもかしこも情勢は不安定で、平穏に暮らせる土地は少ない。ただ幾つか大きな国はあって、その領内中心部ならば比較的安全と言える。北部では、ネイシスの出身地であるエルファレニア共和国がそうだ。文化委員、などという官職が存在するぐらいなのだから。
ニアナも、出来れば共和国まで行きたいとは思っていた。しかし一人で街道を歩けば、半日と経たずに身ぐるみ剥がれて殺されるだろう。やむを得ず、行商人や、作物を売りに来る農民の一行に便乗し、ごく狭い範囲の村や町をさまよっているのだ。
（一人旅なんて言うんじゃなかった）
身の上を詮索されると面倒だ。今のところ相手は礼儀正しい態度を保っているが、寄る辺ない女一人だと知れたら、どう変わるか知れない。というわけで、
「それより、どうやってここから出る？」
唐突だが、さも当然の顔をして話題を変えた。
ネイシスは急転回に乗り損なったらしく、返事に詰まって目をぱ

ちくりさせる。ニアナは小首を傾げて畳みかけた。
「誰か、賄賂積んで出してくれる知り合いの当てでもあるの？」
「……そんな必要はない。そもそも私は詐欺師との訴えでここに入れられたが、本国に問い合わせたら身元ははっきりする。既にそのように伝えて、早馬を出してもらった。数日中には出られるだろう。もっとも、その頃にはあの像は行方知れずになっているだろうが、まあ別に惜しくはないし」
あまりにも淡々としたネイシスの態度に、ニアナは呆れるを通り越して感嘆してしまった。
「だからって、こんな臭くて汚い所で二日も三日も我慢するっての？　なんかもう、何と言っていいやら……」
「必要のない脱走をして、罪人として手配されでもしたら、後々仕事がやりにくい。それだけの理由だ」
「仕事ねぇ」
熱心なんだか、その割には惜しくないなどと諦めが良すぎたりとか、よく分からない。ニアナはますます相手に対する困惑を深めたが、しかしこの際、重要なのは彼の勤務態度ではなかった。
「必要ない、って言ったわね。ってことは、必要なら脱走できる自信がある？」
鉄格子にぴったり張り付き、ささやき声で問う。ネイシスは不審げに眉を寄せたが、自身も立ち上がって鉄格子に寄りかかった。
「番人を中に誘い込めたら、叩きのめして鍵を奪うぐらいは出来る。私に脱走させて、君もそれに乗じようというのか？」
「まさか、やるならあたしも協力するわよ。あなただけに危険は負わせないわ。あのね、さっき、身分は確かだから出してもらえるって言ったわよね。そうかもしれないけど、逆は考えられない？」
そこで一呼吸置いて、相手に考える時間を与える。それからニアナは一段と声を低めた。
「身分が確かだからこそ、始末されるかもしれない、って」
「それは……」

ネイシスは微かに不快感の漂う声を漏らした。馬鹿な、と否定するかと思ったが、意外にも彼は小さくうなずいてニアナの言い分を認めた。
「あり得るな。共和国は周辺諸都市から妬みと警戒の目を向けられている。ここの領主とはまだ会っていないが、もし……」
小役人を牢から出してやった後、補償だ謝罪だとごねられたら面倒だし、それがなくとも、今後は共和国に対して負い目が生じる。それぐらいなら、と、領主が短絡的な解決法を選ぶ可能性は、充分にあった。
ネイシスは、ふっと小さくため息をついて目を瞑った。考えをまとめているのだろう。その横顔を、ニアナはじっと見守る。彼がやはり不正は良くないだとか言い出したら、自分だけ逃げる方法を考えなければならない。
ややあって、ネイシスの眉間にしわが寄った。気は進まないがやるしかない、と決断したらしい。目を開き、彼はニアナを振り返った。
「番人を呼び込む方法は？」
「任せて」
そう来なくっちゃ。ニアナはにっこり笑って請け合った。
おもむろに立ち上がり、鉄格子に寄りかかる。軽く頭を振って髪を乱し、胸元で襟を留めている紐を少し緩める。ちょっとの間、息を止めて顔が上気するのを待って。
「……ねえっ、ちょっと……！」
開いた唇から出てきたのは、最前まで話していたのは別人かと驚くほど、甘ったるく昂った声だった。
ネイシスがぎょっとなって、何をする気かと身構える。それを無視してニアナは続けた。深緑の目はとろんとして熱を帯び、鉄格子をつかむ指が艶かしく動く。
「お願い、誰か……っ！！　来て！」
流石に様子がおかしいと気付き、兵士が走ってくる。食い逃げ犯

を牢にぶち込んだ当人だったが、その彼でさえ、濡れたまなざしに縋りつかれて、ぎくりとたじろいだ。
「な、何だ、どうし……」
「あいつが、さっきから」
ニアナは涙ぐみ、声を震わせて、弱々しい仕草で向かいのネイシスを指差す。
「手が届かないからって、い、いやらしいこと、ばっかり言うの……っ」
「なっ――――！！」
兵士が鬼の形相になって振り返るのと、ネイシスが抗議の声を上げるのが同時だった。
「何を……！」
「貴様っ！」
兵士がネイシスの方へ行きかけたが、ニアナは鉄格子の隙間から手を伸ばして袖を掴んだ。
「お願い、黙らせて。あたし、もう……駄目……」
分かるでしょ、ね？
唇だけが動いて懇願する。兵士の目は形の良い唇に吸い寄せられ、軽くのけぞった喉、そして鎖骨、乱れた胸元へと下りてゆく。
兵士が生唾を飲む音が、ごくりと鳴る。だが、ニアナはまだ視線を外さない。袖を掴んだ指をゆっくりほどきながら目を伏せ、駄目押しに、そっと吐息をひとつ。
直後、兵士はバネ仕掛けのように向かいの牢めがけて突進した。そのまま鉄格子をぶち破っても不思議はない。慌ててネイシスは奥へ退避しつつ、密かにマントの留め具を外す。
荒っぽい鍵音が響き、ちぎれそうな勢いで扉が開いた。

（3）

「ふんぬぁー！」

問答無用、鼻息も荒く兵士が拳を振り上げる。ネイシスは余計な事は言わず、黙って素早く身構えた。雄牛のごとき突撃を軽やかにかわし、マントを頭にかぶせて視界を奪った上で、重い一撃を腹に打ち込んだ。

ごふっ、とくぐもった息が漏れる。ネイシスは相手に立ち直る隙を与えず、よろけて下がった後頭部に踵を振り落とした。

――ずしん、と低い響きがニアナの部屋にまで伝わる。

そして、あとは静寂。

ニアナはいつもの表情に戻ると、鉄格子にへばりついて向かいの様子を見た。ネイシスは倒れた兵士からマントを取り返し、無事を確かめている。

うまく行ったか、と訊きたいのを堪えて、ニアナはじっと待った。迂闊に声をかけて、まだ兵士の意識があったら困る。

ネイシスは屈んで兵士の体をあらためていた。鍵を奪うより先に脈を確かめたのは、良い心がけだ。ニアナは相手の評価を少し上げた。

じきに、物音ひとつ立てず、ネイシスが出て来た。通路の左右を見渡して、他の兵がいないことを確かめてから、こちらへやって来る。実に面白くなさそうな顔で。

「やったね！　文化委員さん強い！　きゃー素敵ーっ」

ニアナは小声で無邪気にはしゃぎ、相手がさらに渋面になったのを見て笑った。

「あはっ、見捨てられるかと思ったけど、律儀に助けに来てくれてありがと。ささ、早く早く。お願いしまーす」

「……君という子が分からない。胸を触られて大騒ぎしていたくせに」

はぁ、とため息をつきながらも、ネイシスは鍵を開ける。ニアナはひょいと扉をくぐり、左右を警戒しながら、ささやきで答えた。
「旅芸人だって言ったでしょ。必要なら娼婦の演技だってするわよ。あなたに腹痛起こして貰う手もあったけど……あの方法なら、あなたが仕留め損なっても、あいつはあたしの所に来るから」
「私が倒せない男も、君ならお手の物だというわけか」
「女には女のやり方があるのよ」
ニアナは鋭く笑い、幅の広い風変わりなベルトを軽く叩いた。すっと指を裏側に差し入れ、きらっと光るものを取り出す。ごく細く、小さいナイフ。
「これの扱いにかけちゃ、ちょっとしたもんよ。お目にかけられなくて残念……っと、あなたの武器は取り上げられたのよね。見付かるかしら」
「ああ、どこにあるかは知っている」
「ほかにも警備兵がいたら、どうする？」
「さっきの気の毒な兵士を人質にするしかないだろう」
ひそひそと相談しながら、通路を端まで進む。当直兵士のための小部屋には、幸いなことに誰もいなかった。
「最低でも、二人一組なものだと思うけど……」
「片割れはさぼっているのか、腹具合でも悪いのか、だな。何にしても助かった」
ネイシスはあっさり言うと、用心する様子もなくスタスタ部屋に入って、抽斗（ひきだし）のひとつから自分の剣を取り戻した。ついでに牢の鍵を机に置き、連絡用の蝋板に走り書きを一筆。
「行こうか」
まるで仕事から帰る役人のような風情で、ネイシスは事も無げに言って歩き出す。ニアナは少しばかり眉を上げた。
「堂々としている方が疑われないっていうのは分かるけど、それにしても何だかね……書き置き、何て？」
「お世話になりました、急用を思い出したので失礼します」

しれっとネイシスが答えたもので、ニアナは思わず大笑いしてしまった。
笑い声のおかげで、建物から通りへ出た時も、通行人に見咎められることはなかった。やや驚いた顔がちらほら振り向きはしたものの、それだけだ。
二人は善良な市民を装って、そのまま少し一緒に歩いたが、すぐに人気のない裏道に身を潜めた。
「さて、と。この辺りまで来れば、大丈夫かな。あたしはすぐに町から出るわ。あなたはどうする？　例の石像とか、確かめに行く？」
「いいや。私もここから離れるつもりだ。宿に荷物を置いたままだから、取りに行かなければ」
「見張られてるんじゃない？　あたしが取って来ようか？」
何の二心もなさそうなニアナの言葉に、ネイシスは束の間、胡散臭げな顔をして彼女を見つめた。
「親切な申し出には感謝するが、そのまま君に持ち逃げされては困る物が色々入っているんだ」
「うわっ、馬鹿正直に失礼ね！　警戒するのも当然だけど、もうちょっと言い様ってのがあるんじゃないの？」
「すまない」
そこで謝るのもどうなんだ。そんなにあたしは油断ならんのか。
と言いたいところだったが、ニアナはぐっと飲み込んだ。事実、ちらりとではあったが確かに、好機と思ったのだから。代わりに、独り言めかしてぶつくさぼやいてやった。
「まったく、窮地を共に切り抜けた仲間に、冷たいわねー」
「必ず私に届けると誓ってくれたら、頼んでもいい」
「……何様よ、その言い草。ああ、お役人様でしたわね、しがない庶民ごときが失礼致しました」
ニアナはすっかり機嫌を損ね、意地の悪い厭味（いやみ）を繰り出す。だがネイシスは、全く堪えていないようだった。真顔のまま、何も聞こえなかったかのように続けていわく。

「君が私の荷物を無事に届けてくれたら、私は君が共和国で定職に就けるようにはからおう。取引だ」
「――！」
どきん。
心臓がひとつ跳ねた。ニアナは思わず不機嫌を装うことも忘れ、目をみはってネイシスを振り返る。
明るい琥珀色の双眸が、こちらを静かに見返していた。その瞳の奥に吸い込まれそうに錯覚する。
（どうして知ってるの）
一人旅だ、長く続けるつもりはない、そうとしか言っていない筈だ。どこかに住み込みで働ける職を探していることも、出来れば共和国に行きたいことも。つても保証人もない為にまともな所では相手にされず、困り果てていることも。何も、言っていない筈。
なのに、すべてを暴かれたような気がした。
今の身の上や弱みだけでなく、心の奥底に秘めた幼い憧れまで――
ニアナが絶句していると、不意にネイシスが目をそらした。ニアナははっと我に返り、遅まきながら心を隠すように我が身を抱く。
「取引にしちゃ、気前が良すぎるんじゃない？」
無理に浮かべた苦笑は少し歪んで、声もかすれていた。
「私はそうは思わない」
返事はあくまでも淡白だ。ニアナはゆっくり静かに深呼吸すると、腕をほどいた。
「分かった。あなたがそう言うんなら、それでいいわ。あたしはそもそも、ただ親切で言ったんだけどね。荷物取って来ようか、って。宿の場所と、落ち合う場所、教えてくれる？」
しばしの後、町から北へ向かう街道の端で、ぽつんと佇む人影があった。そこへ、近くの民家の陰から少年が現れ、大人用の鞄を抱えて走り寄る。
「兄ちゃんがネイシスだね。本当、キラキラ頭だ」

少年は笑いながら言って、鞄を差し出した。
「はいこれ。兄ちゃんに届けて、って頼まれたんだ。黒髪と緑の目の、美人の姉ちゃんから」
「……ありがとう」
驚かず、ネイシスは穏やかに礼を言って鞄を受け取った。
「何か伝言を預かっていないか？」
「あ、うん。ごめん、って言ってた。それと……えーと、『旨い話には裏がある』ってさ」
「そうか」
信用がないのはお互い様、ということらしい。ネイシスはわずかに寂しげな表情をした。少年は目敏くそれに気付き、ませた口をきく。
「兄ちゃん、振られたのかい？」
「いいや、違うよ。……届けてくれてありがとう。お駄賃が要るかな」
言いながらネイシスは、鞄に手を入れる。だがその指先が財布を見つけるより早く、
「姉ちゃんから貰ったから、いいよ。じゃあね」
微妙に気遣いの感じられる声で少年が言い、ぱたぱたと家へ走って帰った。
「……もう貰った？」
一人残されたネイシスは不審げにつぶやくと、出番のなくなった財布を取り出し、手の上で軽く数回、弾ませてみた。明らかに、記憶にあるより軽くなっている。
鞄の中身を広げてみるまでもなく、ほかに減った物はないと確信できた。彼女なりの公正さ、ということだ。
「やれやれ」
ネイシスはため息をつくと、財布を鞄にしまって、何事もなかったかのように歩き出した。

（1）

二章　不味（まず）い飯には理由（わけ）がある

パルテニア王国は、その北端で共和国の南西部と接している。
と言っても厳密な国境があるわけではない。王国と名乗ってはいるが、やはり他の多くの“国”と同じく主体は都市国家であり、周辺の土地は農村と森林がいくつか“領地”だというだけで、人の住まない・入らないところは空白地帯なのだ。
それでも、中心都市以外にも村や町があるというだけ、北部ではまともな国の部類に入るだろう。
そんなわけで“王都”パルテノスは、かつての帝国貴族からは失笑を買うとしても、現在の北部では充分に都会と言える賑わいを見せていた。
もちろん、人が増えれば素行の怪しい者も増えるわけで、
「すみませんねぇ、お世話になっちゃって」
「いいえ、このぐらい当然ですよ」
目下、その胡散臭い輩の一人がせっせと活動中であった。
若い娘が買い物袋を右肩と右手に提げ、左手で、足元のおぼつかない老女の腕を軽く引いている。その構図だけを見れば、なんとも心温まる情景なのだが。
「若いのに、今時感心な娘さんだねぇ。本当にありがとうね」
「そんな……お家の方はいらっしゃらないんですか？　こんな沢山の買い物、お一人でなんて」
「ああ、息子と嫁はいるんだけど、嫁が今、身重でねぇ。息子は嫁にべったりだし、あたしが買い物に行って来ようかって言ったら、当然みたいに『頼むよ母さん』って、それだけさ。情けないったら、全く。男ってのは駄目だねぇ、ちっとも気が利かなくてさ」
老女はうんざり首を振り、娘の実直そうな緑の目を見上げた。

「お嬢さんは、もう決まった相手がおいでかい？」
「いいえ、まだ……」
「そうかい、そんなら、よーく見て選ぶんだよ。まぁ大概の男は、使えないもんだと思っときなさい」
「はい」
娘は素直に応じ、可笑しそうに小さく笑った。
「私にも弟がいたんですけど、本当に、手のかかるやんちゃっ子で。男の子ってやっぱり、皆、ああなんでしょうか」
「幾つになっても子供のまんまさ。そうかい、弟さんがいるのかい」
「はい……でも何年か前に、行方が分からなくなって。ずっと探しているんですけど」
娘が寂しそうに微笑む。老女は「ああ」と同情の嘆息を漏らした。
「こんなご時世だからねえ……」
「ええ」
それきり、しばし無言で歩く。ややあって、不意に老女が顔を上げた。
「ああ、ここまでいいよ。あそこの店の主人とは親しいからね、残りの買い物をして、まとめて家まで配達してもらうから……本当にありがとう」
「お礼なんて。すぐそこだし、お店まで運びます」
「悪いねえ」
しゃべりながら道を渡り、青果店に向かう。老女が親しいという店主が気付き、急いで迎えに来た。娘は店主に老女の荷物を預けると、自分の小さな鞄ひとつを肩に提げ、
「もう大丈夫ですね。それじゃ、これで」
にっこり清々しく微笑んで、そのまま歩き出そうとした。それを、老女が慌てて引き止める。
「ちょっと、ちょっと待って。すっかりお世話になったんだから……」
「えっ、いえ、そんな」

「いいから、荷物を減らすと思って、受け取って。ほら、これも」
せかせか言いながら、老女は買い物袋から堅焼きパンを取り出す。店先から取った小さな青リンゴも一緒に、娘の手に押し付けた。
「大変だろうけど、希望を捨てるんじゃないよ。あんたみたいにいい子は、ちゃんと神様が見て下さってるんだからね」
「……ありがとうございます」
娘は一瞬だけ泣きそうな顔を見せたが、すぐに健気に微笑み、深々と頭を下げた。
老女と別れた娘は、そのまましばらく、こみ上げる思いを堪えるような風情で足早に歩いていた。が、
「げ」
いきなり小さく呻き、がらりと表情を変える。行く先の人込みに、見覚えのある金ぴか頭がちらりと覗いたのだ。
慌てて彼女、すなわちニアナは、細い路地に入った。人目がないのを確かめて壁にもたれると、ため息ひとつ。貰ったばかりの青リンゴを服でこすり、噛みついた。
「なんでいるかなぁ。よりによって、こんな大きな街で鉢合わせしなくても……」
甘酸っぱい果汁をすすり、手の甲で口元を拭う。食べ終わった芯をポイと捨て――野良犬かカラスが食べるだろう――堅焼きパンを鞄に入れた。
建物の間から覗く青空を、ぼんやり見上げることしばし。
「もう行ったかな」
こそっ、と通りの様子を窺う。同時に背後から、無感情な声が飛んできた。
「誰が生き別れの弟を探しているって？」
「のぉう！！」
思わず奇声を上げ、縮み上がる。ばっ、と体ごと振り向くと、そこには忌々しいキラキラ頭の青年が立っていた。
「い、いつの間に……！」

おのれやるか、と身構える。芝居がかったニアナの反応にも、ネイシスは眉ひとつ動かさなかった。
「私に気付いたら逃げるだろうと思って、わざと見付けさせた後で回り込んだ」
「くっ……根性の悪い……」
「行きずりの老人から食糧を掠め取る詐欺師に言われたくない」
「誰が詐欺師よ、人聞きの悪い！　小さな親切にささやかなお礼を貰っただけでしょ！？　荷物を運んだのは事実だし、パンとリンゴぐらい、お駄賃としちゃ妥当でしょうが！」
「なるほど。それで私の財布からも、『妥当』な駄賃を勝手に取ったわけか」
「うぐ……。か、返せとか言われても、もうないからね」
逆さに振っても何も出ないわよ、と、相変わらず身構えたまま唸る。じりじり後ずさって、逃げる隙を窺いながら。
だが、続くネイシスの言葉はあまりに予想外だった。
「だろうな。ちゃんとした食事をしに行こう」
「は？」
「空腹なんだろう？」
「それは……そうだけど」
小さなリンゴひとつでは、ほんの一時、腹の虫をなだめられるだけだ。ニアナはここ数日、その程度の食事しかしていなかった。果物ひとつ、スープ一杯、パン一切れ。あちこちで誰かから分けてもらう、という方法で。
「何か裏があるんじゃ……」
「君にたかるほど困窮していない」
「その馬鹿正直に失礼なの、やめなさいよ！」
「ああ、すまない」
「……」
疲れた。ニアナはがくりと肩を落とし、ため息をついた。
「もう……いいわよ、はいはい、お役人様のお召しとあらばお供つ

かまつりますともええ身に余る光栄でございます」
　これだから、この青年は苦手なのだ。勝手に駄賃を頂戴したこと以上に、再会を避けたいと思った理由は、彼が非常に“やりにくい”相手だから。ニアナの用意する会話や場の雰囲気を、彼は見事なまでに無視し、粉砕してくれる。大概の人間は、先ほどの老女のように、何も気付かぬまま彼女の作り出す流れに乗せられてくれるのに。
「なんでこんなのと関り合いになっちゃったんだか」
　ぶつぶつぼやきながら、ネイシスの斜め後ろを歩く。相変わらずネイシスは、彼女の文句をまともに取り合わない。すたすた歩いて、飲食店が並ぶ界隈へ入って行く。
　照りつける陽射しと、人込みの熱気とで、通りには陽炎が立っていた。
　じきに彼がどの店を目指しているかに気付き、慌ててニアナは袖を引いた。
「ちょっと、あんまり高い店はやめてよ。お役人様には普通でも、あたしみたいに、見るからに堅気じゃない奴は入りづらいんだから。あっちの安い所にして」
「……？」
　ネイシスはやや不思議そうにニアナを見つめ、それから目的の店と、彼女の格好と、代替案の店とを見比べる。ニアナは思わずうなだれた。
「色々考えてるんだろうけどさ、改めてつくづく見比べるのはやめてよ……。これでも一応、自尊心てのがあるんだから、『そうか、庶民はあのような店に行くのだな、ふむ、ひとつ勉強になった』みたいな顔されたら、傷つくわ」
「私はただ、君ならその格好で高級店に入ろうと、皇帝の前に出ようと、溶け込んでしまうだろうに、と思っただけだが」
「褒めてるの？　厭味？」
「いや、」

「ただの事実、ね。ハイハイ」
ニアナはネイシスの台詞を先取りし、やれやれと頭を振った。
「そりゃ、やれと言われたら、けったいな格好してるけど実は貴族の令嬢ですのよオホホ、ぐらいのことはやるけどさ。そこまでして高い料理食べたって美味しくないわ。普通でいいのよ、普通で。あそこの定食屋さんにしましょ。それならあたしも、奢ってもらうのに恐縮しなくてすむから」
「仰せの通りに」
あっさりネイシスが了承する。ニアナは胡乱げな半眼で睨んでやったが、表情も声音もまるで変わらないので、本気なのか冗談なのか、それとも何かの間違いなのか、判断がつかなかった。

（2）

ともあれ、ほどなくニアナは無事に定食屋のテーブルに席を確保し、歩き疲れた足を休められた。こじんまりとした庶民的な店で、出すものはその日その日の定食だけ、あとは客によって飲み物が水か酒か、おかずは大盛か、蜂蜜ケーキを追加するか、といったぐらいの違いだ。

昼食には少し早い時間だが、既に店内は混み合っていた。朝からの仕事に一区切りつけた土木作業員や、交代で休憩を取るのであろう近隣商店の下っ端店員、あるいは朝市で作物を売った後らしき農夫など。

ニアナがカウンター奥の店主に、二人分、と合図を送る。向かいに座ったネイシスが、唐突に質問を投げかけた。

「いつもあんな事をしているのか？」

「は？……ああ、人を騙してせこせこ食べ物をちょろまかしてるのか、って？」

ニアナはわざと険のある言い方をして、歪んだ笑みを浮かべた。しかしネイシスは、真顔でこくりとうなずいただけ。そんなつもりじゃない、だとか、言い繕う気配も見せない。ニアナは馬鹿馬鹿しくなって、小さく肩を竦めた。

「いつもじゃないわよ。そりゃ、機会があれば色んな人に接触して、何か手に入らないか試してはいるけど。良い仕事か旦那さんを紹介して貰えたらしめたものだし、そうじゃなくても大抵、小銭か食べ物ぐらいは貰えるから」

「ではなぜ、私の申し出を断ったんだ」

言ったネイシスの声は、責めるでもなく、ただ少しばかりの疑問を浮かべている。おかげでニアナは後ろめたさを感じることなく答えられた。

「それは……だって、あまりにも怪しいもの。自分が育てたわけで

も、枝を揺らしたわけでもないのに、いきなり目の前に落ちてきた果実でしょ。即座に拾って食いつくほど、あたし、自分の幸運は信じてないの」
「だから、安心して刈り取れる種を蒔いているわけか。だが君は旅芸人なんだろう？　芸で稼ぐ方が確実じゃないのか」
「一座に属してない一匹狼が、大道芸でお金を稼ぐの、結構危ないのよ。縄張りってものがあるし、その土地ごとに元締め的なのは必ずいるからね。一座の頭が挨拶して、みかじめ料を払ってくれる場合は安全だけど、一人だと……」
　曖昧に言葉を切り、首を振る。迂闊に女一人で挨拶に行けば、とんでもない額を要求され、支払えないと営業妨害され、挙句に娼館に売り飛ばされる、と決まっている。よほど上手く立ち回るか、危険を承知で無許可営業して素早く逃げるしかない。
「その、元締め的なの、というのは役人か？」
　とぼけた質問をされてニアナは脱力しかかったが、ネイシスは真顔である。ニアナは呆れながらも、世間知らずに対するように説明してやった。
「町によりけりね。小さな村だと、芸人自体が珍しいから歓迎されて、ややこしい話はないんだけど。ちょっと大きな町になったら、自警団だったり領主の衛兵だったり、場合によっちゃ商店街の顔役だったり、そういうのに『許可』を求めるのが筋なのよ。勝手に営業したら、そういう連中が押しかけてきて妨害するの。客を追い払ったり、野次ったり、腐った野菜とか投げてきたり。あるいは夜中に、一座の荷物をめちゃくちゃに荒らして、次の朝に知らん顔でやってきて、お悔やみを言うのよ――先に一言挨拶してくれたらちゃんと見回ってやったのに、ってね」
「悪質だな」
　ふむ、とネイシスは考え込む。ニアナは胡乱な目つきになった。
「まさか知らなかったとか言う？　共和国じゃそんなことはない、って？」

「ない」
「――え」
「大掛かりな出し物をしたり、音楽や歌で騒がしたりする場合、事前に役所に届けて許可を取り、広場使用料を納めてもらうが、それだけだ。みかじめ料のようなものが横行しないよう、各町には軍の警備兵が常駐しているし、被害の届けがあれば、兵のいない村にも出向いて対処している」
「うわ……それ、本当？　知ってたら皆、共和国に殺到するわよ」
初耳だ。ニアナは驚きに目を丸くして、思わず素直に賛嘆する。だがネイシスの反応は、芳しくなかった。片手を口元に当て、考えながらつぶやく。
「その筈なんだが……」
「え？　なに、どういう事？」
ニアナが目をしばたたくと、ネイシスは「いや」と軽く首を振った。こっちの事だから気にするな、とばかりに。一拍置いて、彼は顔を上げるなり言った。
「勿体ないな。君ほどの才能があれば、一人芝居でも充分、観客を集められるだろうに」
「ちょ……いやいや、お世辞でごまかそうとしてない？」
何のてらいもなく褒められて、さしものニアナも赤面する。しかしネイシスは例によって淡白だった。
「事実を言ったまでだ。私の主観だが」
「……なんでかしら、それでも褒められたことに違いはない筈なのに、途端に嬉しくなくなるのは」
「生き別れの弟がいると、私まで信じそうになった。君は演技している間、完全にその嘘に没頭しているんだな。そして他人までその中に引き込んでしまう。稀有な才能だ」
「ますます気分が冷え込むんだけど。もしかして、暗にあたしを非難してない？」
ニアナがむっつり唸ったところで、「はいお待ちどう！」と給仕

娘が現れた。スープの入った椀をそれぞれの前にドン、ドン、と置き、テーブルの中央に平パン二枚が入った籠を置く。芳ばしい小麦の香りがふわっと広がった。
「今日の定食は干魚のスープだよ！　で、前払いだけど、どっちが？」
訊きながら、顔はネイシスを向いている。男が払うものだと思っているのか、単にキラキラ頭に目を奪われたのかは謎だが。
ネイシスは銅貨を数えて渡すと、スープに匙をつけた。芋と野菜が煮崩れてとろみのついた汁に、小さな干魚の身がへろんと一枚浮いている。お世辞にも美味そうとは言えないが、湯気が立っているだけ良しとすべきだろう。
ニアナはひとまずパンを取り、ちぎって口に入れると、片頬をもぐもぐさせながら言った。
「生き別れの弟ってのは、まるっきり嘘でもないのよ。血はつながってないけど、一座にいた頃、世話焼いてやった弟分がいたのは本当。別に探してはいないけどね」
「そうなのか。……君の家族は？」
ネイシスはスープを飲んで、珍しく遠慮がちに問うた。ニアナは軽い口調で「いないわ」と短く答えた。
「小さい頃に売られたから。さっき言った弟分も含めて、まあ、芸人仲間がなんとなく家族っぽいところはあったけど。そっちは？兄弟とかいるの？」
話題をそのまま相手に打ち返し、途端に笑いが込み上げてむせかける。不審な顔になったネイシスに、ニアナはにやにやしながら言った。
「失敬。家族揃ってそんなキラキラの金髪だったら、夜でも蝋燭が要らないだろうなって思ったの」
「……兄弟はいない。この髪は、光の精霊の加護を受けているためだ」
ネイシスは心持ち憮然とした風情で答えた。ニアナは喉に詰まり

かけたパンを飲み込み、胸をトントン叩きながら返事をする。
「へえ、そういう事って本当にあるのね」
そして、話を続ける前に喉を落ち着かせようとスープを取り、椀から直にぐいっと飲んだ。
直後、
「――ッッ！！！」
噴いた。文字通り、口からスープを噴き出したのだ。籠のパンがぐしょ濡れになるほどに。
「ぶほっ、げふッごほ！！　なっ……なに、これっっ！！」
呆気に取られているネイシスの前で、ニアナは咳き込みながら憤然と立ち上がり、両手をテーブルに叩きつけた。
「ちょっと！　よくもこんな不味いもの、平気な顔して食べられるわね！！　おかげで、まさかこんな、だなんて……っ、うぇっふぉッげほッ！！」
いきなりの騒動に、周囲の客がざわつきながら注目する。店主が気付き、顔を赤くして怒鳴った。
「随分な言い草じゃねえか姉ちゃん、うちの飯にケチつけようってのか！」
「飯ぃ！？　冗談でしょ、食べ物じゃないわよこれ！！」
「なんだとぉ！？」
憤激した店主がカウンターを回りこみ、ずんずん大股に迫って来る。ニアナも負けじと両手を腰に当て、肩を怒らせた。
「どういう了見だ、えぇ？　連れが黙って食ってるもんを盛大に吐き出しやがって、ウチの飯が食えねえってんなら他所へ行ってくんな！」
「だから、こんなもの飯だなんて厚かましいって言ってんのよ！客に残飯の始末させるつもり！？　金まで払わせておいて！」
「はッ、尻尾を出しやがったな。小芝居でゴネてタダ食いしようって手合いか、ふざけんな！」
「そっちこそ、頭に虫でもわいてんの！？　まともな食べ物を粗末

にするほど罰当たりじゃないわよ！　仮にも定食屋の看板出すなら、食べられるもの寄越しなさいっての！！」
「偉そうなことぬかしやがっても、代金は返さねえぞ！　出てけ、他の客の迷惑だ！！」
　ほとんど掴み合いの喧嘩になりかけたその時、ネイシスが不意に立ち上がってニアナの腕を取り、下がらせた。
「もういい。分かったから止せ」
「ちょっ、なに勝手なこと……」
　抵抗するニアナを、ネイシスがひたと見据える。
「ニアナ」
　名を呼ばれた瞬間、何かが心臓に触れたような気がして、ニアナはびくりと竦んだ。脅されたわけでもなく、自身も臆してなどいないのに、なぜか逆らってはならないという気にさせられる。
（これ以上、目立つのはまずい）
　脳裏をよぎったのは、自分の考えなのか、ネイシスの無言の圧力だったのか。分からないまま、ニアナの中で怒りが小さくしぼんでしまった。
「……だから、言ったじゃない」
　何とでも続けようのある台詞を、ふてくされてつぶやく。ネイシスはため息をついた。
「ただの食わず嫌いだと決め付けて、悪かった。もう無理に食べなくてもいい」
「当たり前よ」
　ふん、とニアナがそっぽを向く。ネイシスは店主に向かって頭を下げた。
「騒がせて申し訳ない。ここなら大丈夫かと思ったんだ。汚してすまないが、失礼するよ」
　話の成り行きから、どうやら男の方が何かの理由で女を強引に誘ったらしい、と推測し、店主はまだ不機嫌ながらも矛をおさめた。
「痴話喧嘩ならよそでやってくんな。ああ、もういいから行った行

った！　二度とうちの敷居をまたぐんじゃねえぞ！」
野良猫を追うように手を振った店主に、ネイシスは再度、低頭する。ニアナはへそを曲げた恋人よろしく、膨れっ面で、ぐいっとネイシスの腕を引いた。
「口直しに、さっき通った甘味屋さん、連れてってよね」
「分かったよ」
やれやれ、とネイシスは降参の仕草をする。そのまま二人は腕を組んで、店を後にした。

（3）

そのまましばらく通りを歩き、言葉通り、ネイシスはニアナを甘味屋へ連れて行った。

一般的な焼き菓子、たとえば蜂蜜ケーキなどは菓子店やパン屋でも売られており、持ち帰って家で数日保存がきくが、甘味屋はその場で食べるものだけを売っている店だ。

井戸水で冷やした果物の蜜がけ。もっちりした芋団子に、果物や煮豆のソースをかけたもの。パンを溶き卵に浸して、干しブドウやイチジクと一緒に蒸し上げたもの。季節によって、品揃えは様々だ。

ニアナはほとんど無駄にしてしまった昼食の代わりに、甘味のある夏野菜を何種類か煮たものを頼んだ。赤や黄色の野菜と豆に埋もれて、麦粉の団子がつるんとした白い肌を見せている。甘酸っぱい香りが鼻をくすぐった。

「んー、これぞ食べ物らしい食べ物！」

ニアナは機嫌を直し、満足げに笑みを広げた。ネイシスの前には、潰した桃をワインと水で割って蜜を加えた飲み物が置かれている。上品で華やかな香りが、向かいのニアナのところまで漂ってきた。

「あなたの好みって、分かんないわね。あんなクソ不味いものを、眉ひとつ動かさずに食べていたかと思えば、今度はそれ？」

優雅な色合いと香り、それに花をあしらった愛らしい飾りつけは、いかにも、目と口の肥えた貴人が好みそうだ。つまり、安い定食屋では到底満足できない人種向け。

ネイシスは相変わらず無表情のまま、コップを持ち上げた。見た目と香りを堪能するようにゆっくり回してから、唇に運ぶ。一口飲んで、彼は唐突に言った。

「私は、何が美味いのか分からないんだ」

「……は？」

ニアナは今まさに食べようと口を開けたところだったが、奇妙な

発言に気を取られたせいで匙が傾いた。団子がつるんと滑って、ぽちゃんと皿に帰ってしまう。がっかりしたニアナにはお構いなく、ネイシスは淡々と続けた。
「毒となる劇物・薬物は流石に気付くし、材料の違いなども判る。だが、美味いか不味いかはほとんど感じられない。だからあのスープも、毒ではないというぐらいしか分からなかった」
「あれは毒だったわよ、既に。誰か倒れたって不思議じゃないわね」
強烈な酸味と鼻をつく臭気が思い出され、ニアナは顔をしかめて唸った。
「それじゃあなたにとっては、あのスープも、今ちょっとだけ嬉しそうに飲んでたそれも、たいして変わらないってわけ？　味音痴にしても大概酷いわよ。子供の頃に、辛子の塊でも食べちゃったの？」
「生まれつきだ。食事に関しては、見た目と香り、それに口当たりを楽しむ程度だな」
「だからソレなわけね。お可哀想に」
ニアナは同情の目を向けてから、今度こそ匙を口に入れた。期待通りの味で、しばらく食べる方に夢中になってしまう。ネイシスは黙っていたが、そのまなざしに少しばかり羨む気配があるのは、隠せていなかった。
ややあってふと、ニアナはある仮説を思いついた。
「もしかして、そうやって見た目で楽しむ癖があるから、美術品の収集なんていう仕事に就いたの？」
「さあ……どうだろうな。この仕事を選んだのは、自分で商売をするよりは役人の方が向いていると思ったからだが。言われてみれば、目を楽しませるものに接していたい、という動機も少しはあったかも知れない」
「うん？　商人の生まれなの？」
「商人とは少し違うな。実家は粉屋だ」
「へえー、粉屋の息子が役人になれるんだ。共和国って、いいとこね。竜侯様が治めてるだけはあるわ」

聞きかじりの知識で感心したニアナに、ネイシスは複雑な顔を見せた。ここでこんな話をして良いものかどうか、迷う風情で訂正する。
「治めてはいない。竜侯はあくまで共和国の……代表者というか、象徴的な存在であって、実際の政治を動かしているのは議会だ」
「そうなの？　でも、最終的には竜侯が王様みたいなものでしょ？」
「違う。権威はあるが、権力はない。人間の国は人間の手で動かすべきで、人間離れした存在が治めるのは良くない、という信条に基づいているんだ。竜侯本人がそう言って、王位を退けた」
「わお」ニアナの目が、無邪気な興奮に輝いた。「格好いいじゃない。竜と竜侯は何本か芝居にもなってるけど、本物はやっぱり違うわね。権力はないって言ったけど、そういう竜侯様を皆がちゃんと立ててるから、暮らしやすい国になってるんじゃないかしら」
「……」
ネイシスが絶句した。旅芸人の口から思いがけず鋭い洞察を聞かされて、驚いたのだろう。ニアナは自分の発言が的を射たらしいことに気を良くし、さらに畳みかけた。
「あなたも、その一人なんでしょ。美術品集めも竜侯様直々のご命令なんじゃないの？」
「なぜそう思う？」
「だって、このご時世に、昔の帝国の遺産なんて気にするのは、日々の生活を心配しなくてすむ身分の人だけじゃない。まあ、本当に美術品だけが目当てなのかどうか、ちょっと怪しいとは思うけどね」
「君は……」
ネイシスは眉をひそめて言いかけたが、不意に言葉を切って視線を外した。何か、とニアナも彼の目を追い、あれ、と不審な顔をする。定食屋の店主がいるではないか。
「なんだろ、まだ何か文句つける気かしら」
逃げる？　と目で問いながらささやく。ネイシスは小さく首を振り、店主に向かって軽く手を上げて見せた。気付いた店主は、拳を

握り締め、難しい顔で二人の席までやって来ると、
「さっきは悪かった」
短く言うなり、テーブルに荒っぽく手を広げた。チャリンと音がして、指の間からこぼれた銅貨が倒れる。店主は口をひん曲げていかにも不本意な表情をしていたが、それでも、ニアナに対して深く頭を下げた。
「あんたの言った通りだった。あれは傷みかけてたよ。他にも何人かが苦情を寄越して、分かったんだ」
「ああ、そう」
ニアナは半ば呆れ、半ば驚きながら、あっさりした反応を返した。相手が頭を下げているのに、だから言ったでしょ、などと追い討ちをかけるのは、人として品下る。むろん思い出せば腹は立つが、いまさらそれを口にしても仕方ない。ニアナは自分の方に転がってきた銅貨をつまんでもてあそびながら、曖昧な顔で問うた。
「原因、何だったの？　スープ全部が腐ってたら、客に出す前に気付くでしょ」
「干魚だ」店主は苦い顔で答えた。「あれは一人一枚、椀にスープを注いでから入れていたから……そこんとこは配膳係がやってたし、駄目になってた干物はごく一部だったから、気付かなかったんだ。兄さんには当たらなかったみてえだが、姉さんには本当にすまねえ」
「分かってくれりゃいいわよ。ここんとこ暑いからね、干物だって腐るでしょうよ」
「いや、あれは仕入れたばっかりなんだ。だから俺も、ちぃと油断しちまって。あそこの品は、確かだと思ったんだがなぁ……」
店主は独り言めかして責任転嫁の言い訳をつぶやく。白々しい、とニアナは眉を上げたが、ネイシスの反応は少し違った。
「干魚ということは、共和国の品物か？」
パルテニアは海に接しておらず、海産物を仕入れるなら共和国からが一番近い。身を乗り出したネイシスに、店主は首を傾げながらも答えた。

「そうだが、なんで……。もしかして兄さん、共和国の役人かい。そう言やそのマント、空色だな」
心持ち後ずさった店主に、ネイシスは小さくうなずいた。共和国の象徴である天竜にちなみ、兵士や役人の簡易礼装には必ず空色の何かが含まれているのだ。
「文化委員だ。心配しなくても仕事は美術品収集で畑違いだから、あなたに迷惑はかけない。ただ、母国の評判は気になる」
「ああ、いや」慌てて店主は言い繕った。「多分、向こうの品物が悪いってんじゃねえだろうよ。それは皆、分かってるさ。こっちに運んで来る、卸の連中がな……利鞘を稼ごうと小細工しやがるのが多くて、俺らが迷惑すんのさ」
「どういうこと？」
ニアナも話に釣り込まれ、思わず問いかける。店主は周囲に目を走らせてから、ちょっと屈んで声を潜めた。
「あんまり大声で言いふらさねえでくれよ。……税金が高いんだ。共和国からの輸入品は、そのせいで値が恐ろしく上がっちまって、普通に仕入れて運んで売るだけじゃ、ろくな儲けが出ないらしい。だから、かさ上げする連中が多いんだよ。粗悪な品物をまとめて安値で買い叩いて、それをまともな品物にまぜて売ったり、な。だから共和国からの輸入品は、気をつけてよく見なきゃなんねえんだ。ただ、今までうちが仕入れを頼んでたとこは、ずっとそんな真似はしてなかったから、安心しちまって」
俺のせいじゃない、悪いのは輸入業者と政治家だ――そんな心の声が滲み出る。
だがネイシスの関心はもはや、責任の所在からは離れていた。眉を寄せて考え込み、小声でつぶやく。
「関税か」
「そういうこった」
店主は自分に向けられたのでない言葉に大袈裟な相槌を打ち、
「理由は納得してくれたろ。うちの悪口を広めたりしないでくれよ、

それじゃあな」
二人の反応を窺いながら、そそくさと出て行った。ニアナは呆れてその背中を見送り、小さく肩を竦めた。
責任を負わされたくない、店に損害を出したくない、その気持ちは分かる。だが、ことはそれだけの問題ではないだろうに。それとも、自分のようにあちこちを流れ歩く者でもない限り、己の生活だけが何よりの関心事で、ほかのことは見て見ぬふり、というのが普通なのだろうか。
（実際、関税がどうのって言ったって、自分に何が出来るわけでもないんじゃあね……）
醒めた気分で、銅貨をちょいと弾く。向かい側のネイシスは、それを回収する様子もなく、じっと考え込んでいた。ニアナは悪戯心を出し、散らばっている銅貨をゆっくり静かに集めて、一枚一枚重ねていった。全部重ねたところで、まとめて手の中に握りこむ。
「要らないんだったら、貰っちゃうわよ」
相手が慌てるのを期待して、茶化した声をかける。だが白けることに、ネイシスは数拍、無反応だった。
ニアナはおどけた姿勢のまま、固まってしまう。やっとネイシスが目を上げて「ああ」と声を漏らした時には、からかう気も失せて、がくりと脱力してしまった。
「……何をそこまで考え込んでるのよ……どっかに魂だけ飛ばしてたんじゃないでしょうね。本当にこれ、持ち逃げしちゃうわよ」
「それは困る。わずかとは言え公費だ、返してくれ」
「はいはい。まったくもう……そんなあからさまに興味津々なんじゃ、文化委員だなんて誰にも信用されないわよ。もうちょっと演技したらどうなの？」
ほら、と銅貨を手渡す。ネイシスは困惑顔でそれを受け取り、小首を傾げた。
「なぜ？　私は事実、文化委員だが」
「肩書きはそうかも知れないけど。前に会った時も、大して貴重じ

ゃないから惜しくないだとか、肝心の美術品に関してはいい加減だったじゃない。その割に今日は、旅芸人の興行のこととか、さっきの干魚の件とか、熱心に聞いてたし。本当は共和国の……なんていうか、密偵みたいな仕事してるんでしょ。違う？」

密かに探るには頭が目立ちすぎるけど、と付け足して笑う。ネイシスはにこりともせず、無表情にじっとニアナを見つめて静かに言った。

「密偵ならば、わざわざ共和国の役人だと示す空色を身に着けていると思うか？」

「あ……そっか。いやでも、ほら、それは建前っていうか。こそこそ調べてて見つかっても、美術品調査です、って言い訳するためだとか？」

「言い訳が必要なほど踏み込んだ調査はしていない。美術品を保護するのに最低限知っておくべき政情や、当地の技術水準について情報を集めるだけだ。しかしそれでも、国によっては嫌がられる。まさに今、君が言ったような疑いをかけられるんだ。それこそ芸術を軽んじている証拠だというのにな。よそ者が踏み込むのを嫌う地域ほど、美術品は危機に晒されているんだ」

ネイシスは微かに眉をひそめた。どうやら彼なりに、優れた芸術作品の帰趨に心を痛めているらしい。表情は乏しいものの、わずかな変化に真情がこもっている。

（ふうん。わりと本気で入れ込んでるんだ）

つまりそこが弱みにもなる、というわけで。

（よし、つけこんでやろうじゃないの）

今こそ“枝を揺すって”みる時だ。内心にんまりしつつ、ニアナは提案した。

「何か手伝ってもいいけど？」

打算で言ったつもりだったが、声には自分でも意外なほど、善意があらわれていた。途端にネイシスが軽く目をみはり、驚きのまなざしを向ける。ニアナは慌てて言い繕った。

「だって、そんな様子じゃ、ただ美術品を探すのにも一苦労でしょ。所有者に信用して貰うのも難しそうだし、その上さらにあれやこれや調査するってなったら、一人じゃ大変なんじゃないの？　そりゃ、あたしは美術品に詳しくはないけど、あなたと相手の間を取り持つぐらいのおしゃべりは出来るわよ」
「……本当に？」
ネイシスがぽかんと問い返す。その真意は分かったが、ニアナはわざと取り違えて答えた。
「既にあたしのおしゃべりは、うんざりするほど浴びてるじゃないの。あの牢屋番が簡単に乗せられたのも、見てたでしょ」
「……」
「……分かったから、見つめないで。本気で手伝うつもりか、って訊いたんでしょ。ええ本気よ。もちろん手伝ってる間の食費や宿代は出して貰うから、純粋な親切心ってわけじゃないけどね。迷惑だったら断って」
「まさか。君が力を貸してくれたら、おおいに助かる」
大真面目に感謝されて、ニアナは突っ伏したくなった。横から美術品を掠め取るつもりかと疑われた方が、まだしもだ。
「嫌になるわ、本っ当、馬鹿正直！」
ニアナは片手で、赤くなった顔を覆った。
やりにくい。実に全く、この青年が相手だとやりにくい。
皮肉も冗談も、おどけた演技もひねた物言いも、まるきり通用しないなんて。
（少しは騙されてくれたらいいのに）
相手をまともに見られなくて、ニアナは片手で顔を隠したまま、片手で匙をもてあそんだ。回したり、転がしたり、火照った頬が冷めるのを待ちながら。
――と、不意に。
くすっ、と小さく笑った気配がした。ニアナが不審がりつつ向かいを窺うと、そこには、微かだが驚くほど柔らかい笑みがあった。

思わずニアナがぽかんとなった途端、ネイシスは真顔に戻って一言。
「君を相手にひねくれても、勝ち目がないからな」
「……っっ！！　だからそれ、やめなさいって言ってるでしょ！！」
バン、とニアナはテーブルを叩く。馬鹿正直に失礼な発言の主は、平然と無表情で明後日の方を見ていた。

（1）

三章　見栄を張るには金が要る

「はいそうです、我々はあくまで散逸した古美術品の所在を確認し、現在の所有者に保存の意志がない場合にのみ、買い取ることにしております。決して我が国による独占の意図はございませんので、どうぞご安心ください」

すらすらと滑らかな口上を述べているのは、その本職たる人物ではなかった。付け焼刃で文化委員の職務内容や共和国における立場など、必要な情報をあれもこれも詰め込んだばかりのニアナである。

しかし説得力で言えば、彼女の方がよほど優れていた。何十回と同じ説明をしてきたような口調と態度で、いかにも玄人らしく話しながら、同時にネイシスとは違い溌剌とした笑顔を振りまく。上手くいかない筈がない。

髪をきちんと結って見た目をお堅い雰囲気に調整した成果もあり、今日の相手もすんなりニアナを信用して屋敷へ上げてくれた。「先生、どうぞ」と先を譲られたネイシスは、職業選択を誤ったかと後悔し始めていた。

二人が訪れたのは、パルテニア参事会の議長、ゲニクス＝エオシアヌス＝ルヴェラの邸宅である。ニアナが仕事を手伝うことになってわずか三日ばかりの間に、地位の低い議員から始めて、次々に別の議員へ渡りをつけ、議長まで辿り着いたのだ。

もっとも、かほど短期間でここまで、というのはニアナの手腕だけではない。パルテニアは小国であるから議員の数自体が少ないし、彼らの屋敷にはネイシスが調査対象にするような美術品もほとんどなくて、時間がかからなかったのだ。

そもそもがパルテニアは歴史の浅い国で、初代王クィヌス＝パルテニウスの一門も、共に町を築いた最大の有力者エオシアヌス一門

も、帝国時代の貴族ではない。他の家系は言わずもがな。つまり、先祖が遺した美術工芸品などは最初からあまり価値の高いものではないし、数も少ない、というわけである。
国が豊かになった後で、どこか他所から買ったものがあれば別だが、王都を見て回った限りでは、それだけの財力があるのはこの議長と、あとは王宮ぐらいのものだと思われた。
「遠いところをようこそ、お客人」
出迎えたゲニクスは、良くも悪くも政治家らしい人物だった。にこやかで慇懃だが、態度の端々で己の優位を示威している。いざ対面して隣国の文化委員の若さを目にすると、彼はさらにその雰囲気を強めた。まるで強圧的な父親のようだ。だがネイシスはそれに気付いた様子さえ見せず、いつもの淡々とした態度で一礼した。
「調査にご協力いただき、感謝します」
「なに、わざわざ遥か北の果てから来られた客人を、誰も満足させられなかったというのでは、我が国の名折れですからな。ネイシス＝オアンディウス文化委員？」
確かめるように呼びかけたゲニクスに対し、ネイシスは目礼した。ふむ、とゲニクスがうなずく。
「オアンディウス家といえば、共和国の名家だったと記憶しているが」
「仰せの通りですが、私は血のつながりもない傍系に過ぎません」
あっさり返されてゲニクスはやや鼻白んだが、すぐに態度を取り繕い、先に立って奥へと案内した。
公の用向きに使われる部屋が並ぶ廊下を通り過ぎ、普通なら初めての客が立ち入れる筈のない、私的な棟へと進む。ニアナは眉を寄せてネイシスを見たが、彼は無表情のままだった。仕方なく、疑問や不安に蓋をして付き従う。
ゲニクスは二人を書斎に通すと、人払いをしてテーブルを囲んだ。ネイシスはざっと室内を見回したものの、黙ってゲニクスの言葉を待つ。ニアナも彼の視線を追ってみたが、特段目立つものは見当た

らなかった。つまり、部屋から動かせない美術工芸品を見せる為に、ここまで連れてきたわけではない、ということだ。
案の定、ゲニクスはテーブルの上でおもむろに手を組み、商談に臨むかのように身を乗り出した。
「さて。この屋敷にも美術品はあるが、王宮の方がより多くのすぐれた作品を集めている。あちらの調査も、お望みかな」
「むろん、我々にも扉が開かれているのであれば」
ネイシスはあくまでも平静かつ事務的だ。ニアナは感情を顔を出さないように努め、付属品に徹することにした。ゲニクスが何らかの取引を持ちかけようとしているのは明らかだが、それに対してネイシスが――ひいては共和国がどうするのか、ニアナには予測がつかない。
ゲニクスは目を細めてうなずいた。
「確かに、王宮は誰もが自由に出入りする場所ではない。とりわけ共和国の空色をまとった者となれば、かの国を敵視している騎士団長が通さぬだろう。むろん私の推薦があれば、彼も文句は言うまいが」
「お口添えを頂けたら、大変ありがたく存じます」
ひとまずネイシスは深く頭を下げた。が、上げた顔には感謝の色など微塵も浮かんでいなかった。
「ですが私の仕事は、所有者の平穏を乱してまで遂行せねばならぬものではありません。芸術の保護には世情の安定が不可欠。調査の為にあえて危険を冒すのは本末転倒というものでしょう」
琥珀の双眸にひたと見据えられ、ゲニクスは一瞬、怯んだ様子を見せた。だがすぐに、「これは心外な」と苦笑して首を振る。
「私が危険を好むように見えるかね。気遣いには感謝するが、我が身はそれしきのことで脅かされはせぬよ。フィロス騎士団長は私の甥、そして王妃カティアは我が娘。共に私の言葉を無下にはせぬ筈だ。意見の相違はあれども、それを理由に剣を向けるような間柄ではない」

ご理解頂けたかな、とゲニクスは微笑した。虚偽の悪臭芬々たるその笑みを、ニアナは興味深く観察した。
（ふーむ？　あたし達を王宮に入り込ませて、嗅ぎ回らせようって腹かしら。お偉いさんになった身内とは“剣を向けるような間柄”じゃなくても、お互いしがらみがあって、色々知りたくても知れない事情があるとか？）
そこで不意にゲニクスが彼女を振り向いた。心の声が聞こえたかと、ニアナは思わず身を硬くする。
「お嬢さんも、不便な道中を忍んでここまで来たからには、王宮を見たいだろう。彫刻や工芸品に限らず、装飾品にも素晴らしいものがある。王妃の首飾りは――私が与えたものだが、帝国時代の逸品との触れ込みだった」
どうやら単に、与しやすい相手に標的を変えただけらしい。ニアナはにっこり笑顔を返した。
「大変興味をそそられるお話ですね。ただ……」
「そうだろう！」
ゲニクスは都合の良いところでニアナの言葉を遮り、声と笑みを大きくした。
「私が懇意にしている工房では、それを基にした作品を幾つも作っておるのだ。原型となったものよりは劣るが、気軽に身に着けられるとして評判でな。もし本物を見て気に入ったなら、店に紹介しよう」
「ありがとうございます。とても手が届かないでしょうけれど、拝見するのが楽しみですわ」
「なに、小さな作品なら安いものだ。お嬢さんほどの美人に身に着けて貰えるとなれば、首飾りの一本や二本、彼らも喜んで差し出すだろう」
空々しい笑顔で応酬する二人。このままでは押し切られる、とニアナは視線でネイシスに援護を求めた。が、察しが悪いのか何なのか、彼は無表情のまま肩を竦めただけ。ニアナは棘のある笑みを浮

かべた。
「先生、止めて頂けなければ私、首飾りの誘惑に負けてしまいますよ？」
冗談めかして脅しをかける。ネイシスはしらっと受け流した。
「下さるというのなら貰っておけばどうだ、私の給料では首飾りどころか指輪ひとつ買ってやれないからな。とは言えゲニクス殿、優秀な助手を引き抜かれては困ります。そろそろ率直にお聞かせ願いたい。我々を王宮に入り込ませたいと思われる、その理由を」
婉曲さも修飾もごまかしもない、鋭い言葉の一撃だった。ゲニクスは眉を寄せ、彼の真意を探ろうとして睨むような目つきになる。包み隠さぬ発言は強力な武器になる反面、自らを破滅させる危険をはらんでいるものだ。それを分かっていて言ったのか、と。
だがゲニクスの考えに反し、ネイシスは静かな目をしていた。感情も、駆け引きの気配もない。全く純粋に事実のみを求める目。その視線に晒されて、ゲニクスは己の心得違いを悟り、咳払いした。
「……これは、どうやら失礼をしたようだ。議員生活を長く続けておると、率直に話すというのがどういうことか、忘れてしまうのでね」
彼は苦い笑みを浮かべてから、表情を改めて続けた。
「では単刀直入に言おう。美術品調査に関して便宜を図る代わりに、王宮で騎士団長の動きを探り、知らせて貰いたい。貴殿が街の門で咎められることなく市に入れたように、我々参事会は共和国との対立を望んではおらぬのだ」
「しかし、現国王アレイオス陛下が即位なされてまもなく、そちらから一方的に国交を断たれてしまいましたが？」
「騎士団長と、彼に与する一派に乗せられたのだよ。我々は彼の独断専行を防ごうと牽制しているが、近頃どうも、政治を通してではなく密かに動いているような気配が見られるのだ」
ゲニクスは言い、勿体をつけるように間を置いた。両手の指先を軽く合わせ、ネイシスとニアナを交互に見つめる。ネイシスが静か

に問うた。
「確証は？」
「ない。だからこそ、貴殿に探り出して貰いたい。議会に対する工作であるなら我々の手で対抗するし、そもそも内政のこととて、他国の介入を頼るなど筋違い。しかし彼が一人で我々を出し抜き、陥れ、この国を共和国の敵として先鋭化させるつもりなら、そちらにとっても憂うべき事態だろう。協力して解決すべきではないかな」
「……」
ネイシスはしばし黙考した。ゲニクスはそれを邪魔せず、ニアナはむろん一言も差し挟める立場にない。沈黙の後、ネイシスは顔を上げて答えた。
「ゲニクス殿、私は文化委員に過ぎず、外交権限は有していません。ですからあくまで、美術品調査の過程で知り得た事をお伝えする、という程度の協力にとどまりますが、それでもよろしいか」
「結構」ゲニクスは満足げにうなずいた。「私や仲間の議員では、王宮に入った時点で警戒され、秘密はより深い場所に隠されてしまうのでね。騎士団長が……あるいは彼にも仲間がいるのなら、その者らが、何を企みどう動いているのか、それが分かればこちらはこちらで対処する」
「では、調査の進め方は我々に一任して頂きます。具体的に誰をどこまで探れといった指示は受けられません。危険だと判断したらすぐにも中止します。我々は諜報の訓練は受けておりませんので」
「むろん、こちらも過度の期待はせぬよ。貴殿が探りを入れていると気付かれたら、結果的に騎士団長の思うつぼだ。それを口実に共和国に対する警戒を強め、あるいは報復しようとさえするかも知れん。ゆえに私からも頼みますぞ、くれぐれも悟られぬように、と」
「承知しました」
ネイシスは一礼した。気負いも緊張もなく、ただいつもの平静さで。そして、顔を上げると何事もなかったように一言。
「それで、この屋敷にはどのような美術工芸品があるのでしょうか」

「……」

一呼吸の間、ゲニクスはなんともややこしい顔で絶句し、それから苦笑をこぼした。若い文化委員の度胸に呆れたのか、己の不安をごまかすためか、どちらともつかない苦笑を。

（2）

宿に戻ると、ニアナとネイシスは打ち合わせに取りかかった。
「単なる美術品調査だけでは、これまで見てきた内容から察するに、そう長くは王宮に滞在できないだろう。それに、悟られまいとしても、あれこれ調べていればすぐに気付かれる。ある程度の期間は居座れる口実となり、何が目的で嗅ぎ回っているのかをごまかせる、そんな筋書きを用意しておかなければ」
「共和国の為でも議長さんの為でもなく、別の理由で嗅ぎ回ってたんですゴメンナサーイ、って言って許してもらえそうな筋書き、ってことね」
「……まあ、そういうことだ。ゴメンナサーイで済まされる事はなかろうが、少なくとも国王や騎士団長を納得させられる理由が要る」
「口真似しないでよ」
気色悪そうに抗議してから、ニアナはふむと腕組みして考えた。が、第一案を捻り出すより先に、ネイシスが今さらな発言をした。
「君はここで抜けても構わないぞ」
「……は？　何それ。たった三日でもう解雇？　優秀な助手ってったのは心にもない嘘だったわけ？」
「そうじゃない。君は一般人で、共和国にもパルテニアにも属していない。危険な仕事に付き合う義理はないということだ」
ニアナの剣呑な視線にも、ネイシスは動じない。義理はない、と言われたニアナは、途端に頭に血が上るのを自覚した。そこまで腹が立つのはなぜなのか、考えられないまま言葉を吐き出す。
「義理ならあるでしょ、今のあたしはあなたの助手よ。通りすがりの他人じゃない、雇用関係があるの。それとも何か、あなたにとってはあたしを雇ったのも、道端の物乞いに小銭を投げてやったのと同じだってわけ？　ちょっと足を止めておしゃべりしたけど、自分の都合を思い出したらさっさと立ち去ってそれっきりおしまい、そ

んな程度？」
「雇ったからこそ、責任を果たそうとしているんだが」
ネイシスはやや当惑した風情で目をしばたいた。その冷静な口調のせいでニアナはさらにカチンときたが、言っている意味は理解できたので、ぐっと怒りを抑えこむ。自分の感情に巻き込もうとしても、彼には通用しない。一人で疲れるだけだ。とは言え、一度沸騰した怒りはすぐにはおさまらない。
「……そういうのがムカつくって言ってんのよ」
余熱で弾けた泡をひとつお見舞いする。ネイシスは涼しい顔のまま「そうか、すまない」と謝罪した。ニアナは手近にあった枕をつかんで、投げつけてやった。
「ああもう、本当に嫌になる！　大体ねぇ、あなた一人で芝居を打てる自信があるの？　嘘の口実をでっち上げる時点で、無理なんじゃないかって思うんだけど。それとも、もう既に何か良い考えがおありなんですかね、先生」
「まだないが、二、三日あれば何かは思いつくだろう」
ネイシスは受け止めた枕をそのまま抱えて、自信なさげに応じる。その様に、ニアナは思わずふきだした。腹を立てたのが馬鹿らしくなり、やれやれと苦笑する。
「正直ね。そんな様子じゃ、あたしをクビに出来やしないわよ、お生憎さま。こっちは早速、いくつか筋書きを考え付いたんだけど……聞かせて欲しい？」
「今のやりとりの間に考えたのか？　君の頭はどうなっているんだ」
ネイシスは呆れながら枕を元の位置に戻し、やれやれと諦めた風情で身を乗り出した。自尊心にこだわらず、聞かせてくれ、と素直に頼む。
そんな男を今まで見たことのないニアナは、くすぐったいような妙な気分を味わった。
「考えたって言っても、あたしのは今までやった芝居の中から、あれこれ引っ張り出してつなぎ合わせるだけだけどね。たとえばこん

な感じで……」
　そうして彼女があれこれと案を出し、ネイシスがそれを検証する形で、作戦会議は続いた。
　この筋書きではここが無理だ、もしこう突っ込まれたらどう答えるか、相手がこれを知っていたらその時は……。
　状況次第で臨機応変に修正出来るよう余地を残しつつ、必要になるものや覚えるべき事柄などをも加味して、無理のない筋書きを作り上げる。日が暮れてもまだ終わらず、部屋にこもって議論を続け、備え付けの蝋燭が限界までちびて。ようやく妥協点に落ち着くと、ニアナは疲労困憊してベッドに倒れこんだ。
「こんなもんでしょ。あとはもう、出たとこ勝負、ってことで」
「そうだな」
　ネイシスは隣のベッドに腰かけ、出来上がった案を頭の中で反芻しながらうなずいた。
「君の才能には、つくづく驚かされるよ。どうやったら、こうも次から次へと嘘が出てくるんだ」
「……褒めてないでしょそれ。言ったでしょ、あたしの作り話はほとんど全部、芝居からの借り物だって。……それでも、脳味噌ぎゅうぎゅうに絞ったけどね。もう一滴も、何にも出ないわよ」
　ニアナはシーツに向かってもそもそ唸る。指一本動かすのも億劫だ。
「私は褒めたつもりだが。とにかく、本当に君のおかげで助かった。ひとまずゆっくり休んでくれ」
「へーぃ……」
　生返事の語尾がすうっと消え入る。そのままニアナは、暗い眠りに沈んでいった。
　あれこれ頭を使って疲れ切った上に、変な体勢で、着替えもせず眠ったのが悪かったのだろうか。
　久しぶりに、嫌な夢を見た。

出番だぞ、とくぐもった男の声が呼ぶ。
座長だ。夢の中でそう認識し、ニアナは簡易舞台の袖で準備をする。
だが、不意に冷たい不安が背筋を走った。
（何の役だっけ？）
あたしは今、何を演じようとしているのだろう。演目は何だった？　台詞は？
思い出せない。
（あたし今、どこにいるの。何やってるの。いつ出て行けばいいの？）
ああ、皆が見ている。
何か演じなければ。芝居をしなければ。
（急がなきゃ）
早く、早く。何かの役、誰かの影を身に纏わなければ。
（見ないで、まだ、まだ用意が出来てない）
恐怖に駆られて見下ろした爪先が、いつの間にか闇の中にすうっと消えている。
（そんな、待って！　嫌よ、お願い、ちゃんとするから、待って）
くるぶし、すね、膝……ゆっくりと見えなくなっていく。
（やめて、待って！　するから！　ちゃんとするから、許して、）
あたしを捨てないで。
父さん、母さん――

「――っっ！！」
ばちっ、と瞼が開いた。凍りついた悲鳴が喉に詰まって、息が出来ない。
まなじりから涙がこぼれた。熱い滴がこめかみへ流れ、反射的に手が動いてそれを拭う。と、その指先に誰かの指が当たった。
「……？」
まだ靄がかかったままの頭で、現在の状況をぼんやりと思い出す。

こわばった首をゆっくり動かすと、ネイシスの姿が見えた。
（今は……満月だったかしら）
爽涼な薄青い光が仄かに室内を照らし、ネイシスの髪が白銀にきらめいている。
「きれい」
ぽつりと唇が言葉を紡ぐ。無意識にニアナは手を伸ばし、ネイシスの前髪に触れようとした。そして。
「――！？」
ようやくしっかり目が覚めた。
満月だろうとなかろうと関係ない。この部屋には、窓がなかったのだから。
ではこの光はいったいどこから？
ベッドの上に身を起こし、ニアナは焦って周囲を見回した。まだ夢の続きにいるのだろうか。咄嗟に足を確かめ、消えていないことにほっとする。
その横顔にネイシスが手を伸ばし、濡れたままの目元をそっと拭った。ニアナは途端に真っ赤になり、ずざっと大きく後退る。はずみで壁にぶつかりそうになったのを、ネイシスが腕を伸ばして止めた。
「あ、う、ごめっ」
もごもご謝ったニアナに、ネイシスは小さく肩を竦めて静かに答える。
「夜中に騒ぐと迷惑だからな」
「……そう思うんなら、騒ぎを起こさせる振る舞いはやめてよね」
ああもう全く、この男は。
ニアナはがっくり脱力しそうになったのを堪え、眉間を押さえた。うなだれて深くため息をつき、軽く頭を振る。顔を上げた時も、やはり室内は薄明るく、ネイシスはただ無表情にじっと彼女を見つめていた。
「この光、あなたが？」

ニアナがささやくと、ネイシスはうなずいた。
「朝まで、弱く灯しておこう。悪夢を寄せ付けないように」
「……ありがと」
色々と訊きたいこと言いたいことはあったが、ネイシスの言葉通り、夜中にしゃべっていては、隣室から苦情が出る。あまつさえ様子を見に来られたりしたら、大変だ。ニアナは小さく礼だけ言って、またごそごそと横になった。
目を閉じるとすぐに、眠気が差してくる。不思議と悪夢の記憶は薄れ、穏やかな気持ちになっていた。涼やかな光が心の中にまで沁みとおり、清めてくれたかのようだった。

（3）

翌朝、ニアナは目が覚めてもすぐには起き上がれなかった。節約のためとは言え同室に泊まったのが悔やまれる。どんな顔をして、お早う、と言えば良いのか分からない。

（ああもう不覚！　泣き顔を見られるなんて）

恐らくニアナがどんな顔をしていようと、ネイシスの方はいつもと変わりないだろう。それは予想がつくのだが……。

そっと体の向きを変えて盗み見ると、既に隣のベッドは空だった。取り越し苦労にため息をこぼし、むくりと起き上がって髪を梳かす。服は昨日のままなので、ちょいちょいと引っ張って整えた。

なんとなく人目を憚りながら共用の手洗い場へ向かい、甕の水を柄杓で汲んで顔を洗う。宿の者が早朝に井戸から汲んできたのだろう、まだひんやりと冷たかった。

少しさっぱりした気分で部屋に入ると、いつの間にかネイシスが戻って荷物を整理していた。どこかに隠れて様子を窺っていたのじゃなかろうか、と、ついニアナは疑ってしまう。

複雑な気分で立ち尽くしたニアナに、ネイシスが振り返って短く言った。

「起きたか。お早う」

予想通り、いつもと何ら変わらぬ無表情だ。変に優しく微笑まれたりしたら、恐怖のどん底に突き落とされるところだから、この態度はありがたいと言えばありがたいのだが、しかし。

「……おはよ」

とりあえず返事だけして、ニアナはベッドにぼすんと腰を下ろした。自分の荷物は小さな鞄ひとつ。片付けねばならぬほどの中身もない。

ネイシスの方は、これまでの調査記録と思しき紙束だの、筆記具だの、替えの衣類一揃いだのと様々あるので、時々首を傾げて考え

ながら荷造りをしている。
　ニアナは黙ってそれを見物していたが、ややあって自分から言い出した。
「何も訊かずにいてくれるのはありがたいんだけど、皮肉のひとつぐらい言ってくれた方が気楽なんだけどな」
「どんな？」
　ネイシスは鞄の相手をしながら問い返す。ニアナは肩を竦めた。
「君ほど図太くても悪夢を見るのか、とか。オバケが怖かったのか、とか」
「誰でも悪夢は見る」
　ネイシスは静かに、しかし断固とした声音で応じた。
「厚顔無恥で図太い態度の者にも、あるいは非常に恵まれた生活のゆえに恐れ知らずと見える者にも、等しく悪夢は訪れる。不安や後悔を感じない人間など、いない」
「……そう、よね……」
　ニアナは同意のつぶやきをこぼし、うつむく。だがすぐに顔を上げ、おどけた笑みを浮かべた。
「あたしとしては、そこにあなたも入ってるっていうのは、ちょっと信じられないけどね」
「ひどいな」
　流石にネイシスが傷ついた顔をして、振り返った。ニアナは笑って、片手だけ拝むふりをする。
「ごめん、ごめん。だってネイシスってば、あんまり自信満々に見えるんだもの。何があっても必ずどうにか対処出来るっていう、自分の力に確信がある人に思えるのよね」
「もし本当にそうなら、行きずりの怪しい旅芸人に助力を請う必要もなかっただろうにな」
「……それ、お得意の『事実』なんでしょうけど。正直は必ずしも美徳じゃないって知ってる？」
「もちろん。今のはただの厭味だ」

ネイシスはしらっと答えて、鞄を肩に提げた。ニアナが振り上げた拳も、どうやら目に入っていないようである。
「さて、食事を済ませたらゲニクス殿の家に寄って首尾を確かめて、それから王宮へ行ってみよう」
「その前に一発殴らせてくれないかしら、ネイシス先生」
「手を傷めるからやめておけ」
「じゃあ爪先を踏んづけるわ」
ちくちくと剣呑な応酬をしながらも、ともかく二人は階下で朝食と支払いを済ませた。そして、いざ出発――となったところで、いきなり邪魔が入った。
「何かしら、騒がしいわね」
外の通りから迫り来る、複数の重い足音。不吉な予感がしてニアナは顔をしかめた。あれは恐らく、武装した兵士だ。丈夫な靴を履いた頑健な足が立てる低音に、金属の触れ合う高音が重なっている。そして、獲物を狙う特徴的な歩調。
「どうしよう、やばいことになるかも」
ニアナがささやくと、ネイシスは落ち着き払ったまま、壁際に退いた。
「邪魔をしなければ問題ないだろう」
「あなたが目当てってことはない？　議長さんの説得が逆効果になって、捕まえに来たとか」
「だったら、王宮におびき寄せて捕らえる方が簡単だろう。街中で騒ぎを起こして、市民に疑念を抱かせることもない」
「あ……そっか、そうね。でも……」
「心配ない。宿に監視がついているのは分かっていたが、今日まで何の動きもなかったし」
「監視？　嘘、本当に？」
「本当だ。私を警戒してのことでは、ないようだが」
「なんでそう言えるのよ。ちょっと、巻き添え食わさないでよね、あっち行って。他人、他人！」

しっしっ、と手を振りつつ、ニアナは横歩きに数歩離れる。ネイシスは眉を上げたが、抗議はせずに黙って宿の戸口を見やった。
その視線に答えるように、厳しい顔つきの男たちがずかずか入って来た。パルテノスの街と王宮を守護する騎士団だ。先頭の男が指示を出し、部下数人が機敏に階段を駆け上がる。
居合わせた客は何事かとざわつき、顔を見合わせたが、宿の者は慣れているのか、事前に知らされていたのか、慌てる様子もない。すぐに済みますからご心配なく、などと、動揺する客をなだめている。
ニアナは不安げにネイシスをちらっと見たが、彼は騎士団の動きに注目したまま、身じろぎもしない。本当に逃げなくてもいいのだろうか、とニアナは心配になったが、ここで慌てて出て行こうとしたら、かえって悪い結果になるだろう。じっと我慢するしかなかった。
ややあって階上から荒っぽい物音が響き、じきに騎士たちが一人の男を連れて降りて来た。見る限りではこれといって怪しい風体でもない、普通の旅行者だ。しかし今は猿轡をかまされ、後ろ手に縛られて、不安と恐怖と屈辱に目を潤ませている。男は助けを求めて階下の全員を次々に見つめたが、むろん、誰も声ひとつ上げない。そのまま彼は両脇から腕をつかまれ、強引に外へと連れ出された。
「団長、室内の確認、終了しました」
若い騎士の報告を受けて、指揮官がうなずく。彼はゆっくり一同を眺め回して慇懃かつ鷹揚に一礼した。
「お騒がせしました。ご協力を感謝します」
「あの……」
そんなつもりはなかったのに勝手に声が出た、という風情で、客の一人がおずおずと問うた。団長に目を向けられて、縮こまる。
「今の人、何をしたんですか」
「窃盗です。皆さんも宿を発たれる前に、所持品が紛失していないか、確認された方が良いでしょう。被害があれば王宮の騎士団詰所

までご連絡を」
物言いは丁寧だが、声からも表情からも、それ以上の質問を許さない雰囲気が滲み出ていた。他の騎士より明らかに金のかかった鎧と剣が発する威圧感も相まって、その場に重い沈黙が降りる。
ニアナは壁際に引っ込んだまま、出来るだけ我関せずの態度を装った。本当にただの窃盗なら、猿轡までは必要ないだろうに――そんな疑いは、どこかの藪へ投げ込んでおく。
余計な事は何も言いません、見てません、聞いてません。だから早くお引取り下さい。
ニアナは心の中で呪文のように繰り返していたが、残念なことに、効き目がなかった。団長は部下に一通りの指示を出すと、さて、という風情で壁際の二人に歩み寄ってきたのだ。
「失礼、お見受けするところ共和国の方と拝察いたしますが、もしや……？」
正体は既に知っているのだろうに、白々しい。だが少なくとも、礼儀正しさを装うぐらいの配慮はあるようだ。対するネイシスも、いつも通りの平静さで頭を下げた。
「共和国で文化委員の職を務めております、ネイシス＝オアンディウスと申します。どうぞお見知り置きを」
「これは、ご丁寧に。私はフィロス＝エオシアヌス＝ルヴェラ、パルテニア騎士団長です。参事会議長から知らせを受け、お迎えに上がりました」
フィロスはにこりとして恭しく一礼した。目まで届かない笑みにも、仕草の端々にも、静かな警戒が滲んでいる。あからさまに敵対する意志はないが、親しみを示すつもりはない、何かあればすぐにも剣を抜く――そう身構えているのが伝わってきた。むろん、それで態度を変えるネイシスでもなかったが。
「騎士団長ほどの方を煩わせてしまうとは、恐縮です。お仕事を妨げたのでなければ良いのですが」
「とんでもない。やんごとなき客人を国王陛下にご紹介するとなれ

ば、むしろ栄誉なことですよ。さあ、参りましょうか。そちらのお嬢さんも……助手の方で間違いありませんな？」
「はい」ニアナは素早く見えない衣をまとった。「若輩者ですが、貴重なこの機会に勉強させて頂きたく存じます。よろしくお願い致します」
「ふむ。なんなりと、不自由があれば申されよ」
騎士団長は鷹揚にうなずいて、外へと促す。そのまま三人は連れ立って王宮へ向かった。
通りを行き交う人々が、フィロスの姿を認めると、慌てて道を譲る。ある者は恐れと警戒から、また別の者は恭しい敬意を込めて。どうやら騎士団は、治安維持の役割を概ね上手く果たしているようだ。悪人には恐れられ、善人には慕われ――ただし、善悪の基準がどこにあるかは別問題として。
ニアナはそんなことを観察しながら、大人しく歩き続けた。

（4）

ほどなく、行く手が開けた。町を南北に縦断する大通りの中央、公共井戸を備えた広場だ。ぴったりと敷き詰められた石畳は清掃が行き届き、広場の周囲に配された大きな建物は、どれも民家とは別の国のように立派だ。

たとえばニアナが泊まった宿は、網代に泥塗りの壁と茅葺屋根という、北部の伝統的かつ安上がりな建築だが、行く手の見事な列柱は白い大理石。大地の女神ネーナの神殿だ。そして、その横に倍する規模で門を構えているのが王宮だ。騎士の門番がいるからすぐ分かる。

近付いて行くと、王宮も神殿も、まだ完成してはいないことが分かった。外から目に付くところは既に整えられているが、奥を覗くと、足場の影や、積まれている木材などがちらほら見える。

（そっか、まだ八十年足らずだもんね。これだけ見栄を張っちゃ、終わらないわけだわ）

簡素な建物ならとうに完成しているはずだが、王宮に相応しい規模・装飾を、とこだわったせいで、いまだに工事中らしい。

（とりあえず敷地だけは広く確保したか……向こうが見えないじゃないの）

さり気なく目を配りながら、門と館の間に横たわる庭を歩く。本館のほかにも離れなどがあるらしく、庭木の奥にも白い壁が見え隠れしていた。迷子になりそうだ。

正面の玄関から中に入ると、広々としたホールにどっしり据えられた巨大な像が、客を出迎えた。思わずニアナは頓狂な声を上げそうになり、慌ててそれを飲み込む。前でネイシスも、無言のままのけぞっていた。

「これは……」

ようやくネイシスが声を漏らす。二人を驚かせたフィロスはご満

悦の様子で、どうです、と自慢げに像の足元へ歩いていった。
「見事なものでしょう。初代パルテニア王、クィヌス＝パルテニウスです」
ぽん、と叩いたのは、青銅の足である。腰高の台座を踏みしめて立つ王は、等身大より一回り大きく、爪の一枚から巻き毛の溝まで、くまなく輝く黄金色。
（うぁ……きっと毎日朝晩、召使が汗水たらしてぴっかぴかに磨いてるんだわ）
ニアナは内心ひそかに同情したが、文化委員の助手という衣がそれを隠した。ネイシスは早くも驚愕から立ち直り、いつもの平静さで像のまわりを一巡しながら鑑賞している。
「帝国時代の技法を確実に受け継いだ職人の手ですね。細部まで丁寧に作られている。この広間に相応しい」
「共和国の方にお褒め頂いたと聞けば、アリュアイオスも喜びましょう」
「作家はまだご存命でいらっしゃる？」
「いや、その息子ですよ。しかし父の跡を継いで修行中です」
話しながら、フィロスは二人を壁際の長椅子へ誘導した。
「お掛け下さい。国王陛下に取り次いで参ります。長くはお待たせしませんよ」
「ありがとうございます」
ネイシスが頭を下げ、ニアナもそれにならう。フィロスは優雅に礼を返すと、奥の部屋へと消えた。
ニアナは早速本音の感想が喉まで出かかったのを押し戻し、あくまで助手らしく、控え目な好奇心でもって室内を観察した。
「今のところ、この像の他に目立った作品はありませんね、先生。これも新しい作品ですし」
「そうだな。邸内の壁画や柱頭装飾には相応の手間をかけているようだが、古美術品を飾る趣味はないようだ。この分なら、あまり長居して王宮の方々を煩わせる必要もないだろう」

予想通り、という声音でネイシスが応じる。計画が上手くいかなければ、ほとんど収穫がないまま王宮を出ることになってしまうだろう。ニアナはやや緊張したが、当のネイシスが相変わらずなので、肩肘張るのも無意味かと力を抜いた。

（ま、なるようになるか）

やれやれと天井を仰ぐ。柱の間にぼんやり溜まった暗がりを通して、そこにも何かの絵が描かれているのが見えた。

（この宮殿を設計した初代の王様って、きっと完成までの年月とか費用とか、なーんにも考えてなかったんでしょうね……）

そもそも初代は生きている間にこの建物の中で暮らせたのだろうか。甚だ疑問だ。

と、扉が開閉する音がして、ニアナは首を下ろした。フィロスではなく、身なりは良いが使用人らしき男が現れ、二人を呼んだ。

「共和国文化委員ネイシス殿、それに助手の方。お入り下さい」

はい、と応じてネイシスが立ち上がる。ニアナもそれに続き、謁見の間へと続く扉をくぐった。

奥にあったのは、およそニアナの予想通りの光景だった。芝居で頻繁に使った大道具と、ほとんど変わらない。床に敷かれた絨毯が視線を奥へ導き、高くはないが歴然たる格差を刻む壇を仰ぎ見る格好になる。並んだ玉座には、国王と王妃が揃っていた。どうやらそもそもが、謁見の時間帯だったらしい。両脇に騎士が控え、フィロスも王妃の後ろに立っていた。

「パルテノスへようこそ、ネイシス殿」

国王がまず口を開いた。玉座にどっしりと腰かけたまま、目だけでわずかに礼らしきものを示す。ニアナは演技を保ったままネイシスと共に頭を下げたが、遊離した意識がどこかその辺の空中から、先日の記憶を投げて寄越すのは止められなかった。

（屋台のヒヒ爺の親戚みたいだわ）

パルテニア国王は五十代の男だったが、でっぷり太っているうえに、頭頂近くまで禿げ上がっていたのだ。金細工の月桂冠を被り、

残った髪をせいぜいふわりと立てて増量しているが、額の照り具合はごまかせない。顔の真ん中には、粘土細工の小山を押し潰したような格好の鼻が、でんと鎮座ましましている。

それでも、温和な笑顔や威厳に満ちた顔つきであれば、印象はもっと違っていただろう。ニアナが一見しただけで国王を屋台の親父と同じところに分類したのは、滲み出る嫌らしさゆえだった。王の地位にありながら、なお貪欲な、視界に入るものすべてを片端から鷲掴みにして懐に入れようと狙っているがごとき、さもしい目つき。

一瞬だが確かに、王の視線が自分の体を上から下まで舐めていったのを感じ、ニアナは嫌悪感を堪えるために歯を食いしばった。

「議長の話によれば、なんでも、古美術品を探しているとか？」

国王が質問し、ネイシスがフィロスにしたのと同様の説明をする。その間ニアナはじっと身じろぎもせず、ひたすら気配を消していた。出来るなら、壁にとまった虫になってしまいたいと念じつつ。

追従やごまかしのないネイシスの言葉は、どうやら関門を突破したようだった。ちくちくと小さな棘で刺しながら探りを入れていた国王の声音が、次第に和らいでゆく。むろん完全に警戒を解くには至らなかったが、ほどなくネイシスは、王宮内を見てまわる許可をめでたく頂戴した。

執事に案内させよう、と国王が言ったのは、退去の命令をも兼ねていた。が、二人が下がるのに先んじて、王妃が口を開いた。

「そこな娘。助手と申しましたね」

尊大な呼びかけに、ニアナはぴくりと肩を動かしたが、表面上は「はい」とあくまで大人しく応じる。王と違って王妃は痩身だったが、きっちり髪を結い上げているため、きつい印象を受けた。実際、口調もそれに違わぬ冷ややかなものだ。

「共和国に仕える者にしては、随分と気ままな身なりをしていること。せめてこの王宮に足を踏み入れる前に、体裁を取り繕う余裕はなかったのですか」

「恐れ入ります」

ニアナはひとまず深く頭を下げ、それから顔を上げてまっすぐに王妃を見つめ返した。
「私の服装がご不快でしたら、お詫び致します。ですが決して両陛下に不敬をはたらく意図があってのことではございません。若輩ながら美術にかかわる者としての、ささやかな矜持でございます」
「矜持？」
「はい。美とは常に時代の先端を行き、変化し続けるものです。私どもが探しておりますのは、過去の美ではありますが、だからこそ、既に完成された美にとらわれることなく、新鮮な視点を維持すべきであると――私はそう考えております」
決して言い訳には聞こえない、堂々とした物言いだった。実際はもちろん、事前に用意しておいた屁理屈である。髪型ぐらいはどうにか出来ても、衣服を新調するだけの金銭的・時間的余裕がないのだから仕方がない。
だがそれも、ニアナにかかると真実の説得力を持つ。王妃は予想外の答えに絶句したが、じきに態度を取り繕い、もちろん分かっていた、とばかりに応じた。
「殊勝な心がけですね。ではその曇りなき眼で、我がパルテニアの至宝をとくと見るが良いでしょう」
今度こそ、下がってよし、の合図。ニアナとネイシスは畏まって礼を述べ、執事に促されて謁見の間を辞した。

（5）

退室させられたのは、入って来たのとは別の扉からだった。混雑を避けるための工夫なのか、それとも謁見を済ませた者が外で待っている者に入れ知恵せぬように、ということなのか。

（あるいは、玉座の間から自分の足で出て行かなかった人間がいると気付かせない為、だったりしてね）

怖い怖い、とニアナは内心首を竦めた。

事実はどうあれ、執事は親切だった。温和な物腰で二人を先導し、邸内の美術工芸品をひとつひとつ紹介してゆく。この王国よりも古い歴史を持つ物はほとんどなかったが、あれこれと金をかけているのはよく分かった。家具や花瓶ひとつにまで、こだわりが感じられる。

壁画や置物の間をさまよう内、徐々にニアナは遅れはじめた。あれこれに目を奪われて、ネイシスよりも各所で少しだけ長く立ち止まっている間に、距離が開いていたのだ。

やがて、気付けば前を行く二人の背中は廊下の向こうへ消え、案内の執事の声さえも届かなくなっていた。

「あら……」

ニアナは小さくつぶやき、きょろきょろと辺りを見回す。順当に考えればあちら、と思われる方向をあえて無視し、彼女は庭へ目をやった。小首を傾げ、ふむと考えてから歩き出す。鋭い耳が微かな物音を捉えたのだ。

じきに音の正体が明らかになった。少年の「やっ！」「はぁッ！」と勇ましい気合、木剣か棒であろうものがぶつかる乾いた音、隙を窺って忙しなく動く足さばき。誰かが鍛錬中らしい。

ニアナは人を探している風情で辺りを見渡しながら、邪魔をしないよう静かに中庭へ出た。

「遅いよ、エディ！　手を抜かないで！」

「勘弁してくれよ、剣は……苦手、なんだって」
そこでは予想通り、少年と青年が手合わせの最中だった。
金髪の少年は十代半ばほど。相手をしている青年は二十歳ほどだが、どうやらあまり体を動かすのは得意でないらしい。普通なら年長者が稽古をつけている場面だが、彼らの関係は逆のようだ。
カンッ、と大きな音が響き、青年の手から木剣が飛んだ。青年は肩で息をしながら、やるせなく天を仰ぐ。少年が容赦なく、その胸元に剣の先を突きつけた。
「早く終わらせようと思って、わざと負けたね？　ちゃんと分かるんだ、ずるをしないで」
「まさか。本当に私は駄目なんだって。ティルほどの才能はないんだよ」
エディと呼ばれた青年は両手を上げて降参する。少年、ティルは、しかめっ面で青年を睨んだものの、相手の栗色の髪が汗でべったり額にはりついているのを見ると、それ以上は無理強いすることも出来ず、剣を下ろした。
ニアナはそんな二人のやりとりを微笑ましく眺めていたが、観察すべきところはしっかりと見ていた。
二人とも、身なりは普段着なりに上等のようだ。それに青年の方は、髪と鼻こそ王妃譲りなものの、全体として国王によく似ている。落とした剣を拾おうとしてニアナに気付いたその顔は、しかし、父親と違って無邪気な驚きを浮かべた。優しげな目が丸く見開かれ、次いで頬にさっと朱が差す。ティル少年も振り向き、こちらは警戒に眉を寄せた。
ニアナはいつにも増して愛想良く魅力的に微笑み、一礼した。
「お邪魔をして申し訳ありません、両殿下」
「いえ、あー……はは、みっともない所を見られてしまいましたね」
エディ青年は恥ずかしそうに頭を掻いて、もじもじ照れ笑いを返す。少年はそんな彼にちらと呆れた目をくれてから、ニアナの間近までずかずかと大股に歩み寄った。

「誰の許しを得てここに入った？」
「ティル！　女性に対して、そんな喧嘩腰にするものじゃないよ。失礼、私はエディクス＝パルテニウス＝クィヌス。ご存じの通り、パルテニア王の次男です。こちらはティリウス、弟です。初めまして」
「畏れ入ります」ニアナは優雅にお辞儀をした。「私はニアナと申します。共和国から、文化委員ネイシス先生のお供で参りました。邸内の美術工芸品を見学しておりましたが、見とれている間に案内の方とはぐれてしまいまして……お声がしたものですから、ついこちらに」
　予想通り、文化委員なる肩書きに二人から疑問が投げかけられる。ニアナはすらすらと、ネイシスの言葉をそのまま拝借して答えた。台詞の暗記が得意な役者の面目躍如というところだ。
　ティリウスはまだ不審げな顔をしていたが、エディクスの方はすっかり感激し、「素晴しい！」と歓喜の声を上げた。
「立派なお仕事ですね。後代に伝えるべき優れた芸術を保護するのは、為政者の務め。我が国でもそうした委員を設立すべきかも知れません。恥ずかしながら、帝国の遺産は多くはありませんが……」
「帝国時代の遺産だけが価値あるもの、とは限りません。拝見した調度品や壁画、彫刻、どれも大変優れたものです。王宮の方々は、確かな審美眼をお持ちなのですね」
　お世辞ではなく本心に聞こえるよう、ニアナはいたって真面目に応じた。丸っきりの嘘でもない。多少悪趣味に思えるものも無きにしもあらずだが、素晴しい作品も同じぐらいはあったのだから。
　しかし気遣いは無用だったようだ。エディクスは微かに苦笑し、いや、と首を傾げた。
「どうでしょうね。芸術にかける費用を惜しんではいませんが、帝国時代の傑作のように、歳月の試練を生き延びるものが、この王宮にあるかどうか。とは言え、今のところ素晴しいと思えるものがあるのも事実ですね。そうだ、小さなものですが、私も古い工芸品を

持っているんです。自室の燭台なんですが……良かったら、ご覧になりませんか」
　思い立ったが吉日とばかり、いそいそとエディクスが誘ってきた。ニアナは無邪気を装って目をしばたたかせ、返事を保留する。案の定、横からティリウスがげんなりと口を挟んでくれた。
「エディ、浮かれすぎ。初対面の女の人を部屋に誘うなんて、王子の振る舞いじゃないよ」
「えっ！？」
　心底驚いた様子で、エディクスは目を丸くする。それから、苦笑を噛み殺しているニアナに気付き、かあっと耳まで赤くなった。
「そ、そんなつもりじゃない！　ニアナ殿、ご、誤解しないで下さい、私はただ、その」
「承知しております。殿下の誠実なお人柄は、既に充分伝わりましたから。ですが確かに、高貴の御方が私ごとき卑しい者を気安く招いたりなさっては、誤解の元になるでしょう。身に余る光栄ですが、辞退させて下さい」
「卑しいだなんて……」
　エディクスはしゅんと萎れた顔をする。距離を置かれて傷ついたらしい。どこまで人が好いのかと、ニアナは表情を取り繕うのに苦心した。弟のティリウスの方が、よほど世間ずれしているようだ。少年はため息をついて、頭を振った。
「そもそも、共和国の役人を部屋に招くこと自体がおかしいだろ。少しは王子の自覚を持って欲しいよ。美術品がどうとか言って、実際には何を探りに来たんだか、わかりゃしないのに」
「ティル、失礼なことを言うんじゃない」
　途端にエディクスがたしなめる。ニアナは「良いんですよ」と仲裁した。
「ティリウス殿下のおっしゃることは、至極ごもっともです。とは言え、その『何を探りに来たんだかわかりゃしない』のを目の前にして、声に出してしまうのはどうかと思いますが」

「分かっていて言ったんだ。俺はこそこそ隠し事をするのは嫌いだし、わざと泳がせて様子を見るとか面倒な事もしたくない。おまえが悪人なら、この剣で追い払うだけだ」
ふん、とティリウスは鼻を鳴らした。思わずニアナは、作り物でない純粋な笑顔になってしまった。
「勇ましくていらっしゃいますね、殿下。明朗率直であるのは政治家向きではないかもしれませんが、人の信頼を勝ち得られましょう。ですから私も正直にお答えします。ええ、確かに美術品だけが目的ではありません」
あっさり白状したニアナに、当のティリウスが拍子抜けしてぽかんとする。エディクスは不安げに辺りを見回した。
「ニアナ殿、そのような事をおっしゃって、大丈夫なのですか」
「構いません。先生もご承知ですから。もちろん私達は、美術品の保護を第一の目的として各地を渡り歩いております。ですがその目的のためには、行く先の土地がどのような情勢にあるのかをも知らなければなりません。強引に買い取ってでも保護すべきなのか、現所有者に任せておいても安心なのか、判断がつけられませんから。ですから必然的に情報収集も行うことになります。ただそれが、場合によっては為政者の反感を買ってしまいますので、なるべく事情を明かさず、ただ美術品だけに専心しているように振舞っているんです」
逃げ隠れせねばならない事はしていませんよ、とニアナはティリウスに笑いかけた。
「率直に問うてこられた場合には、こちらとしても包み隠しはいたしません。その方がお互い、信頼を築けるものと存じますので」
「……」
ティリウスは相手が上手だと認めたくないらしく、渋面になる。だがニアナに笑みかけられて、仕方なく降参した。
「そうかも知れないな。少なくともおまえは正直だ。エルファレニア共和国の役人なんて、信用できないと思っていたけど」

「あら、なぜですか」
ニアナは目をぱちくりさせた。自分のような流れ者でも、なんとなくではあるが、共和国は良い国だ、という認識がある。幼い頃に竜を見て憧れたということを差し引いても、断片的な噂を総合する限り、まともな議会政治が機能し、商売も農牧業も安定しているらしいのだが――だからこそ、隣人としては胡散臭く思えるのだろうか。
ティリウスは木剣をもてあそびながら、しばし沈黙した。どこまで正直になって良いのか、少年なりに推し測っているのだろう。ニアナはその足元に片膝をついて、臣従の礼をとった。
「お聞かせ頂ければ、私達も今後のことを考えられます。他人に聞かれたくないことでしたら、誓って、私ひとりの胸におさめておきましょう」
「本当だな？」
「はい、この通り」
ニアナは右手を上げて誓いの仕草を見せた。ティリウスは兄にちらっと目をやってから、決心したように口を開いた。

（6）

「あの国には、天竜がいる。だから闇の獣が嫌って寄り付かず、こっちに流れてくるんだ。共和国の連中はそれを知っていて、自分達だけ安全なら良しとしている。だから信用ならない」

「闇の獣が？」

ニアナは予想外の答えに、正直な驚きを顔に出した。

闇の獣、あるいは闇の眷属と呼ばれる生き物たちは、太古の昔、人間と地上の覇権をめぐって争い、敗れたと言われている。今もその生き残りは、深い森や谷や沼地にひっそりと隠れ住み、夜陰に紛れて人の命を貪り食うのだ、と。

ただ彼らは、光のない闇から出てこないため姿が見えず、正体もよく分かっていない。ゆえに大方の人間にとって、それは子供を寝床に追いやる口実にすぎない、昔話のオバケ程度の存在なのだ。八十年前の帝国の崩壊にも彼らがかかわっていたと噂されているが、誰も真偽は知らない。

ニアナはエディクスに目顔で問いかけ、真面目なまなざしを返されて、首をひねってしまった。どうやら、子供の妄想ではないらしい。笑ったり、いなしたりしたら、得たばかりの信頼を即刻失うだろう。ニアナは難しい顔で言った。

「この国の隅々まで回ったわけではありませんが、それでも私はパルテニア国内で十日以上は過ごしています。その間、そうした噂は聞かれず、もちろん夜中にそれらしきものと遭遇したこともありませんが……実際に被害が出ているのですか？」

「おまえも、闇の獣がどういうものかは知っているだろう。奴らの仕業だと断定できる証拠なんてない。だが夜中に人がいなくなったり、昨日まで元気だった者が翌日にはすっかり気力を失って死人同然になっていたり、そんな事がこの王都でさえ起きているんだ。月のない夜に、青い光が踊るのを見たという者も少なくない」

「明かりを灯していても駄目なんですか」
田舎の農村ならともかく、王都のような、終夜どこかで火が焚かれているであろう場所に、闇の獣が現れるのだろうか。ニアナは不審げに問うたが、エディクスが首を振って答えた。
「どんなに篝火を並べても、陰は出来ます。それに、何百もの松明を城壁に毎晩並べたら、瞬く間に燃料が尽きてしまいますから。神殿の祭司も、我が国ではもう長らく持ち回りの役員が祭礼を行っているだけで、専任の者がいません。だからか、篝火にネーナ女神の祝福を授けて貰っても、効き目がないんです」
「……深刻ですね」
どこかがおかしい。ニアナは直感的に歪みを嗅ぎつけたが、それを口には出さず、ただ二人への共感をこめて唸った。
これまで訪れた町や村でも、獣避けの篝火は必ずあったが、エディクスの言う通り燃料の問題があるため、数はごく少ないものだった。
主要な建物の戸口に松明を一本。町を貫く大通りの両端に一本ずつ。闇を退けるためというより、野の獣や、疫病その他の悪運避け、あるいは山賊対策などを兼ねた、一種のおまじないと言って良い程度の明かり。それが普通だった。
（でもここでは、街中にもちらほら明かりがあったっけ）
夜中にうろつくのは賢明でないから、外に出てはいないが、宿で就寝前に外を見た時など、小さな明かりがいくつも見えた。さすが賑やかな街だ、としか思わなかったが……。
（でも、本当に闇の獣なの？　同じ人間の仕業ってことは？）
騎士団に連行された男の記憶が脳裏をよぎる。ニアナは不快な想像が膨らむのを、理性で押さえつけた。もしこの想像が当たっているとしても、明らかに、眼前の二人は何も知らされていない。
ニアナはもう少し考えるふりをしてから、顔を上げた。
「残念ながら、私はこの方面の問題には詳しくありません。ですがネイシスなら何か知っているでしょうし、対策を考えられるかも知

れません。それとなく訊いてみましょう。人々の暮らしが脅かされているのに、他人事だと放置するわけには行きません」
「ネイシス？」
ティリウスがつぶやいて、眉をひそめる。あっ、とニアナは失言に気付いたふりで口元を覆った。
「おっと……呼び捨てにしたことは秘密にしてくださいね。あの先生は時々、我慢ならない奴になるものですから」
おどけて声を潜め、人差し指を唇につける。エディクスが失笑し、ティリウスもようやく少し、愉快げな気配を目元に浮かべた。
「噂をすれば影、ですよ」
エディクスがささやいて、ニアナの背後に視線をやる。ニアナも振り返り、建物の中からネイシスが出てくるのを認めた。陽光の下で、金髪がきらきら眩しい。あれを一晩中外に立たせておいたら、闇の獣避けになるんじゃなかろうか、などと考えて可笑しくなる。
だがこちらへ来たネイシスは笑うどころか、はっきりと不機嫌だった。
「ニアナ！　何をしているんだ、探したぞ。失礼をしなかっただろうな」
まるで最前の会話が聞こえていたかのようだ。見事なまでに、嫌な上司そのもの。ニアナは「申し訳ありません」と恐縮しながら、ほらね、とばかりの目を二人の王子にちらっと向けた。ネイシスが眉を寄せ、詰問しようとしてか口を開く。エディクスがそれを制した。
「あなたが文化委員のネイシス殿ですか。初めまして、私はエディクス、こちらがティリウス。ともにパルテニア王の息子です。ちょうどニアナ殿から、大変興味深いお話を伺っていたところですよ。美術品の保護とは、立派なお仕事ですね」
「畏れ入ります」
王子の仲裁に逆らってまで、小言は続けられない。そんな渋々の風情で、ネイシスは深く一礼した。

お定まりの挨拶と社交辞令をいくつか交わし、ニアナは和やかに二人の王子と別れた。ネイシスは小言こそひっこめたものの、相変わらずむっつりと不機嫌なままだ。
「執事は仕事に戻ってしまったぞ。こっちだ。王宮の客室に滞在させて頂くことになった」
「良かったですね、先生」
「助手がはぐれたせいで、見学を途中で打ち切るはめになったからな」
棘のある皮肉をくれるネイシス。ニアナは首を竦め、あとは黙ってついて行った。
あてがわれた客室に入ると、ネイシスは隣室や廊下をざっと見渡してから、鞄を下ろして一息ついた。
「思ったよりも工芸品の数が多い。帝国時代の物も紛れ込んでいたから、まとめるのに時間がかかりそうだ。まだ見せてもらっていない部分も多いから、予想より日数をかけられそうだな。君の方はどうだった？」
静かな声で淡々と話す口調も表情も、いつも通りの無感情。ニアナも芝居は終了とばかり、砕けた態度に戻った。
「王子様に出会えたのは幸運だったわね。玉の輿を狙えないかしら」
「……」
「冗談よ、いちいち見つめないで。厚かましいとか呆れてるんでしょ」
「玉の輿に乗りたいのなら、仕事の邪魔をしない限り好きにしてくれ。君なら簡単だろう」
「本っ当、むかつく男ね。はぁ……首尾はまずまずってところよ。意外とすんなり信用されちゃったみたい。いくつか仕込みはしておいたけど、その必要もないかも。普通にお友達になれちゃったりして」
ニアナはベッドに腰を下ろし、肩を竦めた。ネイシスは早速と筆記具を出し、本来の仕事にかかるべく、机に広げている。

「そうだな。二人とも、かなり君に心を許している様子だった。君の演技力には恐れ入るよ。何か聞けたか？」
「あんな短時間で何を聞きだせると思ってるのよ。分かったのはエディ君がお人好しだってことと、パルテニア王家は美術品に金を注ぎ込んでるらしいってこと、それぐらいね。あとは極秘情報がオマケにひとつ」
「……？」
ネイシスが椅子に座ったまま振り返る。ニアナはわざと間を置いてじらしてやったが、相手が催促もせずにまたくるりと机に向き直ったので、脱力しそうになった。
「ちょっと、お兄さん。興味ないの？」
「興味はあるが、私に対しても極秘なんだったら、無理に聞き出すつもりはない」
「……律儀なんだか、クソ真面目なんだか、馬鹿なんだか……。別に話せないとは言ってないでしょ。ただ、ティル殿下に、他人には内緒にするって誓っちゃったから。直接的には話せないけど、察してよね」
「分かった」
うなずいて、ネイシスはふたたびニアナに向き直る。琥珀色の目に見つめられ、ニアナは思わず怯んで顔を背けた。見透かされているようで、このまなざしはどうも苦手だ。目を合わせず、部屋の隅を眺めたままちょっと考える。それからゆっくり口を開いた。
「ねえ、昨夜あなた、蝋燭もないのに明かりを灯したわよね。光の精霊の加護があるからだ、って言ってたけど、ほかにどんなことが出来るの？」
「大した事は出来ないぞ。閃光や陽炎を生じさせる程度だ」
「あー、夜の間、闇の獣を追い払うとかは？」
ニアナの声の白々しい調子で、ネイシスも“極秘”の内容を理解したらしい。しばし黙考してから、慎重に答える。
「むろん可能だ。篝火代わりに光を灯して退けることもだが、光そ

のもので照らさなくとも、彼らが近寄りにくいよう、光の力を地面や壁に宿らせることも出来る。と言っても、効果が及ぶのは限られた時間と範囲だけで、広範囲から完全に闇の眷属を追い出すのは、たとえ竜の力をもってしても不可能だ」
「え、そうなの？」思わずニアナは目をしばたいた。「共和国って、天竜がいるから闇の獣は現れないものだと思ったんだけど。だからほかの土地より平和で、栄えてるのかしらって」
「そうじゃない。共和国では闇の眷属と共存していけるよう、様々な工夫と努力を続けている。その成果だ。そもそも彼らは、我々昼に属する生き物が際限なくはびこらないよう、夜の間に活気を鎮め力を落ち着かせる存在なんだ。人間が本能と欲望のままに地上を食い荒らしたりしなければ、彼らも必要以上の攻撃はして来ない」
「……本当に？」
「本当だ。事実、帝国が崩壊して昔ほど社会の活気がなくなった今は、それほど被害が出ていないだろう。君だって、今まで彼らに遭遇した経験は殆どないと思うが」
「そうなのよねぇ。でもこの街は賑やかだから、いよいよ初お目見えするかも。出くわしたら助けてくれる？」
　おどけてニアナが問うと、ネイシスは真顔のまま「もちろん」とうなずいた。あまりに迷いのない返事に、訊いたニアナが赤くなる。照れ隠しに仏頂面をして睨みつけるしかなかった。
「どうせそれ、何の含みもない単純な義務としての『もちろん』なんだろうけど、何て言うかこう……もうちょっと、言い方を工夫してくれない？　それじゃまるで、王女に仕える騎士みたいよ」
「そういう話にするんじゃなかったか？」
　ネイシスが珍しく、笑いを含んだ声で応じる。ニアナは今度こそ本当に苦虫を噛み潰した。
「つくづく可愛くないわね。見てらっしゃい、今に吠え面かかせてやるから。ともかく王女の件だけど、さっきも言ったように使わなくて済むかもしれないわよ。王子様と普通に友達になれちゃったら、

あえて芝居を打たなくても色々聞けるわけだし。あたし達は情報を仕入れるだけ仕入れて、あとは議長さんに任せてサヨナラすればいいんだものね」
「関り合いにならずに済むなら、それに越したことはない。確かに」
ネイシスは同意したが、言葉とは裏腹に、口調は否定的だ。ニアナもその理由は分かるので、黙って肩を竦めた。
あまり深入りしたくないと願っていても、物事は往々にして、始めるよりも終わらせる方が難しいものだ。情報を掴める深さまで手を突っ込んでおいて、無傷で腕を引き抜けると考えるのは、甘すぎる。
ニアナは軽く首を振って、深刻な気分になりかけたのを払った。
「まぁ、もうちょっと様子を見ましょ。まだほんの小手調べをしただけなんだし。さてそれで、ネイシス先生がお仕事なさっている間、あたくしは如何致しましょう。おみ足を揉みましょうか、お召し物を洗濯しましょうか」
大袈裟に卑屈な態度をとったニアナに、ネイシスは胡乱な目をして、やれやれとばかりため息をついた。
「毎度毎度、君の冗談に付き合うのも疲れるな……」
「いつ誰が付き合ってくれたのよ、ちょっと！　そこんとこ日付順にはっきりさせてごらんなさい、え！？」
「いいから、助手らしく仕事の手伝いをしてくれ。とりあえず固形インクを溶かすのに水を」
「はいはい、承りましたすぐにお持ち致しますっ！　どうせ下っ端助手の憤懣なんて、お役人様先生にとっちゃスープの豆よりどうでもいい程度のことなんですわよねっ」
何やらわけのわからない口調になりながら、ぶつくさぼやいてニアナは水差しを引っつかむ。忌々しいキラキラ頭にぶっかけてやろうかと思ったが、生憎と中は空だった。召使が用意し忘れたらしい。
「廊下を右に行った突き当たりに井戸がある」
さっき見てきた、とネイシスが愛想なくペンで外を指す。ニアナ

はいーっと歯を剥いてから、ずかずか大股に出て行った。
一人部屋に残ったネイシスは、足音が遠ざかるのを待って、軽く目を閉じる。微かな光のきらめきが蜘蛛の糸のように紡がれ、風に乗って拡がってゆく――が、むろんニアナがそれを知ることはなかった。

（1）

四章　嘘と秘密は人の常

明らかに、その日の晩餐は手が込んでいた。
刻んだ野菜と果物をたっぷり詰めた家禽、大きな瓜をくりぬいた器に湛えられた冷たいスープ。木の実や香草を練りこんだパンの横には、蜜が滴らんばかりの焼き菓子。
食卓を囲む王家の面々はこれが日常かのような態度を装っていたが、若い数人の目が輝いているところからして、ご馳走であるに違いなかった。むしろ、借り物の服で同席しているニアナの方が泰然として見えるほどだ。機械的に口を動かしているネイシスも然り。
（こんなに美味しいのに、分からないなんて可哀想に）
ニアナは密かに彼を哀れみつつ、切り分けられた肉をつまんだ。上品な所作は芝居で稽古済みである。指導した座長が貴族の作法を知っていたわけはなかろうが、それを言うならパルテニア王家とて、旧帝国の貴族ではない。“らしく”見えさえすれば充分だ。
現に、彼女に服を貸したヴィーナが、時々嫉妬に満ちた一瞥をくれていた。もっと質素な服にすれば良かったと悔いているのだろう。
ヴィーナは国王の長男シグルスの妻で、ニアナと年齢も体型も近いからと、服を貸してくれた。むろん本心は別で、これにするかあれはどうかと検討するふりで次々に服や宝飾品を見せびらかし、最終的にニアナの着替えが済むまで、延々と自慢話を続けたのだ。
ニアナとしては正直どうでも良かったのだが、妃殿下のご機嫌を損ねないよう、せいぜい羨ましそうにしておいた。残念ながら、今のヴィーナの目つきからして、努力も無駄になったようだが。
（美術品に支出を惜しまないのは、女からの要求もあるみたいね）
ふむ、とニアナは観察した。ヴィーナは自分の地位を知らしめるために、ニアナには貸さなかった様々な宝飾品を身に着けている。

それは王妃カティアも同様だ。
けばけばしくならない程度に控えてはいるが、一番目立つものだけは、とっておきの高級品。ニアナにもはっきりそれが判った。
（あの首飾りが例の、議長が買ってやったっていうやつかしら。帝国時代の逸品、か。確かにそれっぽいわ）
邸内を見回っていても気付いたことだが、帝国時代の“本物”は、それを模倣あるいは継承して作られた最近のものとは、具体的に何がどうと言えずとも明らかに一線を画している。経年変化とは関係のない、そのもの自体が持つ力のようなものが違うのだ。
（贅沢な話よね。まあ、見栄を張りたがるのは女だけじゃないけど。玄関で待ち受けていた偉そうな金ぴか像とか……）
ふと考えて、ニアナは国王に目を向けた。上機嫌の王はワインの盃を傾け、ネイシス相手に熱弁をふるっている。芸術の保護に熱心なのは共和国だけではない、かつての帝国ほどではないが、我が国でもすぐれた芸術家が活動している――そんな話だ。パルテニアが新興国であることは疑いようのない事実だが、文化的に劣った国だとは言わせない、との意図だろう。
王妃カティアは夫の話に加わらず、隣席の騎士団長フィロスと小声でささやき交わしている。二人の表情を見たニアナは、微かに眉を上げた。
（随分と親密そうなことで。えーっと、王妃が議長の娘で、騎士団長が甥って言ってたから……従姉弟関係になるわけか。それだけが仲良しの理由じゃなさそうだけど、下衆の勘繰りかしら？　それとも、議長が疑ってる騎士団長の動きに、王妃も一枚噛んでるとか？　どっちにしても国王陛下は気付いてないみたいね）
ともあれニアナは、国王の話が途切れるのを待った。彼がしゃべるよりも食べる方に注意を移した後で、さり気ない間を取って切り出す。
「国王陛下、この国で芸術が大切にされていること、大変感銘を受けました。あの初代陛下の銅像も見事なものですね。さぞ立派な方

だったのでしょう」
「なに？　ああ、うむ、祖父様のことか。あまりよく覚えてはおらんのだがな。何せ儂がほんの子供の頃に死んだものだから。だが親父は恐れとったし、パルテノスをここに定めて街を築いたのは紛れもない功績だ。最初にしっかりと計画を立てて建設に取りかかってくれたおかげで、孫の儂がまともな王宮に暮らせるというわけだ」
　国王はにやつきながら答え、「客人の部屋にもご満足いただけたと思うが？」＞ＬＢＲ＜と付け足した。ニアナは目を伏せて、相手のいやらしい顔を視界から追い出しながら、大変結構なお部屋です、と答える。国王は低く笑い、次はネイシスに言葉を投げた。
「聞くところによると共和国の竜侯は、街外れの風車小屋に住まっているそうだな？　気の毒に、竜が翼を休められるような宮殿を最初に造っておけば良かったのだ」
　あからさまな軽侮に、カティアが眉をひそめ、エディクスが恥ずかしそうにうつむく。だが言った当人は周囲の感情になど全く頓着しない。蔑まれたネイシスの方も、やはり相変わらずの無表情で王を見返し、何らの反論も説明をもせず、ただ静かにうなずいて応じた。
「その代わり、議事堂は立派なものを建てられました」
「はっ！」
　国王は愉快な冗談を聞いたかのように笑った。
「議会か！　能無しどもがピーチクパーチクかしましくさえずるだけの場ではないか。まあ、我が国の馬鹿どもより、そちらの議員はましかも知れんが……」
　流石に少々まずいと気付いてか、早口でおざなりに言い繕う。だが彼はすぐに傲慢な顔に戻ると、鼻を鳴らしてふんぞり返った。
「こっちの連中と来たら！　どうせ儂が決めた通りにするだけのくせに、もっともらしくだらだらと評定して、それで名士ぶった面をしているのだからな。儂がおらねば何ひとつ前へ進められん。あんな連中に、専用の議事堂があることさえ無駄というものだ！」

「そう責めてやりなさいますな。陛下が有能すぎるのですよ」
苦笑しながら王の気炎を鎮めたのは、フィロスだった。聞いている方が恥ずかしくなるような追従だが、国王は当たり前の顔で受け止めている。
陛下が何もかも出来ておしまいになるから、議員達はそれを追認するふりをして体面を繕わざるを得ないのです、皆が陛下のようにはなれません……
耳に心地良い滑らかな世辞を連ねるフィロスは、しかし、自分が並べ立てているのが意味も価値もない空っぽの言葉だと承知しているようだった。ただ国王をおだてて気分良くさせ、無害にしておく為だと割り切っているような。
ニアナの見るところ、他の面々もそれを分かっているのは明らかだった。王妃は冷ややかな蔑みをもって沈黙し、長男シグルスは三文芝居から顔を背けて退屈げに茫然としており、その妻ヴィーナはワインの杯を唇に当てて嘲笑を隠している。エディクスは落ち着きなく悲しげに料理をつつき、末席に座らされているティリウスは――ただ一切から心を閉ざしているようだった。

（2）

「昨夜はお見苦しい場に付き合わせてしまって、すみませんでした」
エディクスの謝罪は予想していたので、ニアナは平然と穏やかな微笑で受け流した。
「こちらこそ、ご家族団らんの場にお邪魔して失礼致しました。私たちがいなければ、本音でお話されたのではありませんか」
声にわずかばかり、おどけた色をつける。と、恐縮していたエディクスは、助かった様子でほっと苦笑をこぼした。
「いっそ怒鳴り合いや取っ組み合いの喧嘩でもすれば、すっきりするのかも知れませんね。残念ながら、私の柄ではありませんが。とにかく、埋め合わせと言うのも妙ですが、今日は私がお二人をご案内します。色々とご覧に入れたい物もありますし」
エディクスは温和な笑顔で申し出ると、ネイシスに向き直って、どうですか、と返事を待った。あの父親の息子とは思えない、謙虚で気遣いの見られる態度だ。
「よろしくお願いします」
ネイシスも、無表情ながら幾分柔らかい声音で応じた。エディクスは嬉しそうに笑みを広げると、では早速、と二人を促して歩き始めた。
「今日はティリウス殿下はご一緒ではないんですか？」
一歩後ろに従いながら、ニアナは自然な好意を滲ませて問うた。エディクスにもそれは伝わったらしく、彼は同じく弟への愛情をこめて答えた。
「今の時間は教師にしごかれていますよ。文法や算術のね」
「そうですか。喧嘩なさったとか、叱られたというわけではないんですね。良かった」
「え？　ああ、昨日あなたに色々と話してしまったから、ですか？」
エディクスは一瞬きょとんとしたものの、すぐに自分で答えを出

した。ニアナはうなずき、申し訳なさそうに小声で付け足す。
「昨夜は末席においでしたから。国王陛下のご不興を買ってしまったのかと」
「それは……、あなたのせいではありません」
エディクスは顔を曇らせたが、ニアナのもくろみ通り、知りたいことを教えてくれた。
「ティルは、その……庶子なのです。父が昔、召使に産ませた子で。召使はその時に亡くなってしまい、王宮で育てられました。私は彼を弟だと思っていますが、母は父を許していないようで、ティルに対してはあのように……」
「そうでしたか、申し訳ありません」
「いいえ。やはり我が家は一度、殴り合いの喧嘩でもした方が良いのかもしれませんね」
そうなったら私が一番にのされてしまいますが、とエディクスは気弱に笑った。それから、少々わざとらしく明るい声を上げる。
「ネイシス殿、昨日はどの辺りをご案内したのでしょうか。庭園はもうご覧に？」
昨日は王宮中心の主だった部屋を拝見しただけだ、とネイシスが答えたので、エディクスはいそいそと二人を庭へ案内した。お気に入りの美術品があるらしい。
盛夏の太陽が当たっている所は、陽炎が立ちそうなほど暑い。だが幸い今日は湿気が少なく、日陰はさらりと乾いて涼しかった。エディクスはなるべく陰から出ずに済むよう、さりげなく配慮しながら、点々と置かれた彫像や水盤などを見せて行く。
いくつか見てから、ニアナは感じ入った風情で切り出した。
「庭園にこうした作品を置くことも、王宮の設計段階から決まっていたんですよね。初代王は随分、思い切った計画を立てられたものですね」
「そうですね」エディクスは苦笑した。「曾祖父の頃は、この辺りも闇の獣に蹂躙されて荒れ野だったと聞いています。街を築いたの

も大胆な決心ですが、これだけの王宮を設計するというのは……極端に楽天家だったのか、それとも、本当に完成させられるほどパルテニアが栄えるように、という願掛けだったのかも知れませんね」
「記録は残っていないんですか？」
ニアナが用心深く尋ねると、エディクスはきょとんとした。ニアナは何でもないことのように、軽い口調を装う。
「いえ、それだけの事を成し遂げられた方なのに、昨夜の国王陛下のお話からしても、あまり功績が伝えられていないようなので。勿体ないですね」
しゃべりながら、ネイシスの視線を痛いほど意識する。ニアナが何を聞き出そうとしているのか、察したのだろう。だったら援護してくれても良いだろうに、彼はまるで審査員かのように黙って見ているだけだ。
ニアナがにこやかな仮面の下で、後で殴る、と決意すると同時に、エディクスが答えた。
「仕方がありませんよ。パルテニアは今でこそこれだけの国になっていますが、最初は本当に何もなかったそうですから。誰が何をしたか、書物に記すのはもちろん、碑文に刻む余裕もなかったということでしょう。言い伝えだけが頼りです。曾祖父の世代はもう、ほとんど生き残っていませんが、今の内に聞き書きを集めた方が良いかも知れませんね」
「それでは、今のこの国の制度を定めたのが誰か、というのも……」
「恐らく初代のパルテニウス一族と、母や騎士団長のエオシアヌス一族でしょう。いくつかの法令には、主にエオシアヌスの誰かですが、名前が残っていますから。もちろんそれ以降、議会と国王によって新しい法が追加されていますが。それも気になりますか？」
エディクスは単純な疑問の表情で小首を傾げた。どうやら昨日ニアナが『率直に告白』したのが効いているらしい。何を探るつもりかと疑う様子は微塵もない。むしろ、何か知りたいのならお話ししますよ、とでも言い出しそうなほどだ。

ニアナはちくりと良心の痛みを感じながら、慌てて首を振った。
「すみません、差し出たことを。今のはただの、個人的な興味です。こちらに伺う前に、商店の主が共和国からの輸入品は関税が高すぎるとこぼしていたので。それも昔からなのか、と」
「そうでしたか」
エディクスはちょっと笑い、申し訳なさそうに軽く頭を下げた。
「共和国の方に言われると恐縮ですね。ですが我が国の産業を守る為です、何卒ご理解とご寛恕を賜りますように」
おどけて政治家風の言い回しを使ったエディクスに、ニアナも大袈裟な一礼をした。
「訊かずもがなのことを申しました、失礼お許し下さい」
揃って顔を上げ、目を合わせて笑みを交わす。冗談で済ませてくれるエディクスの大らかさが、ありがたかった。付け入るようで心苦しくもあったが。
エディクスは肩を竦めて、穏やかな口調のまま続けた。
「確かに、共和国の品物が高くなりすぎているな、と思うことはあります。品物によっては関税の他に、王都で売る際に奢侈税がかかってしまいますので」
「奢侈税？」
繰り返したニアナの声は、裏返りかけていた。露骨に辛辣な皮肉が飛び出しかけたのを、慌てて堪えたせいだ。だがエディクスは、なぜそんな反応をするのかと目をしばたいただけだった。自分達こそが奢侈に溺れているという自覚はないらしい。
ニアナはこれ幸いと、変な態度に思われない内に急いで話を進めた。
「誰が決めたんですか、それは」
「確か父だったと思います。パルテニアが豊かになってくると、次第に王都の住民にも贅沢が広まってきたので、あまりにも格差があってはならないからと、贅沢品には別途税を課したんですよ。そうして得られた税収は、神殿や公共広場の整備など、誰もがあまねく

恩恵を受けられる用途に使われています」
本来は悪くない制度なんですが、と微笑みながら言う彼の態度は、社会のありように何ひとつ疑いを抱いていない、素朴な善意に満ちたものだった。
ニアナは予想外のものを目にして、数呼吸の間、自分が纏っている役柄の衣さえ完全に忘れてしまった。
なんなのだ、この純粋さは。こんな善良さが、無垢が、許されて良いのか？
驚愕が、心に深い穴を音もなく穿つ。歳月をかけて重ね上げた厚い自己欺瞞の層を打ち抜いて、奥底で静かに煮えたぎる黒い怒りを直撃した。
危うくそれが噴出しかけた、刹那。
「ニアナ」
短く名を呼ばれて、我に返った。どきりとして息を飲み、振り返る。ネイシスが人工池のほとりに佇み、琥珀色の瞳でじっとこちらを見つめていた。意識に入ったヒビが、すうっと塞がっていく。
（どうしよう）
今、自分はどんな顔をしていただろうか。バレはしなかっただろうか、すべてを台無しにしてしまったのでは？
無意識に、襟元を握り締める。ニアナが怯えた視線で無言の問いを投げると、ネイシスは分かっているのかいないのか、落ち着き払った態度で手招きした。何の説明もせず、ちょいちょいと指先だけで。
「……」
横柄な先生様め。
こき使われる助手の感覚が戻り、ニアナは自然と渋面になった。エディクスが失笑し、こほんと咳払いしてごまかす。ニアナは、同情して下さってどうも、の苦笑を向けてから、小走りでネイシスのそばへ向かった。

（3）

ニアナが前に立つと、ネイシスはつい今しがたのことなど何もなかったかのように、足元にある小さな祠を指し示した。彼が膝をついてそれを覗き込んだので、ニアナも横にちょこんとしゃがむ。

石を削って小さな神殿風の装飾を施し、中に神像をおさめてある。なかなか美しい作品だが、残念ながら庭で雨ざらしにされているせいで浸食が進み、細かい部分が判別できない。

「河川の女神フェリニムの祠だ。間違いなく、帝国時代後期のものだな」

「……はあ」

ニアナはどう反応したものか分からず、間の抜けた相槌を打った。ネイシスは不満げに彼女を一瞥したが、諦めたように説明を続けた。

「家庭で個人が拝む為のものだ。昔は富裕層が家を建てる際に、必ずこうした祠を祀る小部屋が造られた。本来は屋外に置く物ではないんだが」

「水の女神だから池のそばに置くというのは、悪くない考えだと思いますけど。外側はともかく、中の女神像は状態が良いみたいですし」

自分の影が邪魔になってよく見えない。ニアナは首を傾げながら、ごそごそと体の位置を変える。ネイシスが声を潜めてささやいた。

「そうだ。祠と神像は対になっていたものではない」

「え？」

「この像は、私が以前に買い取り損ねたものだ」

「――！」

一段と小さな声でささやかれた内容に、ニアナは目をみはった。そこへ、

「何か発見がありましたか？」

無邪気なエディクスの声が降ってきた。ニアナが慌てて言葉を探

している間に、ネイシスは立ち上がり、平静に言った。
「これは、外側の祠と中の神像が別々のものですね。両方とも帝国時代の作品ではあるようですが」
「これですか。ええ、元々そこに納められていた女神像は、かなり傷んでいましたから。ちょうど同じフェリニム女神で、大きさも似たものが手に入りましたから、置き換えたのです。あ、まさか、元からあった物の方が貴重品だとかおっしゃるのではないでしょうね？」
　答えてから気付き、エディクスは少しばかりうろたえる。察するに、元の像は捨ててしまったのだろう。ネイシスは首を振った。
「貴重さで言えば、どちらも珍しくはありませんね。かつての上流階級に好まれた類のもので、ありふれています。と言っても決して粗悪品ではなく、相応の名品ですから、この王宮に飾っても場違いではないでしょう。ただ、祠の方は損傷が著しいので、仮に名工の手によるものであったとしても、これでは……。今からでも保存をお考えなら、雨風の当たらない場所に移すか、壁と屋根で囲って下さい」
　淡々と話すネイシスの口調は、いかにも職業的なもので、余計な感情や意図は一切感じさせない。彼はそのままの調子で、ごく自然に尋ねた。
「この女神像は、どこから入手されましたか」
「さあ……出入りの美術商は何人かいますが、私が取引に立ち会うことは滅多にありませんから。フィロス騎士団長なら、知っているかもしれませんね」
「騎士団長が？」
「ええ。王宮に出入りする商人について、身元が確かかどうか、扱うものに不正がないかを調べるのも、騎士団の仕事ですから」
「そうですか。後で尋ねてみます」
　ネイシスは執着のない風情でうなずくと、もう一度、祠の前に膝をついた。汚れを払い、女神像を恭しく取り出して、光の下でため

つすがめつ眺める。それから、そっと丁寧に元通りの位置へ戻した。
その手つきや表情を観察していたエディクスが、ふと顔をほころばせた。
「本当に、美術品がお好きなんですね」
しみじみと言われて、驚いたのは当人ではなくニアナの方だった。この無表情で分かりにくい青年のことを、出会って二日目にして多少なりとも理解するとは、驚嘆の業だ。
と思ったのだが、それには理由があった。エディクスは声に苦いものをまじえ、王宮の、国王がいるであろう辺りを見やって続けた。
「父はあの通り、美術品に目がありません。ですが芸術を愛しているのかと言うと……そうではないでしょうね。あなたとは、まるきり態度が違う。父にとってこれらの品々は、自分とパルテニアの威光を増してくれるものに過ぎないのだと思います。手に入れ、多くの人を感心させ、誉めそやされるのが目的なのでしょう」
微かな怒りは、父親の卑しさに対するものか、それを何とも出来ない己に対するものだろうか。彼は頭を振ると、寂しげにネイシスを見つめた。
「あなたを見ていて、はっきりとそれが分かりました。あなたはとても純粋に、美術工芸品を慈しんでおいでだ。そんな人は、あまり多くはないでしょうね」
「……」
ネイシスは即答せず、しばし女神像を見つめて沈黙した。それから、誰の顔をも見ないまま、独り言のようにつぶやいた。
「人の一生は短い。けれどその魂が込められた作品は、時を越えて長く生き続ける。……だから私は、そうした作品に接するのが好きなのです」
声は静かだったが、深く沁み入る力を持っていた。
ニアナは半ば呆然とし、あたかもたった今、初めて彼を見たかのような気分を味わった。
（驚いた。まさか、こんなに繊細なことを言うなんて）

それも、あんな声と表情で。
小憎らしくて理解に苦しむ男、とばかり思っていたが、認識を改めねばなるまい――そう考える一方で、ニアナの脳裏にはひとつの言葉が輝いていた。
（これは使える！）
ネイシスの台詞が、かちりと頭の中にはまった。
漠然と思い描いていた絵柄の空白が、期せずして埋められたのだ。連動してすべての断片が整いつながり合い、新たな計画が燦然と花開く。素晴しい閃きを得た喜びが、隠しようもなく口元に表れる。
と、まるでそれが分かったかのように、ネイシスが顔を上げて胡乱な目つきをした。慌ててニアナはくるりと背を向け、よそ事に気を取られたふりをする。
ちょうど上手い具合に、視線の先に建設中の建物があった。
「エディクス殿下、あれは？　塔のように見えますが、ほかの建物とは離れていますね」
唐突に話題を変えられ、エディクスは返答に一呼吸の間を要したが、それでも気を悪くした様子など微塵も見せずに応じた。
「あれですか。あまり気分の良いものではありませんよ。牢獄にする予定なのだそうです」
「牢獄？　王宮の敷地内に、ですか？」
ニアナは正直に不審げな顔をした。次いで、もしや、と思い当たる。
「高貴の方々専用のものというわけですか」
「ええ。数年前に参事会の議員一人が汚職を暴かれたのがきっかけで、建てる事になったんです。ひとまず自宅監禁していたのですが、盗人や殺人者と同じ牢獄に入れられるぐらいならと、監視の隙をついて首をくくりました。今は騎士団長がそうした『事故』の起きないように、内部の配置などを監督していますよ」
「……なるほど」
冷めた気分でニアナはうなずいた。お偉いさんは罪を犯しても特

別待遇、というわけか。まさに、結構なご身分であることだ。
白けた空気をとりなすように、エディクスが朗らかな声を上げた。
「それより、この先に良いものを用意しておいたんです。どうぞ」
さあさあ、行って行って、と彼は二人を急かした。仕込んだお楽しみを見つけて欲しいらしく、先導はしない。
ニアナは追い立てられるまま、池に注ぐ細い水路の上流へと向かった。そして、あっ、と思わず声を上げる。
水路の始点は自然の湧き水であるらしく、小さな泉が出来ていた。そこに、大きな西瓜や早生のブドウ、貴重なガラス瓶に入れたワインなどが浸かっていたのだ。
ちらちら踊る木漏れ日を受けて、湧き出る水がきらめきながら笑いさざめく。泉は石で囲んであったが、自然な状態に見えるように工夫してあった。わざとらしくなく植えられた小さな花が微風に揺れるさまは、まるで星屑のよう。
手付かずの野の風情だが、しかし、本当に原野であればこんなに人にとって便利でも心地良くもない。よく見ると、ちょうど座って一休みしたいと思うような場所に、どうぞと言わんばかりの石がぽつぽつと置かれている。
と、そこいらの木陰で待機していた召使たちが、静かに動き始めた。平らな草地の上に絨毯を広げ、パンの籠や食器を並べていく。
なんたる贅沢だろう。ニアナは自分がその場にいることが信じられずに、言葉もなく立ち尽くしていた。昨夜の凝った料理の記憶など、すっかり霞んでしまう。
「お気に召しましたか」
嬉しそうにエディクスが問いかける。ニアナは無言のうなずきしか返せなかった。
「良かった。この辺りだけは、私が庭師と相談して手入れしているんです。あまりごてごてしていない場所が欲しくて……おっと、今のは内緒にして下さいね」
言葉尻でおどけたエディクスに、ニアナもつられて笑いをこぼす。

慣れた様子のエディクスに促されて、ニアナとネイシスも腰を下ろし、野外の午餐と洒落込むことにした。
冷えたワインを傾け、軽い昼食をつまみながら、会話を楽しむ。と言ってもしゃべるのは専ら、ニアナとエディクスだった。ネイシスは話を振られた時に答えるぐらいで、自分から口を開くことはなく、静かに二人のおしゃべりを聞いている。
話題はとりとめもなく、あちらからこちらへと移り変わった。
この辺りには地下水が豊富で、自然の湧き水をあちこちで利用できること。おかげで作物もよく実ること、ヴィーナの実家はそれで成功した顕著な例であること。
一方、王妃カティアの実家は初期のパルテノス入植者一族であり、当主ゲニクスが議長をつとめているように、今も政治で活躍していること。参事会では、国王とその息子らも臨席し発言権をもつこと。
ニアナは他愛無い話にまぎらせて、パルテノスの政情や騎士団長に関する情報を、さり気なく聞き出していく。エディクスは気付いていないのか、気付きながらも無害だと判断してか、無頓着に色々と話した。
「実際には私も兄も、ほとんど発言することはないんですが。父が言ったように、議会の内容はあらかじめ結果が分かっているようなものです。予想外の議案が提出されることもないし、採決の票数まで分かりそうなぐらいですよ」
「それじゃあ退屈でしょうね。居眠りする人もいるんじゃありませんか」
ニアナがおどけると、エディクスは恥ずかしそうに耳打ちした。
「白状すると、私も時々記憶が飛んでしまいます。シグルス兄上に至っては、おおっぴらにいびきをかいていますよ」
「国王陛下はよくお怒りになりませんね」
「父は自分のやりたいことに反対されない限り、居眠りされても気にしません。よほど突拍子もないことを言い出したら、議員達も反対するでしょうが、大抵は議会の前にフィロス殿が根回しをして、

さりげなく父を誘導してくれていますから、そんな騒ぎにもなりませんし」
「騎士団長が？　随分お仕事の範囲が広いんですね。大変でしょう」
「確かに、忙しそうですよ。私ももう少し、しっかりしなければと思ってはいるんですが。なかなか、私のようなぼんやりした者が首を突っ込める隙はなくて……庭をいじったり書物を読んだりしている方が落ち着きます」
「……渦中にいないからこそ、見える事もあるでしょう。殿下はまだお若いのですし、今の経験がいずれ役に立つと思いますよ」
　ニアナはそつのない言葉を返しながら、優しく微笑んだ。途端にエディクスはぱっと赤面し、うつむく。初心で分かりやすい反応だ。王宮暮らしで家族以外の女性と接したことがないのかも知れない。
　無垢で純真、善良。
　その彼を騙しているのだ、と自覚すると、ニアナの心は小さく軋んだ。
（ごめんね。せめてなるべく、優しく接するから）
　許してね――と、密かに詫びる。痛みの裏側でうごめく意地の悪い喜びから、目を背けるために。
　ニアナの葛藤は、微塵も外に表れていなかった。目にも声にも、態度にも。エディクスはただ単純に、彼女の笑みひとつで舞い上がっている。
　だがその横で、ネイシスは相変わらず静かなまなざしを、じっとニアナに注いでいた。

（4）

食事が終わっておしゃべりにも区切りがつくと、エディクスが案内を再開しようと言ったが、ネイシスはそれを丁重に断った。既にかなりの数を見せて頂いたので、一旦これまでの分を整理したいから、と言って。

不躾なほどではないが、引き止められない程度にきっぱりした態度で立ち上がり、一礼する。それから彼は、ニアナが立つのに手を貸した。自然な動作だったが、その恭しさは主従関係の逆転を感じさせた。

エディクスが目をしばたいたのに気付きながら、ニアナも当然の態度でネイシスの手を借りて、すっと立ち上がった。

「とても楽しいひと時をありがとうございました、殿下」

まだ座ったままのエディクスに、上から謝辞を述べる。客分としては無礼な振る舞いであるのに、寄り添って立つ二人の雰囲気はそれを忘れさせた。生まれながらの貴人であるかのように。

エディクスは束の間ぽかんと見惚れ、それから慌てて自分も立ち上がった。

「こちらこそ。……あの、また明日……いえ、明後日でも、明々後日でも、いつでもご案内しますから。構いませんよね？」

やや不安げなのは、何か失礼なことをしてしまったせいでニアナの好意を損ねたのでは、と気を回しているのだろう。ニアナは安心させるように、にっこり微笑んだ。

「もちろん、喜んで。光栄です」

二人は名残惜しげなエディクスと別れ、館に戻る風情で庭園を横切って行った。充分に離れて人目がないところまで来ると、ニアナは即座にネイシスから一歩離れ、渋い顔でささやく。

「ちょっとやりすぎじゃない？」

「何が」

しらっと答えるネイシス。妙な気恥ずかしさを感じたのは自分だけか、とニアナは理不尽な怒りをおぼえた。
「仕込みは使わなくても、普通にお友達になれちゃいそうだ、って言ったじゃない。あれじゃ露骨に王女と騎士そのまんまよ？」
「そう見せる必要があったんだ。君は上手くやっていたが、それでも話題が国政に偏っているのは明らかだったからな。召使の何人かは、片付け終わったらその足で騎士団長か国王か王妃か、あるいは三人全員のもとへか、報告に駆け込むだろう」
「……本当？　なんで分かるの」
流石にニアナは不安げになり、ちらっと背後を振り返って、またネイシスの傍らに戻る。彼は小さくうなずいた。
「給仕のために近くで控えていた召使は皆、君たち二人にばかり注目し、会話に耳をそばだてていた。おかげで私の杯は、一度乾した後はずっと空のままだったよ」
「うわー……。じゃあ今夜辺り、この密偵どもめ、って来るかしらね」
「部屋に引き取るまで何も言われなければ、ベッドでなく床で眠るべきだな」
つまりは、寝込みを襲われるから用心しろということだ。ニアナはため息をついた。
「守ってくれるわよね？」
「もちろん」
相変わらずの即答だ。ニアナは慌てて言い繕った。
「いやあの、全部任せるつもりじゃないわよ？　王女を偽装しようって案はあたしが出したんだし、少しは自分の身を守る心得もあるんだから。でもほら、もし……」
「心配しなくていい。むしろ君は何もしないでくれ。邪魔になる」
「率直なご意見、どうも。まぁそうよね、物語のお姫様ってのは足手まといと相場が決まってるものね。ええ、お荷物に徹しますとも、勇敢な騎士様！」

ねちねち厭味を並べるニアナに、ネイシスは、何を怒っているのか分からない、と言うかのように小首を傾げていた。
王女と騎士。
それが、二人がでっち上げた偽りの口実だ。
建国初期の政争で王宮から追い出され、共和国に身を寄せていたパルテノス一門の傍流。その子孫であるニアナが、祖国を己の目で見たいと望み、やはり同じく国を追われた騎士の家系であるネイシスを伴い、密かに入国した――
この筋書きなら、嗅ぎ回っているのがばれても、共和国の密偵ではないと言い訳が出来る。ましてや、議長の関与を疑わせる余地など一切ない。
向こうにしても、目的はともかく、もし本当に血族なら、と迷うだろう。その間に、言いくるめることが可能だ。王位を取り返しに来たのではない、だがもし受け入れてくれるのなら、共和国で得た知識財産を喜んで提供しよう、等々。
そうしておいて、一旦帰ってから財産をまとめて戻って来る、と説得すれば、無事に王宮から出られるだろう。何しろ見栄を張るのにこれだけ金をかけているのだから、多少の不安要素があろうと、新たな財産は喉から手が出るほど欲しいはずだ。
信用されるかどうかは、周到な布石とニアナの芝居にかかっている。高貴な出自を思わせる所作、物言い。主従逆転を感じさせるちょっとした出来事。幸いこれまでのところ、上手く行っている。
初代国王の時代については、王宮の誰もがよく知らないことも判った。一族の中に不和があるのも確認済み――仮に誰かが殺せと主張しても、他からの反対を見込める。ティルが庶子ながら王宮に迎えられているところからして、血族に対する配慮もあるようだ。
これだけの条件が揃えば、成功の見込みは充分にある。しかし、何はともあれ、まずは今晩を乗り切らなければ。呼び出されて問い詰められるか、こっそり片付ける方にされるか、それはまだ分からないが。

そんなあれこれを考えながら、ニアナは半分無意識に、ネイシスの後について行く。ひんやりした日陰の空気にほっと息をついて顔を上げると同時に、ネイシスが歩みを止めた。ニアナは危うく背中に鼻をぶつけそうになり、慌てて体を引く。どうしたのかと前を覗くと、予想外の人物と目が合った。

「シグルス殿下」

ニアナは軽い驚きと共に一礼した。いつからそこにいたのか、彼は庭に面した通廊の手摺に寄りかかり、皮肉な薄笑いを口の端に浮かべていた。

「フン。共和国の犬どもが、随分嗅ぎまわっているな。腐った肉が好物か」

「心外なお言葉ですね」

応じたのはネイシスだった。憤慨するでもなく、おどけて受け流すでもなく、ただ淡白に。そんな彼を、シグルスは胡散臭げに睨んだ。もう一撃くらわすべきかどうか迷い、標的をニアナに変える。

「エディクスを手玉に取って、楽しそうだな？」

「……」

ニアナは答えず、ただ少し眉をひそめた。真っ向否定するのも、皮肉な言葉でやり返すのも、どちらも“王女”らしくないからだ。

ネイシスはニアナを気遣うまなざしを向け、それからシグルスに厳しい表情を見せた。が、彼が何を言う間もなく、シグルスは唇を歪めて嗤った。

「どうせなら、とことん心を奪ってしまうが良い。あの馬鹿が尻尾をふりふり貴様らの国までついて行くほどに、な。ここで王子ぶっているより、貴様らの飼い犬に成り下がる方が、奴には似合いだ」

「殿下、お言葉が過ぎます」

短く静かに、ネイシスが咎める。だがシグルスは意に介さなかった。冷笑を残し、ふいと踵を返して歩み去る。のっそりした動きを装ってはいたが、足音はそれを裏切り、しっかりと力強いものだった。

正直な音が遠ざかり、完全に聞こえなくなってから、ぽつりとニアナが言った。
「嘘ね」
「嘘だな」
ネイシスも無感情に同意する。ニアナはやれやれと頭を振った。
「意外だったわね」
「ああ」
「昨夜はまるきり、本っ当に、何もかもに無関心に見えたのに。台詞をしゃべった途端、あんな猿芝居になるなんて」
「……そっちか」
「あら勿論、意外によく観察してるし弟思いでもあるらしい、って所にも驚いてるわよ。一応」
ニアナは肩を竦めておどけたが、ネイシスは笑わない。期待はしていなかったので、ニアナはそのまま話を続けた。
「なんだか予想以上に恨まれちゃいそう。あーあ」
「気が進まないなら、ここで切り上げても構わないが」
さらりと言われ、ニアナはとびきりの渋面になった。
「また同じことを言わせるつもり？　つくづく軽く見られたものよね、あたしも」
「そうじゃない。昨日と今日だけでも、ある程度のことはつかめた。議長に頼まれた件はほとんど収穫なしだが、そもそも他国人が首を突っ込む問題ではないだろう。王宮内で武力を掌握しているのは騎士団長の方だ、つつき過ぎたら命に関わる。そこまでする恩義はない」
「……あなたはそれでいいの？　気にならないの、騎士団長が何をやっているのか。既にあの人、美術商から議会の内容まで自分のいいようにしてるわけでしょ。王宮に入る美術商が必ず彼の審査を受けるってことは、賄賂とか、上前をはねるとか、そういうのがあって当然だわ。お金と政治を好きなように出来るってことじゃないの。宿で連れて行かれた人だって、本当に盗人だったようには見えなか

ったし……騎士団長が実権を手にしたら、共和国としては困ったことになるんじゃないの？　あなた仮にも、共和国の役人でしょ。もっと危機感を持ったらどうなの」
「随分と肩入れしてくれるんだな」
「人の話、聞いてた！？」
とぼけた返事をされて、ニアナは思わず声を大きくした。うんざりだ。真面目に仕事をする気があるのか、このお役人様は。彼に給料を支払っている税務官に、こっそり耳打ちしてやりたい。
「もちろん聞いていたさ。君の懸念はもっともだ。だからこそ……」
「ああもう、いいから黙って！　芝居の幕は上がってるのよ、今更いきなり舞台を降りるわけにはいかないでしょうが！　この後、呼び出されたら、あたしが例の筋書きで言いくるめるから、あなたは余計な口出しをしないで、適当に調子を合わせてちょうだい。下手に演技しようとしないで、いつも通りで構わないから。分かった？」
強引に話を打ち切り、依頼の言葉で命令する。ネイシスは微かに不安げな表情を見せたが、じきに諦めてうなずいた。
「分かった。君のその才能で、王宮の全員を芝居に巻き込んでくれ」
「任せてよ」
ニアナはにんまり笑う。
（全員、ってとこには、あなたも入ってるのよ。お馬鹿さん）
見てらっしゃい、一泡吹かせてやるから。
不穏な決意を抱いてにこにこしている彼女に、ネイシスは胡乱な目を向けたが、口はつぐんだままだった。問い質していれば厄介な事態は避けられたのだが、未来を知る由もなく。

五章　臨機応変に出任せ

(1)

さあ、ここからが本番。いくわよ、度肝を抜いてやるから覚悟なさい！

心の中で挑発の文句を唱え、好戦的な気分を盛り上げる。まさに今、ニアナは臨戦態勢にあった。来るなら来い、来ないなら行くぞ、の構えである。

彼女を呼び出した国王夫妻はすっかり面食らっていた。不審な行動について問い質し、返答如何によっては投獄か処刑さえするつもりでいたのに、怯え縮こまって現れるはずの相手が、待ってましたとばかりに張り切っているのである。調子も狂うだろう。脇に控えているフィロス以下数名の騎士も、警戒しつつ当惑を禁じえない様子だ。

ニアナは視界の端で彼らを捉えつつ、意識は斜め後ろのネイシスに向けていた。国王や騎士たちなどは、容易い観客だ。一番手強い相手を自分の舞台に引きずり出せるかどうかに、成否がかかっている。

静かにひとつ息を吸うと、彼女は顎をくいと上げ、真っ向から国王夫妻を見返した。

「どうやら、私達の振る舞いがご不興を買ったようですね」

ニアナが自分から言い出したので、優位を奪われた国王がむっとなった。

「付け上がるな、小娘。共和国の役人など即刻縄をかけるところを、堪えてもてなしてやったというのに、厚かましく嗅ぎ回りおって。こけにされて黙っているほど、儂が腑抜けだと思うな！」

「この国では何ら罪を犯していない者を、好奇心があるというだけで牢につなぐのですか」

「息子に取り入ろうと色仕掛けまで使っておいて、罪がないと言うつもりか！　そもそもこんな若い娘が助手など、おかしいと思ったわ！　どごぞの娼婦でも雇ったのだろう、ええ！？」
国王は怒りをこめてネイシスを睨む。だが彼が何か反応するより早く、ニアナがふっと微苦笑をもらした。
「陛下、それは誤解です。私は殿下方にそのような意図は持っておりません。一方的に私が親しみを感じて接したが為に、誘惑したと誤解されたのも無理はありませんが」
「何を小賢しい……」
国王は言いかけて再度ニアナに目を戻し、そのまま言葉を飲み込んだ。
ほんの一呼吸の間に、そこにいるのがただの小娘とは見えなくなっていたのだ。胸を張り背筋を伸ばして、凛とした気高いまなざしを真っ直ぐに向ける貴人――それが、強い口調で告げた。
「お聞き下さい。私の名はフェリニアナ。水の恵み豊かなこの地に都を定めたクィヌス＝パルテニウスが、女神フェリニムへの感謝をこめて名付けた、彼の娘です」
「……」
ぽかん、と国王夫妻が絶句する。ネイシスが眉を寄せて、突然の設定変更を咎めるまなざしを寄越したが、ニアナは無視した。パルテニウスの子孫が彼女の台詞を理解する前にと、さらに畳みかける。
「と言っても、嫡子ではありませんが。政争の結果、私の母は王宮を追われ、北へ逃れました。私はまだ幼く記憶はおぼろげでしたが、母に従ってきた者らから、パルテニアのことや、私が王女であるべきことを、繰り返し聞かされました。長じるにつれ故国への憧れは募り、この足で王都パルテノスの土を踏みたいと願い……その望みが、私を天竜に引き合わせたのです」
「――！！」
ネイシスが小さく息を飲む。ニアナはさっと振り向いて、笑顔のまま、しかし目には『黙ってろ』の威嚇を力一杯こめて、強い声で

言った。
「ここにいる彼がそうです。我が絆の伴侶、天竜ディアネイシス」
天空神の名を冠して彼を呼んだ瞬間、ニアナはわずかに身じろぎした。
（何？　今のは）
心臓を、見えない手がかすめた気がした。否、心臓よりもさらに深く秘められた魂に、己とは別の存在がすっと入り込んできたのだ。それはきらめく黄金の光に満ちた何かで、期せずして触れ合ったことに驚きながらも、歓喜に輝いていた。
考え難いことだが――今まさに、琥珀色の目に驚きと動揺を浮かべて彼女を見つめている青年のほかには、あり得ない。
衝撃に我を忘れたのは、ほんの一呼吸の間だった。
（いけない、続けなきゃ）
くるりと国王夫妻に向き直り、彼らがまだ無防備に呆けているのを確かめて安堵する。
「……というわけです。私は見た目通りの人間ではないのですよ、お二方」
「な、何を、馬鹿な」
ようやく国王が、つっかえながら言葉を発した。自分の声で驚愕の呪縛が解けたらしく、表情に警戒と怒りが戻ってくる。不意を突かれた屈辱もあろうか、見る間に顔が朱に染まった。
「ふざけおって！　言うに事欠いて、田舎芝居のごとき荒唐無稽な戯言を！！　卑しい娼婦ごときが、厚かましくもパルテニウス一門を名乗り、しかも竜侯だと！？　図に乗るな、小娘ッ！！」
丸々した指をニアナに突きつけ、身を乗り出して唾を飛ばしながら喚く。隣席から王妃カティアも、不快げに“自称竜侯”を睨みつけていた。捕縛の命令を予想して、フィロスの片手が部下へ合図するために持ち上がる。
が、彼らはすぐに、己の態度を後悔するはめになった。
「う……っ、ああ！？」

不意に国王が言葉を詰まらせ、後ずさろうとして背もたれにぶつかった。ニアナは振り向いて確かめたいのを堪えつつ、にっこりと微笑む。陽炎のような光のゆらめきが視界の端に入り、ネイシスが何をしたのかが分かった。

光の、翼だ。

ネイシスの背に陽炎がたちのぼり、高い天井に届くほどの巨大な翼を成す。目で捉えずとも、感覚で見える。

国王夫妻がともにすっかり血の気を失い、玉座の中でくずおれる。騎士らがおののきながら翼を見上げ、我が身を守ろうと身構えて、一歩、二歩と後ずさる。

一同をすっかり畏怖させるまで待ち、ニアナはネイシスを振り向いた。軽くうなずくと、ネイシスも心得た風に翼のまぼろしを消す。

（間合いが分かってるじゃないの）

ニアナは内心にやりとしたが、表面的には相変わらず、超然とした態度を崩さなかった。国王夫妻に向かって、慈悲深く微笑みかける。

「驚かせてしまいましたね。ですが私もネイシスも、あなた方に危害を加えるつもりはありません。それに、血筋を盾に王位や特権を求めたりもしませんから、ご安心を」

「う……うむ？」

衝撃から立ち直れないまま困惑の中に放り込まれ、国王は奇妙な顔のまま曖昧な返事をする。カティアの方がハッと我に返って聞き返した。

「王位は求めない、と？　ならばなぜ、この王宮に身分を偽って入り込み、王子らをたぶらかすような真似をしたのです」

詰問したまでは良かったが、ニアナがひたと視線を据えると、途端に怯んでウッと息を飲む。ニアナは本当に自分が彼らよりも遥かに年長の者になった気がして、頑是無い子供に説いて聞かせる口調になった。

「ですから、それは誤解です。わずかとは言え、私と血のつながり

があり、父の国を受け継いでゆかれる方々に、興味や好意を持たない方がおかしいでしょう。私はただ、自分の故郷を……母が懐かしげに語った、新しい希望の土地を、この目で見たかった。それだけです。権力を求めてはいません」
「信じられん」
国王が思わずのようにつぶやく。ニアナは、おや、と意外そうな顔をして見せた。
「共和国の竜侯が、復興の立役者にもかかわらず王位に即かなかった理由を、ご存じありませんか。人とは異なる存在が、人の上に立ってはならない――と。私も同意見です。そもそも竜との絆があるのに、なぜ王位など欲しがるでしょう」
すらすらと並べる言葉はすべて口から出任せだが、不思議とニアナは、自分が間違ったことを言う気がしなかった。
「私達はずっと、普通の人間を装って生きてきました。転々と居所を変え、共和国で仕事もして、いくらか財産も作りました。すべて、この日の為に。……文化委員の肩書きは偽りではありません。この官職に就けば、こちらの王宮にまで入れるかもしれないと、望みをかけたのです。それに」
ふ、とそこで寂しげな表情をする。昼間、庭園で見たネイシスの横顔を思い出しながら。
「たとえそれが叶わずとも、美術品に触れていれば、人の一生の短さ、過ぎ去る時の速さを忘れていられますから」
「……」
誰もがすぐには言葉を発せなかった。ニアナは自分の作り出した空気が完全に場を支配したのを感じ取って、優雅に微笑んだ。むろんネイシスはこの空気の外だが、ニアナの筋書きに従わざるを得ないのは他の面々と同じである。
「なぜ、それほどまでに……」
長い沈黙の末に言葉を発したのは、騎士団長フィロスだった。ニアナが振り向くと、彼は小さく咳払いし、威厳をかき集めて姿勢を

正した。
「真実あなたが竜侯閣下であるなら、我々は無礼を謝罪せねばなりますまい。しかしなぜ、これほど手の込んだことをしてまで、パルテニアへ？　竜の翼があれば、密かに国境を飛び越えてパルテノスの町に入ることも出来たでしょうに。そもそも、あなたにとっては、血のつながりがあるというだけで……故郷と呼ぶほどの国でもない。むしろ、あなたと母上を追放した仇の国でしょう」
もっともな質問だ。が、虚言と見抜いた上での反撃ではなかった。鋭いところを突きながらも、彼自身は、ニアナの嘘を信じてしまっている。その証拠に、表情には遠慮がちな疑問しか浮かんでおらず、声にも厳しさがない。
ニアナは鷹揚にうなずいて、ひとまずフィロスの言葉を受け容れた。
「そう思われるのも無理はないでしょうね。でも、私は……ひとりの人間として訪れたかったのです。短い間とは言え、ただの子供として日々を過ごした思い出のある、この土地を。恨みなど、とうにありません。それに私の思いを別にしても、天竜はあまりにも目立ちます。密かにこの町に入ることなど不可能ですし、騒ぎは起こしたくありません。もう一人の天竜侯と間違われでもしたら、国の間の問題に発展してしまうでしょう」
ですから、とニアナは一同をゆっくり見回した。その視線で一人一人を縛りつけてゆくように。
「私が竜侯であることは、どうかこの場限りの秘密に。賢明な皆様には、言うまでもないことでしょうけれど」
深緑の目に見据えられ、誰もが思わず顔を伏せてもぐもぐと曖昧に承諾する。
勝者、ニアナ！――高らかに宣言する審判の声が聞こえそうなほど、完全な一人舞台だった。

（2）

上首尾に一幕終えたニアナは、すっかり腑抜けている国王達に対し、猶予を与えた。

――私達をパルテニアに受け入れて貰えたら嬉しい、だが何も聞かなかったことにして関りを絶つのも自由だ。いずれにせよ私は何かを求めてはいない。遠い昔からの夢が叶った今は、ただパルテニアが栄え、民が幸福に暮らせることを願っているだけだ――

そんな“王女の想い”を伝えた上で、じっくり考えると良い、その間はあくまで文化委員として美術品調査の仕事を続けさせて貰うから、と告げたのだ。受け入れてくれるなら、こちらも提供できるものがあると、それとなく仄めかすことも忘れなかった。

むろんこの王宮において決定権を持つのは国王の方であるから、ニアナが勝手に己が身の処し方を決められるものではないのだが、そんなことを言い出せる者はその場にはいなかった。もちろん、悠然と立ち去る彼女を止める者も。

だが謁見の間から出たところで、急に慌しい足音がして、閉じたばかりの扉が開いた。

ぎくりと振り返ったニアナの目に映ったのは、一人で追ってきた騎士団長フィロスだった。

「お待ちを、ニアナ殿」

まるで彼の方こそが、何かに追われているかのようだ。どうやら捕らわれる恐れはないと見て、ニアナはゆっくり向き直り、王女然とした態度で待ち受ける。フィロスは慎重に彼女に歩み寄ると、数歩手前で立ち止まった。

「竜侯閣下のお力を、お借りしたき儀がございます」

「どういった事でしょう？　私に出来ることならば良いのですが」

用心深く、声を控えて応じたニアナに、フィロスもまたささやきで答えた。

「闇の獣です」
「それは……」
面倒な問題を持ち出してくれた。ニアナは眉を寄せ、ネイシスを振り向く。舵取りを委ねられたネイシスが、ゆっくり二人の間に進み出た。
「この国から完全に追い払え、というのは不可能ですよ、騎士団長」
「しかし、ネイシス殿は……」
竜だろう、と言いたそうなフィロスを制し、ネイシスは首を振った。
「限られた区域や時間であれば、もちろん、彼らを寄せ付けないことは可能です。ですがフィロス殿、光が明るければ、生じる影も濃くなる。力ずくで追い払えば彼らの憎しみを買い、激しい攻撃を招くだけです。昨夜もちらほらと現れたようですが、深刻な被害はなかったのでは？」
あまりに当たり前のように述べられたもので、ニアナが驚く隙もなかった。表情を取り繕わなくて済んだのは良いが、数拍、理解が追いつかずに思考が固まってしまう。その間にも、会話は先へ進んでいた。
「やはりお気付きでしたか。さよう、確かに深刻な被害は出ておりません。ですがそれも、我々が常駐し、夜間も頻繁に巡回しているこの王宮内に限ってのことです。街なかではこれまでにも度々、行方不明者や死者が出ております」
フィロスは沈痛な面持ちで、ぎゅっと唇を引き結んだ。ネイシスは何も言わず、ただじっといつもの見透かすようなまなざしを騎士団長に注いでいる。それを意識してかせずか、フィロスは伏目がちに、視線を合わせないまま言葉を続けた。
「折しも明後日は新月。月の細い今夜もまた、奴らは現れるでしょう。せめて新月の前後二日間、闇の獣の脅威から守っては頂けまいか。王宮と、この街を」
「……分かりました」

ややあって静かにネイシスが答える。フィロスはほっと安堵の息をつき、「かたじけない」と破顔した。が、ネイシスの言葉には続きがあった。

「ひとまず今日は、暗くなるまでにあまり時間もないことですし、王宮内のみ、闇の眷属を遠ざけられるようにしておきます。その結果を見て、明日以降どのようにされるかご判断ください」

微妙な含みのある声音だった。フィロスは不審げに眉を寄せたが、この場は引き下がることにしたらしく、深く一礼した。

「承知いたしました。不寝番の騎士達に、よく気をつけて見張るよう言い聞かせておきましょう。我々も微力を尽くしてはおりますが、相手が闇の獣となると、ならず者や盗人を取り締まるようには参りません。どうか宜しくお願い致します」

声に苦渋が滲む。ニアナはつくづくと観察しながら、素早く考えを巡らせた。

（国王の目を盗んで好き勝手にしてる奴でも、仕事は仕事で別ってことなのかしら。……この国が大事だからこそ、欲ボケの国王に任せてはおけないと考えている、とか？　でも、本当に騎士の務めに真摯であるなら、そもそも横領だとか何だとか、しないわよね。ふむ）

どれ、ひとつ確かめてみるか。

心中で計算し、ニアナは優しく穏やかに微笑んだ。まずは小手調べ。

「人々の暮らしを守りたいと願うのは、騎士たるあなた方だけではありません。私達の力がわずかなりとも役に立つのであれば、本望です」

案の定、フィロスの肩がぴくりと揺れた。手応えありと見て、ニアナは間を置かず、今度は本気の突きを入れてやった。

「ですがフィロス殿、僭越ながら助言いたします。本気で闇の獣の被害をなくしたいとお考えなら、共和国のやり方に学ぶべきだと思いますよ」

狙い澄ました一撃は、確実に急所を突いたようだった。フィロスは顔を歪め、一呼吸のあいだ取り繕いもできずに凝固する。それから彼は無理やり苦笑を作って答えた。
「なるほど、かの国に長く暮らされて、あちらの事情にはお詳しいのでしょうな。竜侯閣下が我が国をお守り下さるとなれば、彼らのやりようを真似ることも出来ましょう。閣下をお迎えすることが正式に決まり次第、詳しくお聞かせ下さい」
　では御免、とそれ以上の会話を断ち切るように頑なな声で言い、彼は踵を返して謁見の間へ戻っていく。こわばった後姿が扉の向こうに消えると、ニアナは微かに眉を上げてネイシスを見やった。
　だがこちらもこちらで、なにやら不機嫌な気配である。ニアナの戦果にまるで興味のない様子で、軽く腕を引いて「部屋に戻ろう」と促した。
（あらら……これは説教が待ってるわね）
　ニアナは内心首を竦める。予想通り、客室に戻った途端にネイシスは召使らを体よく追い払い、厳しい顔になって彼女に詰め寄った。
「とんでもないことを言い出してくれたな」
「あら、あなたも上手に合わせてくれたじゃないの」
　ニアナはしらっと言い返し、ひらりと身をかわして自分のベッドに腰を下ろす。ネイシスは頭痛を堪える風情で眉間を押さえ、深いため息をつくと、いささか荒っぽくニアナの隣に座った。微かなささやき声で話しても聞こえるよう、間近に。
「君は竜と竜侯の絆がどんなものか、知っているのか？　彼らは魂でつながっている。互いの感情や考えが声に出さなくとも分かるし、何よりそのことを無上の喜びに感じているんだ。君は、私と、そんな関係になりたいのか？　たとえ演技であっても！」
「具体的なことは知らないけど、芝居に出てくるぐらいのことは承知してるわよ。だから、せいぜいあなたにうっとりしてるように見せかけたでしょ？　絆の前には王位なんか色褪せる、みたいに。……しまった、こっちの言い回しの方が良かったかしら」

ちっ、と小さく舌打ち。
芝居の出来栄えしか気にしていない彼女に、ネイシスは何をどう言ったものか途方に暮れ、頭を抱えてしまった。
ここまで彼が露骨に困った様子を見せるのは、初めてだ。ニアナは遠慮なくにやついて、甘美な勝利を味わう。だが、それも長続きはしなかった。ネイシスが顔を上げ、恨めしげな視線をくれて言ったのだ。
「君は知らないから楽しんでいられるんだ。国王夫妻や騎士団長が、君と同じぐらい無知ならいいんだがな」
「何よ、その言い草」
「いいか、竜侯は竜の命と力を分け与えられている。そのことが意味する現実を、彼らがどの程度知っているかによって君の安全は大きく揺らぐ」
感情を排した平坦な物言いだった。説教でも非難でも不平不満でもなく、共謀者に対する冷徹な状況説明だ、というしるし。ニアナはどきりとして居住まいを正し、続く言葉を待ち受けた。
「竜侯になれば歳を取らない、若々しく健康なままだ――と、世間一般にはその程度に認識されているようだが、事実は違う。わずかずつだが歳は取るし、大概の病気にはかからないが稀には調子を崩す。傷を負えば血も流す。ただ、治りが人間に比べて異様に早いだけだ」
「……ってことは？」
「すなわち、もし君が本物の竜侯かどうか確かめたければ、刃物で軽く手に引っかき傷でもつけてみればすぐ分かる。目の前で傷が塞がって消えたなら本物、いつまでも血が滲むようなら」
「ただの人間だとバレる……」
さすがにもう喜んではいられず、ニアナはごくりと喉を鳴らした。考えもまとまらないまま、慌てて言い繕おうとする。
「じゃあ、つまり、疑われなければいいんでしょ？　そのぐらい、あたしの芝居で何とでもするわよ」

「どっちにしても、君が転んで擦り傷を作ればおしまいだ」
「……」
「たまたま今、君の手にあかぎれがなかったのが、せめてもの幸いだな」
　言われてニアナは反射的に自分の両手を見つめた。今は夏だから、冬場のようにカサカサに荒れてもひび割れてもいない。ネイシスのおかげでここしばらくは、手が荒れるような仕事もせずに済んでいる。だがもし、気付かぬ間に草の葉で切りでもしたら、虫に刺されて腫れでもしたら。
　顔から血の気が引いていく音が、ほとんど聞こえそうなほどだった。
「し……知らないわよ、そんなこと。芸人一座にいた、情報通のあたしが知らないんだから、あの人達が知るわけないわよ」
「確かに、共和国でも皆が竜侯のことを正しく知っているわけじゃない。現パルテニア王も、即位してじきに共和国と縁を切ったから、正確な情報はつかんでいないかも知れない。だが、たとえ何も知らなくとも、竜侯が普通に風邪をひいたり怪我をしたりすれば、君だっておかしいと思うだろう」
　理路整然と述べられ、もはやニアナは減らず口さえ叩けずに沈黙するしかなかった。
　しくじった。
　最高の芝居を演じてやるつもりで、最悪の墓穴を掘った。思い上がって、足元をおろそかにしたせいだ。固めるべきところを固めておかなくては、上でどんな芝居も演じられはしないのに。
　暗澹とうつむいたニアナの横で、ネイシスはしばし考える。そして何を思ったか、片手をぽんと軽く彼女の頭に置いた。
「こうなったら後はもう、出来るだけ早くこの芝居に幕を下ろして、大急ぎで撤収するしかないな」
「……そうね」
　ニアナも沈んだ声で同意する。顔を伏せたまま、頭に置かれた手

をなげやりに払いのけた。憐憫なら結構よ、と、口には出さずに。
　ネイシスは逆らわず、邪険にされた手を膝の上で組む。軽いため息をついてから、彼は独り言めかしてぼやいた。
「まったく、よりによって、どうして竜侯なんだ」
　その声音は、まるで言い訳を催促しているかのように聞こえた。ニアナは甘やかされていると自覚しながら、「だって」と応じる。
「あなた変なんだもの。精霊の加護があるって人に出会ったのは初めてだから、他はどうなんだか知らないけど……妙に浮世離れしてるし、時々見透かしたようなこと言うし、味音痴だし、頭キラキラだし」
「味音痴と髪は私の責任じゃない」
　ネイシスは渋面で唸ったものの、だが、と諦めの風情で頭を振った。
「まあ……君の創作意欲を変に刺激した私の態度も、原因ではあるんだろうな」
　やれやれ、と彼は姿勢を正し、説明も断りもなくニアナの手を取った。何をする気か、とニアナは不審なまなざしを向ける。ネイシスは気乗りしない様子だったが、そのくせどこか面白がっている気配を滲ませて、微苦笑した。
「余計に君の芝居を大袈裟にしてしまうかもしれないが、やむを得ない。店を畳んで夜逃げする前に、君に何かあったら一大事だ」
　正面からまともに見つめられ、ニアナは不覚にもどぎまぎした。気にすまいと意識するほど逆効果で、最後の一言だけが頭の中をぐるぐる回る。
　――と、そこへ。
「あっ……！！」
　突然、重ねられたてのひらが熱くなり、ニアナは声を上げた。咄嗟に振り払おうとしたが、強く握りしめたネイシスの手はびくともしない。
「あつっ、ちょ……っっくぅ！」

ニアナは声を殺し、歯を食いしばった。最初に感じた熱は痛みに変わり、次いでそれが腕を伝って体の奥へ流れ込んでくるのが分かった。頭の芯が痺れ、胸がカッと熱くなる。

（まぶしい）

ぎゅっと目を瞑っているのに、瞼が灼けるようだ。光が内側から溢れてくる。

（光？　そうだ、これ……光、だ）

熱でも痛みでもない。光がネイシスの手から流れ込んでくる。そう理解した瞬間、ふっ、とそれが一斉に消えた。

（3）

がくん、と体が前にのめった。抱きとめてくれたネイシスの腕にすがり、ニアナは息を整える。恐る恐る自分の手を見て、それから相手の顔を見ようとし、

（うわあぁぁ！？）

なぜだか急激に恥ずかしくなって、無理やり体をひねって背を向けた。

（な、何、なんなのこれっ！？　なんでこんな気持ち）

消えたかに思われた光が、胸の奥で鼓動に合わせて息づいている。それが、温かい優しさを伴っているのが感じられた。ニアナが混乱しているのを、面白がっていることも。

（やだ、みみみみ見ないでよ！　ちょっと！！）

声に出さずに罵り、両腕を胸の前に交差させて我が身を庇う。と、考えが通じたのか、柔らかな光が少しその存在感を弱めた。

早鐘を打つ心臓が落ち着くまで、どのぐらいかかったか。ようやく普通に呼吸できるようになってから、ニアナはそーっと背後を振り返った。頼む、頼むから、いつもの冷たさで言ってくれ、何を一人でじたばたしているのかと！

しかし生憎、ネイシスの表情は冷ややかとは程遠かった。片手の拳を口元に当ててごまかしてはいるが、目には笑みが漂っている。

「一時的なものだから、心配は要らない」

端的な説明にさえ、妙な思いやりがある。ニアナは真っ赤になって、手近にあった枕を引っつかむなり思い切りぶつけてやった。

「なんなのよこれ！？」

怒声をささやきに抑えられたのは、ほとんど奇跡にも近い。本当なら金切り声を上げて、そこらじゅう走り回りたいぐらいだ。

そんなニアナとは対照的に、枕を除けたネイシスは、いつもの無表情に戻っていた。

「竜と竜侯とのものとは違うが、これも“絆”の一種だ。弱い“つながり”程度のものだな。竜侯ほどにはならないが、軽い病気や怪我から君を守ることが出来る」
「って……あなた、まさか本当に」
「天竜ではない。だから変身しろと言われても無理だぞ。第一、本物の竜は人間の姿をしている時であっても、食事はしないものだ」
「え、そうなの？」
まずい、彼が食事するところは既に全員に見られたではないか。ニアナは顔をひきつらせたが、ネイシスはしらっと肩を竦めた。
「ああ。だが竜にも色々いる、と言っておけばごまかせるだろう。君に合わせて普通の人間らしく暮らせるように練習した、とでも説明するさ。それなら味音痴だとばれても、勝手に納得してくれるだろうし」
心持ち彼が憮然とした理由が分かり、ニアナは思わず失笑した。
「そうよね。あなたって、人間だけどちょっと変わってるんです、って言うより、人間じゃないけど頑張って人間のふりしてます、って方がよっぽどしっくりくるものね」
「ひどいな」
流石に傷つくぞ、とネイシスは恨めしげな顔をする。ニアナは例によって、ごめんごめん、と誠意のない謝り方をした。それから、ふうっ、とひとつ深呼吸。今度はきちんと、心を込めて言葉を口にする。
「……本当、ごめんね。ありがと」
ニアナがやらかしたへまを取り繕う為に、ネイシスはこんな方法を取ったのだ。自分がちょっとどころでなく変わっていることを、ますます明らかにしてしまうというのに。『君に何かあったら一大事』だから、と。
珍しくもしおらしく感謝したニアナに、ネイシスはさらりと答えた。
「礼には及ばない。私もまだ、この職を失いたくはないからな」

「……なんですって？」
「無関係の一市民を巻き込んだ挙句に怪我をさせた、などと知れたら、竜侯閣下ご本人の手で吊るし上げられて、ナナイスの海に沈められてしまう」
　ちなみにナナイスは共和国の首都である。沿岸に位置し、夏はたいそう風光明媚だとか。それはともかく。
「ちょっと。何それ、あたしを心配してくれたんじゃないの？　あたしの失敗なのに、気を遣ってくれて優しいなぁって、今ちょっと感動してたのに！」
「君を雇ったのは私の判断だし、誰でも失敗はするものだろう。重要なのは職務を完遂することで、責任を追及して内輪もめした結果、目的そのものを果たせずに終わる方が馬鹿げている」
　だから失敗を気にするな、最後までやり遂げれば挽回できる、そう慰めたいのだ……とは、とても解釈できない声と顔。気付けばニアナは、奥歯をぎりぎり噛みしめていた。
「本っ当、むかつく！　いずれ本気で呪ってやるわよ。覚悟してなさい、ネイシス！」
　むしろ今すぐ呪う、とでも言うように、ニアナは相手に指を突きつけて、はっきりと強く名前を呼んだ。直後、予想外の感覚が生じ、気をそがれて目をしばたたく。
（あれ？　今のって）
　胸の中で光が大きく一回、脈動する。ネイシスは曖昧な顔で視線をそらした。
「……ネイシス？」
　ニアナはもう一度、確かめるように名前を呼ぶ。間違いなく、鼓動のそばで光が強くなっていく。それ以上意識するとまた混乱してしまいそうで、ニアナは慌てて注意を逸らせた。
「分かった、最初に名乗った時に小声だったのは、このせいね？」
「そうだ」ネイシスは軽く降参の仕草をした。「つながりを結ばない限り、名を呼ばれてもたいした影響はないが、それでもあまり強

く名前と存在を意識して呼ばれると、私の……この力が、相手にも伝わってしまう。だから用心が必要なんだ」
「ふうん、なるほど」
ニアナはうなずきながら、心の中で最後に一回、はっきり呼びかける。
ディアネイシス、――と。
意識がぐっと引き寄せられる感覚がした。ああやっぱり、とニアナは確信する。
天神デイアをあらわす“ディア”が、人の名前につけられることはない。だが、加護を受けているという彼の場合は、デイアを冠してこそ真実の名になるのだろう。
眩しい、だが痛めつけることのない穏やかな光に包まれる。最初の動揺と羞恥が薄れて消え、かつて得られたことのない、もう大丈夫だという安心感に満たされてゆく。ニアナは心地良さに陶然となった。
（竜と竜侯の絆も、こんな感じなのかしら）
常に何か大きなものが、共に在るという感覚。己自身を肯定し、力づけてくれる存在の温かさ。だとしたら、竜と竜侯が何よりも絆を重んじるというのも解る。いつまでもただその力を感じていたい、彼我の境を溶かしてしまいたいとさえ……
「あまり呼ぶと、絆が強まって解けなくなるぞ」
苦笑まじりに忠告され、ニアナは慌てて激しく身震いした。冗談ではない。こんなむかつく男が一生ひっついて離れないとなったら、話はまったく別だ。
ネイシスは落ち着いた態度のまま、さきほどニアナに虐待された枕を元の位置に戻してやりつつ、淡々と話の軌道を修正した。
「少なくとも数日は、光の加護が君にも及ぶ。その間に対処しなければな。今夜いきなりは無理だが、明日か明後日には、幕引きへの筋書きに持って行こう」
「共和国に戻って財産をまとめて来ます、っていうアレね」

実際的な話題に戻り、ニアナも気分を切り替えて座り直す。
「じっくり考えろ、とは言ったけど。けどまぁ、実際的に考えて、簡単に手放すわけないわよね。財産の話はまだ具体的には出してないけど、あの国王陛下なら、使えるものは何だって欲しいでしょうし」
ニアナが肩を竦めると、ネイシスも軽くうなずいた。
「何も要求されないというのは、彼にとっては不可解の極みだろう。あらゆる行動に損得勘定が働く人間にとっては、君の創り出したような王女様は理解できまい。その点でも、すぐさま放り出して自由にさせるという判断はあり得ないな」
「少なくとも、しばらく値動きの様子を見ないことには、ってね。それに、騎士団長にしてみれば、あたし達が共和国に帰っちゃうのは何としても阻止したいでしょ。あれだけ露骨に共和国を嫌ってるんだもの」
自分で言って、ニアナは今更ながら首を傾げる。
「なんであんなに毛嫌いしてるのかしらね？　ティル殿下は、闇の獣が共和国に寄り付けない分、こっちに来てるんだ、って信じてるみたいだったけど……あれも騎士団長に吹き込まれた考えかしら。闇の獣にてこずっている騎士団長としては、彼らを追い出して一国だけのうのうと平穏を満喫している共和国が、憎たらしいんだとか？」
「それだけとは思えないな。何か個人的に、共和国に対して妬みや憎しみを抱く出来事があったのだという気がする。もちろん、騎士団長としての務めにも熱心なようだが。それより、日が落ちる前に散歩に行こう」
「……は？」
午前中ぐるぐる庭を歩き回って、この上まだどこへ？
訝るニアナに、ネイシスは微かながら呆れた気配を見せた。
「フィロス殿に言われただろう、闇の眷属を遠ざけてくれ、と。部屋でだらだら寝そべったままそれが出来るほど、竜侯は万能じゃな

いぞ」
「厭味は結構。だったら最初からそう言ってくれたら良いじゃないの。散歩だなんて言うから、こっちはわけわかんないんでしょ。引き受けたのはあなたなんだから、どうぞ、お一人で行ってらっしゃい」
ニアナは膨れてぷいとそっぽを向いた。本気で怒ったわけではないが、いつもいつも上からものを言われるのは鬱憤が溜まる。たまにはささやかな反抗でもって示さねば。
――と、
「ニアナ」
名前を呼ばれた途端、ちっぽけな意地が脆くも崩れた。一緒に来て欲しい、と言葉にされていないのに、その思いだけが触れてくる。
「っだあぁ！　卑怯者っ！」
ニアナは真っ赤になって腕を振り回し、見えない何かを追い払おうと暴れた。ネイシスはわざとらしく驚いた表情でとぼけている。ニアナがひとしきりじたばたして息を切らせると、彼は小首を傾げて、すっと手を差し出した。
もちろんニアナはそれを取らず、バシッと力一杯はたき落としてやった。
「で、どこから行けばいいの」
不機嫌に唸った彼女に、ネイシスは癪に障るほど平然と答えた。
「どこでも、好きな所から。王宮の周囲を、壁に沿って一巡するだけだ。せっせと歩いてくれ」

空に月はなく、星は薄雲に遮られて見えない。地上に満ちた闇は所々で濃く凝り、その中で蠢くものの姿を隠す。
街は寝静まり、息を潜めている。宿や広場に小さな明かりが灯されているが、風がなくとも消えそうに弱々しい。代わりに、蒼く冷たい光が動き回っていた。闇の中にぽつりと浮かぶ小さな点は、何

かを照らしはしない。ただその点だけが光っている。
ひとつだけ、あるいはふたつで一組。時には、羽虫のように群れ成した一塊が、音もなく行き交う。建物の陰、微かなランプの光さえ届かない漆黒の闇の中を。
街の外にも、それらが蛍のように漂っていた。
見る者のない、夜毎繰り広げられる無音の宴。だが、その夜は常とは異なっていた。
王宮の壁に近付いた青い光が、逡巡し、動きを止める。
忌々しい、淡く穏やかな光がぼんやりと浮かび上がっていた。人の目には見えない程度の、しかし彼ら闇の眷属を阻むほどには明らかな光。
真夏にもかかわらず、闇の足元に霜が降りる。
やがて、彼らは背を向けて、光から遠ざかった。縄張りを侵された当惑と怒りを抱いて。
王宮の住民はそれに気付くことなく、眠りに沈んでいる。所々に立つ不寝番の内わずか数人が、今夜は青い光が現れない代わり、奇妙に寒気がするな、と身震いしただけだった。

六章　隠したものは探される

（1）

翌朝、ニアナとネイシスのもとへ、待ちきれないとばかりにフィロス騎士団長がやって来た。

召使が客人のための朝食を用意しているのも構わず、声高に話しかける。

「素晴らしい！　昨夜はこの王宮内に、一点の青い灯も現れなかったとの報告です、やはり竜の力というのは人智の及ばぬものですな。これほど清々しい朝を迎えられたことなど、ついぞありません」

ちょっとばかり、清々しいを通り越して躁状態ではないのか、とニアナは胡散臭い思いを抱いた。だがもちろん、そんな内心はおくびにも出さない。王女らしく、竜侯らしく、彼女はあくまで泰然とした態度を保っていた。

しかし彼女がどうだろうと、フィロスは気に留めていないようだ。興奮を抑えきれないらしく、身振り手振りまじりにまくし立てる。

「実のところ、正直に申し上げて昨日はまだ、閣下のお言葉にわずかながら疑いを抱いておりました。確かに人ならぬものの力をこの目で見ましたが、天竜だとは……。しかしこうして事実、闇を退けて下さったからには、これまでと同じというわけには参りません」

こもりすぎている熱を冷まそうと、ニアナはわざと相手の意図から外れた言葉を挟んだ。

「国王陛下が、ご決断なさったのですか」

「は？　ああ、いえ、そういう事では……」

勢いを挫かれて、フィロスはやや鼻白む。とは言え、わずかな間のことだった。

「陛下にはまだ、正式な報告を上げておりませんので。しかし、昨夜のことをお聞きになれば、すぐにも心を決められましょう。ニア

ナ殿、ネイシス殿。今宵は王宮だけでなく街にも、御力でもって加護を授けては下さらんか」
「……」
どうにも、フィロスの突進を止める術はないようだ。ニアナはちらとネイシスに目顔で返事を任せた。察したネイシスが、静かに口を開く。
「フィロス殿、昨夜は狭い範囲にとどめておいたので、闇の眷属もさほどの怒りを見せませんでした。しかし王都全体となると、彼らに対するあからさまな挑発になります。今夜は行方不明者などは出ないかも知れませんが、後々は分かりません。昨夜の不寝番は、青い光が現れなかったこと以外に、何か言っていませんでしたか」
「いいえ、何も」
フィロスは記憶を探る様子もなく、あっさりと応じた。ネイシスがじっと見つめても怯まない。ネイシスはなお一呼吸の間、騎士団長を見つめたが、諦めたようにうなずいた。
「……分かりました。では今夜は様子を見るために、わざと不完全に光のしるしをつけておきましょう。後ほど街に出て、大通りと、市壁を一巡することにします」
「かたじけない」フィロスは頭を下げた。「ではお二人が外出されている間に、新しいお部屋を用意させましょう。竜侯閣下をこのような狭苦しい部屋にお泊めするなど、論外ですからな」
「大袈裟になさらないで下さいな、フィロス殿。私達はこのお部屋で充分、何の不満もありませんのに」
ニアナは苦笑まじりに遠慮したが、相手にはさっぱり通じなかった。陽気かつ強引に押し切って、彼はいそいそと部屋を出て行った。国王に報告するのか、召使に指示を出すのか、何にしても早くしたくてうずうずしているようだ。
取り残されたニアナは我知らずため息をつき、やれやれという風情でネイシスを振り返る。
竜侯であるという事はこの場限りの秘密に、と言ったのに、召使

が何人もいる前でべらべらとしゃべってくれた。使用人は人の数に入れていないのか、“この場”とは王宮内すべてだと考えているのか。加えて明らかに、ニアナ達をこの部屋から遠ざけたがっていた。そうした自分の意図に、無理やり二人を従わせた自覚はなさそうだが。

ニアナが考えたあれこれは、ネイシスも同感であるらしい。召使の手前、言葉にはしなかったが、彼もまたいささか疲れたように、天を仰いで嘆息したのだった。

二人が街に出ると告げると、門番の騎士は露骨に嫌な顔をした。が、騎士団長直々の頼みに応えるためだ、と言われては逆らえない。いささか不安げながらも、お気をつけて、と送り出してくれた。

ニアナとネイシスは街を貫く大通りを歩き出した。

「はー、やれやれ。やっと人目を気にせずしゃべれるわね」

王宮から離れると、ニアナはうんと伸びをした。空色のマントは部屋に置いてきたので、余計な興味を持たれる心配もない。きらきら頭が少々目立つのは致し方ないにしても。

ネイシスは時々建物の壁に手を触れながら、ゆっくり歩いて行く。それが“光を染み込ませている”からだというのは、ニアナにも分かった。ごく微かなきらめきが、ネイシスの指先から壁に流れ込むのが、視覚とは異なる何かの感覚で見える。これも“つながり”の効果らしい。

「彼らも今頃、我々を気にせず大っぴらにあれこれ相談しているだろうな」

「でしょうね。あたし達をよそへ移らせておいて、何をこそこそするつもりなのかしら。それとも、新しいお部屋は外から簡単に鍵をかけて閉じ込められる、とか？……はぁー、街に出られたついでに議長さんに報告するべきか、って思ったけど、実質なんにも掴めてないわよねぇ」

フィロスが相当な部分、王宮の財布と国政の舵取りを握っている

と分かったものの、そんな程度はゲニクスも承知だろう。だからこそ、あえて他国人を頼ってまで探らせようとしたのだ。確実な証拠がなければ――手に入らないまでも『ある』ことが明白にならない限りは、議長も手出しが出来まい。

ネイシスも同じことを考えたのか、小さくうなずいた。

「そうだな。我々にとっては初めての情報だが、議長が欲しいのは確証だ。騎士団長が王宮の金を好きに使っているとして、何に費やしているのかをせめて突き止めなければ」

「そのモノを見付けるか、帳簿とか契約書の類を見付けるか、あるいはそれを売りつけた商人を押さえるか、ね」

ニアナは指折り数え、ふむ、と首を傾げた。

「店を畳んで逃げ出すまでに、手掛かりだけでも見付けられるかしら？」

「見付からなければ、それまでだ。議長には申し訳ないが、ほかの方法で騎士団長に対抗して貰うしかないだろう。ただその場合も、共和国としては議長と議会を援護するという立場を示しておけば、騎士団が国を乗っ取りにくくなる……」

ネイシスはそこまで言い、不意に立ち止まった。ニアナは気付かずにしばらく行き過ぎ、あれ、と目をしばたいて振り返る。

「どうしたの」

問いかけても返事がない。彼は黙って、通りの反対側にある建物を見上げていた。看板からして宿屋だ。いやに険しい視線の先には、人影のない二階の窓。ニアナもとことこ傍らへ戻って、同じ場所をちらりと見た。

「怪しい奴でもいた？」

「分からない」

ネイシスは首を振り、ニアナに目を下ろした。

「そういえば、君はどうして芸人一座を離れたんだ？　誰かと揉めて脱走したとか、追われる立場ではないだろうな」

「……円満な別れ方だとは言えないけど、でも、追われてやいない

筈よ」
　ニアナは歯切れ悪く答え、それ以上の説明は勘弁して欲しい、と顔を背けた。が、いつまでもネイシスの視線が突き刺さって痛い。ため息をついて、渋々白状する。
「あたしね、売り物にされるところだったの」
「売り物？」
「街の金持ちの屋敷に行くように、言われてね」
「――ああ」
　ネイシスは曖昧な声音で納得した。つまりは売春だ。
　旅芸人と言っても、本当に芸だけを売る一座はないに等しい。女優は娼婦を兼ねているし、あまりおおっぴらに売買出来ないものをこっそり運んだりもする。ニアナが育ったのは比較的“堅い”一座だったが、それでも舞台がはけた後で女が客のところへやられるのは、珍しくなかった。
「君は人目を引く美人だからな」
　慰めるつもりなのか、それとも例によって『事実』なのか、ネイシスはそんなことを言った。ニアナは路面に目を落とし、素っ気なく応じる。
「自覚してるわ。だからけったいな格好してるんじゃない。普通じゃないわよ、関ると面倒臭いわよ、ってね。……一座でこの歳まで売り物にされずに済んだのは、あたしが舞台に立つと客の反応が全然違ったからよ。十四の時、はっきり座長に言ったの。あたしにも体を売らせるつもりなら、あたしはもう舞台には立たない、立てない、ってね。あたしは舞台で自分を競りにかけてるわけじゃない。そう思ってしまったら、今までのような芝居は出来なくなる、って」
　自意識過剰な小娘の生意気を、座長は笑って容認した。急いでニアナを売らずとも、他に花盛りの女が何人もいたからだ。それに、一人ぐらい純潔な娘がいた方が、一座の格も上がる。高嶺の花ほど人を惹きつけるではないか。
　ニアナは旅芸人には珍しく、体を売らない本物の役者だとして、

一部で噂にもなった。おかげで彼女は長い間、ひたすら芝居に専念していられたのだが、
「でも、金持ちには勝てなかった」
とうとう、無粋な商人が金にものを言わせて、座長の首を縦に振らせたのだ。

（2）

「分かってはいたのよ。まわりの皆を見ていたから、自分だけいつまでも無事だとは思ってなかったし。そりゃあ、やること自体は、ぞっとするけど……でも、娼婦ってもの自体は、なんていうか、容認してた。仲間だもの。後ろ指差したり、顔しかめたりする人は大勢いたけどね」

「それで君は、一座を離れたのか」

「結果としてはね。迎えが来て、覚悟を決めて歩き出して……ちょっと行ったら、靴紐が切れちゃって。もたもた結び直してる間に、後ろが騒がしくなったの」

一座は広場に馬車を置いて、そのまわりで野営していた。宿屋に泊まるとなると、大事な商売道具に目配り出来なくなるし、時に憂さ晴らしの対象にされる根無し草の一座は、いつでも揃って逃げ出せるよう備えておくべきだからだ。

しかし、今回はそれが出来なかった。

「戻ってみたら、……皆、殺されてた。あたし、よっぽど高く売れたんでしょうね。迎えの連中が代金を支払うのを待って、街のならず者が皆を襲ったみたい。信じられなかったわ、だって街の中よ？一人残らず殺されて、金庫が壊されてた。それで……あたしは、逃げ出したの」

記憶がよみがえり、ニアナは我が身を抱いた。待て、と怒鳴る男の声。散乱する小道具、引き裂かれた衣装、足をむき出しにして地面に転がっている女優。馬車の陰で、誰かが獲物をまだ漁っている物音が聞こえた。

（馬鹿野郎！！　早すぎるぞ、女が逃げちまっただろうが！）

迎えの男が罵る声で、事情が察せられた。商人は高嶺の花を摘み取るための代価を惜しんだのだ。女を連れて来させてから、ならず者に一座を襲わせ、金を取り戻す。女はそのまま屋敷に囲ってしま

えばいい。そうもくろんだのだろう。
「その商人は、君を探していると思うか」
ネイシスが静かに問うた。ニアナは涙がこぼれる前に指で拭い、きゅっと唇を噛んで首を振った。慎重に息を吸い込み、動揺を鎮める。
「そんなに大きな街じゃなかったから、街の外にまで人をやって探すってことは、ない筈よ。あの街じゃ幅を利かせていたにしても、よそにまで手を伸ばせるほどじゃないわ。ここからじゃ、かなり遠いしね」
「……だったら良いんだが」
心配そうなネイシスの声音に、ニアナも不安を掻き立てられる。
「やっぱり、怪しい奴がいたのね？」
「そうだ。あの窓から誰かが、とても強い関心を持って君を見ていた。もしや知り合いかと思ったんだが、私が振り向いた途端に姿を隠したのでね。君の容姿に目を惹かれただけの内気な男かもしれない」
気を軽くさせようとしてか、ネイシスは楽観的な憶測を言い添える。ニアナは過去の記憶を振り払い、意識を現在に切り替えた。
「ひょっとしたら、舞台でのあたしを覚えている、昔の観客かも。自分で言うのもなんだけど、人気あったからね。覚えられていても不思議じゃないわ。何にしても、今は顔を合わせたくないわね」
同じ窓をまた確かめたくなるのを我慢しながら、ニアナは顔をしかめて唸った。何度も見上げて、うっかりその当人と目が合いでもしたら面倒なことになる。何のつもりで見つめていたにせよ――
「って、ちょっと待って」
はたと気付いて、ニアナはさらに険しい顔になった。半ば襟首をつかみ上げるようにしてネイシスに迫り、小声で詰問する。
「今、変なこと言わなかった？　あたしを見てる奴に気がついたのに、振り向いたら引っ込んだ、って……そいつのこと、見たの、見なかったの？」

鋭い追及を受け、ネイシスはごまかすようにちらと目をそらした。
それから、いつもの無表情で一言。
「姿は見ていない。気配がしたんだ」
「気配、って」
ニアナは怯んだように指をほどき、ネイシスから半歩離れた。これまでも度々、彼の感覚の鋭さには驚かされてきた。だがいくらなんでも、これはおかしくないか。人や荷車がひっきりなしに行き交い、客寄せの口上が響き渡る雑踏の中で、通りの反対にある建物からの視線、それも自分にではなく連れに注がれている視線を感じ取るなど。
流石に薄気味悪くなって、ニアナは無意識にじりじりと後ずさる。失礼だとか傷つけるだとか、慮る余裕はない。
彼女の態度に、ネイシスは小さくため息をついた。
「見えるんだ、私には。生まれつきだからどうしようもない」
「そ……そうなの……」
ニアナはひきつりながら相槌を打ち、無理に明るい声を装った。
「まあ、便利かもね？　可愛い女の子の熱い視線に気付かない、なんてことは、ないわけだし」
「時々煩わしいよ」
ネイシスは肩を竦めて歩みを再開する。ニアナはほっとして、やや後ろを歩きながら、ぎこちなく冗談を飛ばした。
「あぁら、そんなにおモテになったわけですか先生」
「そういうわけじゃない。ただ、自分に向けられる色々な……好奇心や期待や、あれこれの感情に、うんざりする時もあるということだ」
「ただの軽口なんだから、いちいち真面目に訂正してくれなくていいわよ。面倒臭いわね」
「悪かった」
「だから、いいって言ってんのに……」
それからしばらく、二人は黙っていた。通りを城壁まで歩き、門

番に不審な顔をされながら壁沿いを進む。
やがて生来おしゃべりなニアナが、沈黙に耐えられなくなって口を開いた。
「立派な城壁よね。何の攻撃を防ごうとして造ったのかしら。盗賊とか、闇の獣？」
「現実的には、そうだったろうな。昔の記録によれば、入植初期は丸太の杭を打ち込んで、塀にしてあったらしい」
ネイシスはうなずき、城壁を振り仰いだ。今は大部分の壁が石積みになっている。帝国時代の要塞には比ぶべくもないが、この規模の街にしては充分堅牢だ。
「だが立地条件からして初代王が懸念したのは、軍隊の攻撃だろう」
「軍隊って、共和国の？」
パルテニアに隣接しているのは、エルファレニアただ一国だ。あとは明確な領有権のない空白地帯によたよた走る“国境”を挟んで、小さな“国”が点在するだけ。しかもその有する軍隊といったら自警団と大差なく、城壁を備えた街を攻める力などない。
「そうでもあり、そうでもなし」ネイシスは首を振った。「直接ここが標的にされるというより、共和国とウィネアの戦を恐れたんだろうな。ウィネアは北部同盟の盟主、かつての州都だ。帝国時代の兵力をほとんど丸々一個軍団、そのまま抱えている。共和国と対立すれば、間にあるパルテニアが戦場になるだろう」
「だったら、こんなところに街を造らなければ良かったのに」
「この辺りは農業に適しているから、いずれ誰かが入植するのは明らかだった。それなら最初に自分が手をつけて、子孫に国を残そうと考えたんだろうな。それに、戦になったとしても、有利な側に同盟を申し出れば物資兵力の提供だけで済んで、街を攻撃されることはない。……それでも、壁のない街にすることは不可能だったわけだが」
「なるほどね」
ニアナも城壁に歩み寄り、なんとなしに小突いてみた。

「で、今では共和国も栄えてきたから、ますます壁が大事になった、ってわけか。実際問題、どうなの？　あなたのお国の事情って。しがない旅芸人としても、戦は勘弁して欲しいところだけど」
「戦争をしかける気運については、まったく無い。言ったろう、人間がはびこれば闇の眷属も活発になる、と。領土の拡張を目指せば、必然的に危険が増す。国力は確かに充実してきたが、それを対外的に行使することはない」
「でも、騎士団長は、そうは見ていない」
ニアナがささやき、ネイシスも「そのようだ」とため息をついた。
「彼から実権を取り上げて、国王に戻すかシグルス王子に渡さない限り、パルテニアは共和国を敵視した政策を続けるだろうな。共和国からの輸入品に関税と奢侈税を二重がけするのも止めないだろうし、国交を回復させる見込みもない」
「あたし達を利用したいのも見え透いてたしねー。本当に竜侯がこの国に居着いたら、喜んで共和国に喧嘩売るんじゃないかしら。早いとこ逃げ出したいわ」
やれやれ、とニアナはお手上げの仕草をする。そしてすぐに「でもまぁ」と気を取り直した。
「竜侯なんかを持ち出したおかげで、騎士団長の真意もちょっと見えたりしたわけよね。悪い事ばっかりでもなかったんじゃない？」
失敗を取り繕うには、かなり苦しい言い訳だ。厭味の三つ四つは覚悟したのだが、ネイシスはちらと彼女を見ただけで、「そうだな」とあっさりうなずいた。ニアナは拍子抜けして体勢を崩してしまう。
「そこで認められると、調子狂うんだけど」
「良い点もあった、というのは事実だろう。残りが悪い事ばかりだとしても」
「……ええハイそうでしたわね失礼致しました余計なこと言いました私が悪うございました誠に申し訳ございません」
ニアナが息継ぎなしで棒読みの謝罪を終える頃、行く手の様子が変わった。ぐるりと街を半周して北門が見えるところまで来たのだ

が、城壁の足元に建物が現れたのだ。のっぺりした漆喰壁の上部に、明り取りの小さな窓が細く穿たれているだけなので、一目で倉庫だと分かる。おまけに騎士数人の警備つき。とくれば、

「武器庫かしら」

あるいは食糧庫、としか考えられない。ニアナはネイシスの袖をちょいと引いた。

「近寄らない方がいいんじゃない？　城壁全部、ずーっと手で触っていかなきゃならないわけじゃないでしょ」

ささやいたものの、時既に遅し。二人の挙動不審に気付き、若い騎士が警戒もあらわにやって来た。

（3）

「止まれ！　そこで何をしている」
高圧的に命じられ、二人は大人しく動きを止めた。びくつくでもなく平静に、何か、と目顔で問い返す。騎士は面食らった表情を見せたが、態度を変えることはなかった。槍を握る手に力を込めて、重々しい足取りで二人の前に立つ。
「何者だ。ここに何の用がある。答えろ！」
詰問されて、ネイシスがちらりと視線をニアナに向けた。任せた、ということらしい。
（またとんでもない事を言い出しても、知らないわよ）
大失敗をやらかした後だというのに、まだ信頼されているのか、それとも単に説明するのが面倒臭いのか。ニアナは内心呆れつつ、一歩進み出て頭を下げた。
「この辺りが立ち入り禁止とは知らず、失礼しました。私共は美術品の鑑定のため、この数日、王宮に滞在している者です」
「美術商か？」
「査定と買取が専門ですが、そのようなものです。たまたま、こちらの者が天神ディアの加護を授かっているとお話ししたところ、騎士団長フィロス殿から直々に、闇の獣を退けるのに手を貸して欲しいと頼まれました。今は、そのために城壁を一巡しているところです」
ニアナの言葉を聞くうち、胡散臭げだった騎士の顔が、驚愕から賛嘆へと変わった。
「奴らを倒せるのか」
意気込んで身を乗り出すさまは、英雄の勲に憧れる若者そのものだ。ニアナはたじろぎ、恐縮して見せた。
「それほど強い力はありません。ただ、彼らが寄り付きにくくするぐらいで」

「なんだ……」
途端に騎士は肩を落とし、露骨にがっかりする。そこへ、ネイシスが淡々と補足した。
「私の力は微々たるものです。しかし城壁にそって光を少しずつ染み込ませておけば、街に出現する数は減る筈です。完全に排除することは叶わずとも」
そこまで言って、視線を倉庫へ向ける。
「あの倉庫が特に重要で、闇の眷属にさえ近付かれたくないのであれば、ほかよりも強く光を宿しておきますが」
「いや、結構」
即答だった。台詞を断ち切るようにして、騎士はネイシスの申し出を退ける。二人が何を言う間もなく、騎士は自分の過敏な反応にばつが悪くなった風情で、目をそらして曖昧に続けた。
「団長に確認しなければ、何人たりとも近付けてはならないという命令だ。貴殿らが本当に闇の獣を退けてくれるのならありがたいが、ともかく、この場で許可は出せない。迂回してくれ」
「分かりました」
ネイシスはすんなり了承して一礼し、ニアナを促してその場を離れた。
倉庫の近くをぐるりと遠回りして、充分に離れてからふたたび城壁に戻る。ニアナは何度かちらちらと背後を振り返ったが、騎士はその間、ずっと二人から目を離さなかった。
声が届かなくなり、騎士がようやく安心して倉庫の番に戻っていくと、ニアナはふうっと息をついた。
「あれじゃ、見られちゃヤバいもの隠してます、って自己申告してるようなものじゃない。騎士団の教育ってどうなってんのかしらね」
「……」
返事がない。
ニアナは胡乱な顔で連れを振り向いた。歯車のずれた受け答えは多々あっても、無視されることは滅多にないのだが――案の定、ネ

イシスは後ろを向いて倉庫を眺めたまま放心していた。
「ちょっと、お兄さん。聞いてる？　魂だけ、どこかに飛ばすのはやめてよね」
　また考え事に没頭しているのか。ニアナは呆れて、目の前で手をひらひら振ってやった。ネイシスはそれさえ気付いていないかのように、瞬きもせずつぶやいた。
「まずいな」
「うん？」
　味音痴が治ったのか、と茶化す台詞が一瞬だけ胸をかすめたが、口には出せず、ニアナはただ曖昧に先を促した。流石にそろそろ、単なる無表情なのか、真剣なのかの区別ぐらいはつけられる。
　ネイシスは小さく頭を振ると、ニアナを見つめてささやいた。
「応援を呼ぶべきかも知れない。私の手に余りそうだ」
「なに、どういう事」
「私の仕事は状況を調べるだけで、それ以上のことについては権限を持たない。むろん情勢が急変した場合などは、臨機応変に対処することが許されるが……」
「いや、だから、何がどうしたのよ？　倉庫の壁が透けて中身が見えた、とか言わないでよ」
「流石にそんな能力はない。だが……」
　ネイシスは言いながら、ゆっくり歩き出す。片手を城壁につけてはいるが、気もそぞろのようで、光が伝っていない。ニアナはちらとその指先を不安げに見たが、今はそれよりネイシスの様子が気がかりだ。
　ニアナが傍らに寄り添うと、彼は眉間に険しい皺を刻んで、ぽつぽつと独り言のようにつぶやいた。
「……単なる槍と楯の類なら、ああまで警戒はしないはずだ。美術品の購入にかこつけて横領した金で、あれを作らせたのか……騎士団長が本気で戦に備えているのだとしたら、関税どころの話ではなくなる。兵糧確保のために陸路の流通を遮断されたら……」

「よく分からないけど、パルテニアが近い内に喧嘩を売って来そうだってこと？　でも、今から知らせて誰を呼ぶにしても、時間がかかるわよ。うまく行けば、あたしが――つまり王女様が、共和国の財産をまとめて戻って来るまでの時間は、稼げるだろうけど」
「ああまったく、偶然とは言えありがたい設定にしておいたものだよ」
言葉の割に、ネイシスの声はさっぱり嬉しそうでない。厳しい表情のまま、彼はニアナに小さく頭を下げた。
「すまない。出来るだけ早くと思っていたが、まだしばらく、ここに留まる必要がありそうだ。君に竜侯の演技を続けてもらわなければ」
「謝らないでよ。あたしが蒔いた種なんだから、実が毒だろうと腐っていようと、自分で刈り取るわ。でも実際問題、あたし現実の竜と竜侯のことはよく知らないから、そこんとこは助けてよね」
「むろんだ。……精霊を介すれば共和国ともすぐに連絡がつくから、あとは向こうで対策と方針を決めて、適した人物が送り込まれるのを待つだけだ。そんなに長くはかからないと思う」
「それは助かるわ。だけど、焦らなくても大丈夫じゃない？　街の様子は特に変わってないし、いくら騎士団長がやる気でも、実際に戦を起こすとなったら、色々面倒臭いものでしょ。議長さんの言葉が本当なら議会は反対するだろうし、それを強引にねじ伏せたとしても、兵を出すにはあれこれ準備が必要なわけだし」
ニアナは実際にのんびりしているような口ぶりで言い、ネイシスの緊張を解こうとした。そうしなければ、彼は今にも、放たれた矢のごとく飛び出しそうな気がしたのだ。珍しく、怯えているようにも見える。
ネイシスは「そうだな」と同意はしたものの、表情は相変わらず張り詰めていた。

（4）

王宮に戻る途中で、ゲニクスの使者が二人を見付けて駆け寄ってきた。

「ああ、良かった、ネイシス文化委員ですね？　主（あるじ）がお会いしたいとのことです。お時間は取らせませんので、お立ち寄り頂けませんか」

「新しい美術品を見付けられましたか」

「はい、それで鑑定をお願いしたいと。よろしいでしょうか」

言葉だけはいたって事務的に、何ら不審のないやりとり。だが使者は主と他国人の間に交わされた約束を知っているらしく、愛想笑いが空々しい。ネイシスは「もちろんです」と応じて、案内されるままに議長の屋敷へ向かった。

ニアナもそれに従いながら、内心肩を竦める。王宮に入り込んで、まだたったの三日だというのに、気短な議長さんだ。中身のない報告でも、毎日聞かないと気が済まないのだろうか。

――と思いきや、向こうは向こうで、王宮に耳目を放っているらしい。先日のように二人を奥の部屋まで通した議長は、複雑な苦笑を浮かべて切り出した。

「竜侯とはまた、思い切った芝居を打ったものだな」

「……」

でっち上げた当のニアナは何とも答えられず、嫌な顔で沈黙する。ネイシスにならともかく、この議長にまで文句を言われたくはなかった。その心中を代弁するように、ネイシスがいつもの無表情でしらっと応じる。

「調査の進め方に関して指示は受けられない、と申し上げた筈ですが」

「むろん聞いた、忘れてはおらん。だが……やれやれ、まあ良い。それで、何か掴めたかね」

「既にご承知であろうことが大半です。騎士団長は王宮に出入りする美術商を審査にかこつけて抱きこみ、美術品購入の名目で国庫の金を横領し、それを騎士団の武装強化に充てている。証拠を手に入れたわけではありませんが」
「うむ……」
やはりか、というように議長が唸る。それを見てニアナは、ふと浮かんだ疑問を口にした。
「税金の出納管理は誰が行っているんですか？　まさか騎士団の仕事ではないでしょう」
金庫を警備するのは騎士団であっても、中身の出し入れを行うのは別のはずだ。議会が任命した管財人か、あるいは国王本人か。
するとゲニクスは、渋い顔で短く答えた。
「王妃だ」
「――！」
思わずニアナは目を丸くする。騎士団長と王妃は随分と仲が良さそうだ、などと見てはいたが、こうなってくるとそこに男女関係以外のものが絡んでいるのは確実だろう。
「建国以来のならわしでな。王宮の財布を握っているのは、代々の王妃なのだ。むろん予算を編成するのは議会だが」
恐らく彼自身、薄々娘の裏切りに気付いていたのだろう。だから二人に依頼をもちかけた時、わざわざ王妃が娘であることを話題にしたのだ。注意を促すためなのか、情けをかけてくれるようにという意図だったのかは分からないが――もしかしたら、本人でさえ分かっていないかも知れない。
ゲニクスは咳払いし、平静を取り繕って続けた。
「王宮に滞在している間、それらしいところを見たりはしなかったかね。騎士団長が美術商や……あるいは王妃と、密談や取引を行っている様子だとか。あるいは、鍛冶屋だとか」
「ちょうど、それをお願いしたかったところです」
ネイシスが言ったので、ゲニクスは眉を上げた。ニアナも会話の

方向がつかめず、不可解な顔をする。二人のまなざしに、ネイシスは静かな声で応じた。
「この街の鍛冶屋をすべて、調べて頂きたい。恐らく騎士団に、ある武器の部品を納入しているはずです。まるごとすべてを注文すれば相当な額になるだろうし、何より噂になってしまう。だから目的や完成形は知らせず、部品ごとに分けて注文しているでしょう」
「ある武器、とは……？　君はそれを見たのかね」
「はい」ネイシスはうなずいた。「間接的に、ですが。城壁際の武器庫に隠されているはずです」
「一体どうやって。あの倉庫には、騎士団長の許可がなければ我々議員でさえ、立ち入ることが出来んのだぞ」
　さすがにゲニクスが不審な顔をする。ニアナは、彼が先刻のことを言っているのだと分かったが、口出しできずにハラハラしながら見守るしかなかった。見張りの態度を元にただ推測しているだけなのか、それとも彼がその特殊な感覚で何かを捉えたのか、ニアナは知らないのだ。
　ネイシスは目を伏せ、小さく頭を下げた。
「今はご容赦を。いずれご説明する時も来るでしょう。言えるのは、武器庫にあるのはただの槍や盾ばかりではない、ということ。……弩（いしゆみ）が、あるはずです」
「なっ――」
　ゲニクスが仰天し、ニアナも息を飲んだ。
（ああ、それであんなに）
　ニアナは瞑目し、唇を噛んだ。実物を見た事はないが、芝居に出てくる言葉だから知っている。それがどんなもので、何を目的としているのかを。
　弩とは、竜をも射落とす大型兵器だ。
　帝国が滅びる前、東南部のノルニコム州を独立させた炎竜侯は、帝国の将軍が率いる軍との戦いで、弩の直撃を受けて惨敗した。以来、どんな芝居でも竜を倒すのは弩と決まっている。

（つまり、弩があるってことは、本気で竜と戦うつもりだ、という証拠。……そりゃ青ざめても無理ないわね）

天竜は共和国の象徴だ。権力は持たない、とネイシスは言ったが、現実問題として竜を畏れ敬わない民はいないだろう。それが他国人に弩を向けられ、射落とされるようなことになれば、衝撃は計り知れない。

「馬鹿な」

ゲニクスが、かすれ声でうめいた。彼もまた、弩のなんたるかを知っているらしい。顔をこわばらせ、本気なのか、とつぶやく。単なる仮想敵国ではない、現実に戦いを挑むつもりでいるのか、と。彼はこめかみを揉みながら、なんとか否定しようと言葉を探した。

「しかし……弩については、帝国の軍団、それも旧第五軍団の機密のはずだ。大型の弓だということは知られているが、図面はもちろん、製作に関わった者も、この北部に流れてくることなどあり得ない」

「確かに、帝国が瓦解した後、もはや竜に対して弓引く必要などないとされ、図面は破棄されました――表向きは。しかしあれは、竜でなくとも騎兵に向けて使う事が出来ます。実際に成果を挙げた兵器が、一片の手がかりさえ残さず葬られるなど、あり得ません。些細な情報でも根気よく拾い続け、必要な技を持つ人材を逃さず手元に集めれば、復元は可能です」

「人材、って、まさか！」

あっ、とニアナは思わず叫んでいた。ネイシスが振り返り、琥珀の瞳に肯定の色を浮かべる。それから彼は、不審げなゲニクスに向き直って続けた。

「王宮に入る前、同じ宿屋に泊まっていた男が騎士団に捕縛される現場に居合わせました。窃盗犯だという説明でしたが、そのようには見えなかった。議長、騎士団が捕らえた人間はどこに収監されるのですか？　街中で捕らわれた者が最終的にどうなったか、確かめてご覧になったことはありますか」

「……」
ゲニクスが沈黙し、ニアナも唇を噛んだ。
牢獄を見れば、その街の程度が分かる。牢を見ることさえ叶わないというのは、どういった順位をつければ良いのだろう。
長い沈黙の末に、ゲニクスが暗い声音で言った。
「よく分かった。騎士団の者に内偵を命じよう」
「内部に味方が？」
ニアナの問いかけに、ゲニクスは辛辣な笑みを閃かせた。
「騎士団が完全に団長一人のものだと思うのかね。議員は誰しも己が味方に騎士を抱き込もうと、奪い合っておるよ。万一騎士団が議場を取り囲んだとしても、野兎よろしくなぶり殺しにされたくはないからな」
「なるほど」
ニアナは納得の顔でうなずいた。議員同士で限られた数の猟犬を取り合っている間に、横から騎士団長が一匹二匹と掠め取って、気付けばすっかり彼の一人勝ちになっていたのだろう。
（だから今さら慌てて騎士団長を失脚させようとしている、ってわけね。やれやれ、この国の中だけのことなら、付き合ってらんない、って放り出すところなんだけど）
彼女が内心で小馬鹿にしたのが、ゲニクスにも伝わったようだ。議長は不快げに顔をしかめ、ごほんと咳払いした。
「他の議員達とも協力し、証拠を掴み次第、騎士団長を更迭するべく手筈を整える。君達はその間、引き続き王宮に滞在して警戒を続けて欲しい」
「そのつもりです」ネイシスが冷ややかに応じた。「ですがゲニクス殿、あなたの指示に従うわけではありません。共和国はパルテニアとの戦を望みませんが、パルテニア国内における特定の政治勢力と癒着するつもりはありませんので、誤解なきように」
歯に衣着せずに言い切ったネイシスに、ゲニクスは複雑な驚きの目を向けた。しばし、両者の視線がせめぎ合う。先に目を逸らした

のはゲニクスだった。取り繕うように小さくうなずき、肩を竦める。
「これは、申し訳ない。職務柄、人に指示を出すのに慣れてしまっておるのでな、つい貴殿が他国人であるということを忘れてしまった。うむ……ともかく、そちらはそちらで安全に注意しながら、協力して貰いたい」
「ゲニクス殿も、ご用心を」
承諾代わりにネイシスはそう応じて、軽く一礼した。その態度はまるで、ゲニクスと対等に張り合えるほど長く政治に関わってきた者のようだった。

七章　何はなくとも意地はある

（1）

王宮に帰った二人が元の客室に向かうと、召使がどこからともなくやって来て、新しいお部屋はこちらでございます、と案内してくれた。荷物も勝手に運んでくれたらしい。

（ふむ？）

ニアナは召使の後をついて歩きながら、以前の部屋は何が不都合なのかを観察しようとした。

（芝居でよくあるのは、豪華な客室に招き入れておいて、外から閉じ込めるとか……隠し部屋があって刺客が潜んでるとか、だけど。前の部屋は確かに、そういう細工は出来なかったわね）

しかし、理由はそれだけだろうか？

悩みつつ、庭に面した通廊を歩き、豪華な棟の内部へと進む。視界が薄暗くなって、はたとニアナは気付いた。

（……庭から見えない部屋？）

それとも、庭が見えない部屋、と言うべきか。

（庭に出れば植木に身を隠して逃げたりとか、色々出来そうだけど……それを防ぐため？　それとも、庭で不都合な“逢引”をしてるから、見られたくないとか？）

王妃と騎士団長が仲良く散歩する場面などは、ありそうなことだ。そこで話す内容がどんなものかは、ともかくとして。

あれこれ考えている内に、新しい部屋に着いていた。前の客室よりも広く、壁にはのどかな風景画が描かれている。ベッドが大きい点はニアナも気に入った。召使が下がると、早速ぼすんと飛び乗ってひっくり返る。

「あはっ、広ぉい！　こんなベッドに寝るの、初めて！」

「転がり回って落ちないでくれよ。王女様が、はしたない」

「落ちないわよ、失礼ね。なによ、少しぐらいはしゃいだっていいでしょ？　本っ当、面白くないんだから」
「……悪かった」
ネイシスはぼそっと唸り、勝手に移動された荷物を点検し始めた。ニアナはベッドの端に腰かけ、足をぶらぶらさせてそれを見物する。身軽なのは良いものだ。
ややあって彼女は、いつもより沈黙が重いと気付き、遅まきながら関係修復を試みることにした。
「あー、ええとね、別にさっきのは本気で文句言ったんじゃないからね？」
ネイシスは無言のまま、感情を消した顔で振り返る。ニアナは首を竦めた。
「あなたに面白さなんて期待してないし。馬鹿正直だし堅物だしで、ちょっとウンザリするのは確かだけど……別に、嫌いじゃないわ。だから、悪かったとか謝らなくてもいいわよ」
曖昧な表情で、軽い口調を装って、適当に取り繕うかのように言う。だが、そもそもそれが通じる相手ではない上に、今は“つながり”があるということを、彼女はうっかり失念していた。
「……」
ネイシスは目をしばたたいただけだったが、ニアナの意識の中では、呆れるぐらい露骨に光が明るくなった。途端にニアナは恥ずかしくなって、頬を夕焼け色に染める。
「ちょっ、よ、喜ばないでよ別に褒めてないし！　心底ウンザリなのは本当だし！」
大声を上げた彼女に、ネイシスはややおどけてごまかすように小首を傾げた。どういう意味なのか、小さくうなずいて咳払いし、何も言わずに目をそらす。ニアナは羞恥のやり場がなくなって、またしても枕を掴んで投げつけた。
まともに頭部にくらったネイシスは、枕が床に落ちる前に受け取め、やれやれと投げ返した。

「君には専用の投げ枕が必要だな」
「余計なこと言わなきゃ、投げないわよ」
がるる、とニアナは唸る。ネイシスは「何も言ってない」と肩を竦め、直後、ふと何かを聞きつけて戸口を見やった。ニアナは彼の態度から誰かが来るらしいと察し、さっと表情を変えてベッドから降りる。
案の定、じきに二組の足音が近付いてきた。軽い方が性急に、もう一組がたどたどしく。
この取り合わせは、とニアナが予想すると同時に、ティリウスの声が呼ばわった。
「ニアナ、ネイシス！　入るぞ！」
ほとんど間を置かず、湯気でも噴きそうなほど怒りを満面にたぎらせて、王家の末子がずかずか入ってきた。ネイシスを無視してニアナに詰め寄り、両手を腰に当てて仁王立ちする。
「よくも騙したな」
面と向かって断罪され、ニアナは少し瞑目した。やはり、この場限りに、と言ったのは無駄になったようだ。不機嫌なティリウスの横では、複雑な顔のエディクスがもじもじしている。
ニアナは内心こぼれたため息を押し隠し、年長の王女らしい優しさでもって微笑んだ。
「文化委員と申し上げたのは、嘘ではありませんよ、殿下」
「騙したことに変わりはない」ティリウスは憤然と遮った。「もっともらしいことを言っておいて、結局おまえも、共和国の竜侯と同じじゃないか。力をふりかざして、恩着せがましく振舞って、すべてを自分の思い通りに動かす独裁者だろう！」
「ティル、言い過ぎだ」
横からエディクスがたしなめたが、ティリウスの怒りは収まらない。なおも非難しようと口を開いた彼の前に、ニアナはすっと屈んで片膝をついた。
「殿下、誰にそのようなことを教わったのです？　私は共和国の竜

侯とは一面識もありません。殿下は彼に会い、その耳で彼の言葉を聞き、その目で彼の行いを見たのですか」
「……」
静かに問われて、ティリウスは頬を紅潮させたまま、言葉に詰まる。だって、と唇が小さく動いたが、声にはならなかった。ニアナは少年の目を真っ直ぐに見つめ、真摯に語りかける。
「殿下のお心を傷つけたのなら、申し訳なく思います。ですがどうか、他人から聞かされた噂を元に、すべてを決め付けないで下さい。……殿下、人は皆、物事を己の見たいようにしか見ず、言いたいことしか言いません。惑わされず、殿下ご自身の曇りなきまなざしで物事を見て下さい」
「傷ついてなんかいない。子供扱いするな！」
「でしたら、誰の言葉に振り回されているか、自覚がおありでしょうね？」
膨れっ面のティリウスに、ニアナはやんわりと、しかし弁解を許さない言葉を投げかけた。ティリウスは悔しそうに唇を噛み、うつむいて黙り込む。ややあって、彼は苦々しくつぶやいた。
「……フィロスだ。騎士団長が言ったんだ、竜侯は独裁者だと」
「私のことを話した時に、ですか」
「違う。もっと前だ。地理を教えてくれた時に……共和国の話を。だが」
ティリウスはそこで顔を上げ、挑むように目を据えた。
「おまえが正しくてフィロスが間違っている、という証拠もないぞ。フィロスだって昔、共和国に行ったことがあるんだからな」
思わぬ情報を得て、ニアナはネイシスを振り返る。彼は少し考えてから「ああ、あの時か」とうなずいた。
「確か二十五年前だな。国境のことでパルテニアの使節団が共和国に来たことがあった。もちろん騎士団長は別人だったが、従者か平騎士としてフィロス殿も同行していたんだろう。あの時の協定は共和国が主導して結んだようなものだったから、愛国心あふれる若い

騎士にとっては屈辱的な経験だったのかも知れないな」
「よく覚えてるわね」
ニアナはうっかり皮肉り、おっと、と口を押さえた。まるで見てきたようじゃないの、と言いそうになったのだ。むろんネイシスとて、その当時は生まれていないか、ほんの赤ん坊だったろう。竜と竜侯、という偽りの身分を意識して、直接見聞きしたような言い方をしたのに違いない。
（いくらなんでも、この外見で四十歳だとか、ないでしょうし）
ニアナのそんな考えが伝わったらしく、ネイシスは片眉をちょっと上げる。二人の無言のやりとりに何を見たのか、エディクスが寂しそうに微笑んだ。
「事情がどうあれ、私はただ、昨日と同じように王宮内をご案内するだけです。それとも、もう必要ありませんか？」
「まさか」
ニアナは即答し、エディクスに向き直った。
「事情がどうあれ、ええ、その通りです。私達の処遇がどうなるにしても、今現在の立場は共和国の文化委員。陛下にも、調査を続けることは伝えてありますから……よろしくお願いします」
「分かりました。では、こちらへ」

（2）

エディクスが先に立って、館の中を歩き出す。どうやら今日は、庭園ではなく内部を見せてくれるらしい。案の定、向かった先は国王一家の生活空間だった。ネイシスが初日に執事の案内で回ったのは、応接室や食堂など公の用向きに使われる部屋ばかりで、私室は流石に見ていない。

「家族に確認したところ、皆、鑑定の必要があるものはこちらで用意する、との返事でした。また明日からでも、居間かどこかにあれこれ並べてお話を伺うと思います。私の方は……部屋も見て頂きたいので」

どうぞ、とエディクスは扉を開けて二人を通し、ティリウスも招き入れる。ニアナは一歩入って、思わず息を飲んだ。

窓からの光が当たる壁に、見事な絵が描かれていたのだ。光源が少なく薄暗い部屋でもよく見えるよう鮮やかな色使いであるが、内容や構成は実に優しく柔らかい。

豊かな実りと満開の花々に囲まれているのは、大地の女神ネーナだ。その膝元に遊ぶ数人の幼子は、いかにも幸福そのもの。

「これは……ご自身で？」

直感のまま、ニアナはつぶやく。エディクスがぱっと赤くなった。

「一目で分かってしまうなんて、そんなに素人くさいですか」

「ああ、いえ」慌ててニアナは首を振った。「ただなんとなく、この絵があまりにも殿下らしい雰囲気だったものですから」

ね、と同意を求めてネイシスを振り返る。と、視線の先にはティリウスがいた。怒ったような、恥じ入るような、複雑な顔で壁を睨んで、庶子の少年はつぶやいた。

「エディは優しいから」

優しくて善良で、心のきれいなエディクス。だからこんなに、美しい絵を描けるのだ。現実からかけ離れた、理想の母子の姿を。

――そう言いたいのだと、ニアナにも漠然と分かった。
兄弟の間では、それが実際に言葉にされたこともあったのだろう。エディクスは弟に微苦笑を見せてから、ニアナとネイシスに向かって言った。
「これが私の理想であり、夢なんです。平穏で、子供たちが飢えることなく、愛されて育つ……パルテニアがそんな国であって欲しい、と」
穏やかで控え目ながらも、エディクスの声には強さが潜んでいた。いまだ発揮されたことはなく、土に埋もれたまま芽の出ていない種にすぎないが、しかし根だけは既にしっかりと張っているであろう強さ。
ニアナは彼の言葉が己の奥深いところに響くのを感じた。昨日、予期せず心を穿たれた、まさに同じ場所に。だが今度は衝撃を受けるより早く、咄嗟にひび割れをふさぐことが出来た。
（ご立派ですこと、王子様。だけどあなたが一体何を知ってるって言うの？）
漏れ出た暗いささやきを踏みつけ、王女の意識の下へ、さらに下へと沈ませる。そうしながら、彼女はにっこり微笑んでいた。
「ええ、私も同じことを願っています。人々が皆、この絵のように、穏やかに満ち足りて暮らせるように、と。ですから安心なさって下さい。決して、いたずらにこの国の政情を乱しはしませんから」
隠したつもりの棘が、どうやら少し出てしまったらしい。エディクスはまた顔を赤らめて、恥ずかしそうに目を伏せた。遠回しに牽制したつもりが、言われるまでもない、と直球を返されたのだから無理もない。
少し露骨過ぎたか。ニアナは反省しながら、ここにいるのはほんの子供なのだと考え直した。パルテニア建国の時代から生きている自分よりも、ずっと若くて世間知らずの、遠い親戚の子供。
「……良い絵ですね」
自然と、壁画を見るまなざしも優しくなる。その一言に救われた

ように、エディクスはいそいそと部屋の隅から燭台を取ってきた。
「拙い絵でお目汚しをしました。これが、先日言っていた燭台です。ご覧下さい」
どうぞ、と卓上に置かれたものに、ネイシスが近寄り、しげしげと観察する。ニアナも横から鑑賞した。恐らく銀製だろう。果樹の姿を模したもので、蝋燭は一本だけ立てられるようになっている。大きくはないが繊細かつ見事な細工で、所々わずかに黒ずんでいるが、ほかはよく手入れされていた。
「失礼」
ネイシスは一言断ってからそれを手に取り、細部を検める。その目が束の間、どこか遠くを見るように変わったが、気付いたのはニアナだけだった。ネイシスは燭台を戻すと、いつもと同じ、淡々とした態度で告げた。
「間違いなく帝国時代のものです。どこから流れてきたのか分かりませんが、これと同じものが、かつて皇帝の部屋に置かれていました。対になっていた筈ですが……」
「残念ながら、我が家にあるのはこれだけです」
「ばらばらにして売られてしまったようですね」
ふむ、とネイシスは考え込んだ。ニアナはその横顔を眺め、またしても不思議な気分になる。
皇帝の部屋にあった？　どこでそれを見たというのだ。
が、それを問うては竜侯の偽装がはがれてしまう。仕方なく、疑問を飲み込んで沈黙した。
そんな彼女の内心には気付かぬ様子で、ネイシスは事務的な口調のままエディクスに言った。
「失礼ながら、殿下、この品は相当値が張った筈です。売買の記録が残っているなら、一度確認された方が良いかと」
「……つまり？」
エディクスは不審げに眉を寄せる。ネイシス窓や扉の外にさっと視線を走らせてから、ぐっと声を低くしてささやいた。

「これは真実名品ですが、であればこそ、売り手はいくらでも値を吊り上げたがる。本来妥当な値段を大きく上回る価格をつけられた可能性があります」
「ネイシス殿……ご心配はありがたいのですが、出入りの美術商は皆、信用の置ける者ばかりですよ。騎士団が調べているのですから」
「その騎士団が、美術品購入の名目で公金を横領しているとしたら？」
「――！」
エディクスが息を飲み、ティリウスが不機嫌に唸った。
「政情を乱さない、と言ったばかりじゃないか。フィロスを告発して王宮を分裂させるつもりか？」
「既に分裂しているのです」
ネイシスは振り返り、端的に応じる。ティリウスがますます剣呑な顔になったので、ニアナは急いで助け舟を出した。
「何の根拠もなく猜疑を煽っているのではありませんよ、殿下。残念なことですが……騎士団長が横領したお金で武器を購っていることが分かりました。恐らく、国庫の鍵を握っているカティア様も協力しているでしょう」
「母上が？」
エディクスが喘ぐように言い、首を振る。その態度は明らかに、予想外のことを聞かされたがゆえの驚倒ではなく、悪い予感が的中したゆえの動揺だった。ニアナとネイシスはしばし口をつぐみ、二人の王子が落ち着くのを待った。
エディクスはふらつき、よろめきながら長椅子に座り込む。ティリウスは唇を噛んでうつむき、室内を数往復してから、忌々しげに女神の描かれた壁を殴りつけた。

（3）

長い沈黙の末に、エディクスがようやっと小声でつぶやいた。
「母上が父上を憎んでいるのは……知っていましたが。それほどとは……」
首を振り、ため息をつく。だが顔を上げた時、そこに嘆きの色はなかった。
「ネイシス殿、一体どうやって横領の証拠を掴んだのです？　美術商を捕らえでもしたのですか」
「そうではありません」
ひとまずネイシスは否定し、それから少し黙考した。ややあって彼は、琥珀色の目をひたとエディクスに当て、静かに言った。
「竜の目は人の心を見抜く。ご存じありませんでしたか」
「えっ……」
途端にエディクスは身構えた。やましいところがなくとも、心を見抜く、などと言われたら逃げ隠れしたくなるのが人情だ。彼は目を見開いてネイシスを凝視し、次いでサッと顔を背けた。
「それは、……竜と竜侯には嘘が通じない、とは、聞いたことがありますが」
「正確ではありませんが、騙されにくいのは事実です。我々竜の目には、人が心に抱く強い思いが映るので、騙す気満々の相手など滑稽にさえ見えますよ」
ネイシスはあくまで淡々と、超越した存在らしい口調を保っている。観客になっているしかないニアナは、驚きを顔に出さぬよう、ぎりぎりの努力を強いられた。
（それって、宿屋から見てた奴に気付いたように、ってこと？　あなた一体何なの、竜じゃないって言ったくせに！　それとも、精霊の加護は竜の力と似ているってことなの？　ああっ、まさか全部でっちあげの大嘘ってことはないでしょうね！　勘弁してよ！）

彼女が頭を抱えたいのを我慢している間も、話は続いていた。
「すなわち、分かるのは嘘だけに限らない、ということです。あまりにも重要な何かを隠そうとすればするほど、人の心はそれを強く意識する。私にはそれが見えるのです、殿下。城壁際にある騎士団の倉庫……、収められているのは槍や鎧だけではありませんね。弩があるはずです」
「いしゆみ？」
横からティリウスが、顔をしかめて聞き返した。エディクスも初耳らしく、困惑したまま、ただじっとネイシスを見つめる。ニアナは二人の為に、端的に説明してやった。
「竜を射落とす大型の弓ですよ、両殿下。かつて帝国の将軍がそれを用い、東部の竜侯を退けたという話が残っています」
エディクスとティリウスも、共にぎょっとなった。顔を見合わせ、まさか、と言うように、それぞれ複雑な表情になる。二人が納得するのを待たず、ネイシスは平静な口調で続けた。
「単なる武装強化なら、穏健な政策を進める議会に反発してのことだとも取れますが、弩となれば話はまったく別です。竜と戦う気がない限り、あんなものを用意する理由がありません。騎士団長は本気で共和国に戦を仕掛けるつもりでしょう。……お二人は、戦をお望みですか」
「とんでもない！」
エディクスが反射的に否定し、ティリウスも一呼吸の後、悔しそうに首を振った。
それきりしばし、沈黙が続く。今度の無言は気を静めるためではなく、何をなすべきか考えるための時間だった。ややあってエディクスが、痛苦に耐える声音で言った。
「国庫の出納記録を……調べましょう。母上に悟られないように、密かに。幸い、父も母も騎士団長も、私のことは放任しています。帳簿をめくっている所を見付かったとしても、庭に植える花の代金を気にしている程度に思われるでしょう」

語尾に気弱な自嘲を漂わせ、彼は肩を竦める。だが表情は硬い。生まれて初めて、重大で危険な仕事に乗り出そうとしているのだ。ティリウスも手伝うつもりらしく、決意の表情で深くうなずく。ニアナは水を差さない程度に忠告を与えた。
「くれぐれも、慎重に行動なさいませ。この王宮内では、シグルス殿下なら味方になって下さるでしょうが、ほかは決して信用なさいませんように」
「言われるまでもない」
ティリウスがつっけんどんに言い返す。ニアナは口元をほころばせると、自然に手を伸ばして彼の前髪をかきあげ、額に軽く口付けを落とした。
何をされたのか、ティリウスは理解できなかったらしい。一呼吸の間、目を丸くして放心し、次いで見る見る赤くなった。
「何をする、無礼者！！」
幼児のように扱われたと気付き、怒りと羞恥から拳を振り上げる。ニアナはてのひらでそれを受け止め、鷹揚に微笑んだ。
「天神ディアのご加護がありますように」
彼女の穏やかな言葉で、ティリウスもはたと我に返って拳を下ろした。相手は天竜侯で、彼の曾祖父の娘なのだ。子供、あるいはいっそ犬猫扱いされたとしても、やむを得ない。むっつり不機嫌な顔のまま、彼は額をごしごしこすって、兄に八つ当たりした。
「エディもして貰ったら？」
「なっ、ば、馬鹿！　それこそ、ニアナ殿に、しつ、失礼じゃないか！」
途端にエディクスは真っ赤になってうろたえる。ティリウスは自分が優位に立てる相手だからと、容赦なく突っ込んだ。
「何が失礼なんだよ。竜侯様にご加護をお願いするだけだろ。それともエディは、何かやましいことを考えてるわけ？」
「ち、違うっ！　からかうんじゃない！」
エディクスの方が随分年長であるのに、こうした方面ではまった

く立場が弱いらしい。
　ニアナは同情的な目をしつつも、いくらか心理的な距離を確保したまま、さりげなく話題を変えた。
「さて、と。ネイシス先生、この燭台は詳しく記録する必要がありませんか？」
　おどけてことさら助手らしく振舞ったニアナに、ネイシスは眉をひそめる。が、彼はやれやれと肩を竦めただけで、余計な事は言わなかった。
「そうだな。殿下、ほんのしばらくですが、お借りしても構いませんか。部屋で意匠を写して、重さや大きさなど、調べて記録したいのですが。夕方までにはお返しします」
　ここに居座って道具を広げるわけにはいかないでしょう、と言い添えたのは、単なる遠慮ではなかった。兄弟二人だけで、先ほどの件について相談するよう、言外に促したのだ。エディクスはそれを察し、もちろんです、と応じて燭台を渡した。
　布にくるんだ燭台を受け取って部屋を出ると、じきにネイシスがぼそりとつぶやいた。
「君は子供には優しいんだな」
「あら、何かしら、色々と含みのありそうなお言葉ですこと」
　ニアナはとぼけて、明後日の方を向く。それから、手の中の重みを思い出して顔をしかめた。
「そんなことより、これが皇帝の部屋にあったなんて、はったりも行き過ぎじゃないの？　あなたが天竜だとしたって、見たわけないでしょ」
「確かに、自分で見たわけじゃない。だがそれは事実、皇帝の所持品だった。保証する」
「保証って……まあ、いいけど」
　釈然とせず、ニアナは曖昧に唸って、布の隙間を覗く。銀のきらめきが、思考にも光を投げかけてくれた。
（もしかして、彼が時々上の空になってるのは、精霊さんとお話し

てるからだとか？　共和国ともすぐ連絡がつくとか言ってたし……これが皇帝のものだってことも、精霊さんが教えてくれたんじゃないかしら。そうでもなきゃ、説明がつかないわ）

と、そこまで考えてもうひとつの疑問を思い出した。ぐっと声を潜め、ネイシスにぴたりと寄り添ってささやく。

「それじゃ、竜の目がどうとかって言ったのは何？　あれもはったりなの？　人の考えてることが見えるとか言ってたけど、街で人の視線に気付いたようなことよね。それも精霊さんのおかげなの？」

「……生まれつきだと言っただろう。今は訊かないでくれ、いずれ説明する」

ネイシスも微かなささやきで答えた。王宮内では、どこで誰が聞いているか分からない。ニアナは口を尖らせて不満顔をしたものの、一旦は追及を諦めた。

（人が心に抱く強い想いが見える、か……。竜じゃないけど似たような力があって、普通に飲み食いするけど味は全然分からなくて。本当、変な人。いくら精霊の加護があるからって、元々ただの人間だったら、そこまでになる？　そもそも、本当に精霊さんなんだかどうだか）

ちらりと横のネイシスを見やり、ある可能性に思い当たって、ニアナは顔をしかめた。

「今、ちょっと嫌なこと考えついたんだけど。もしかして、最初からあたしの心も見えてるわけ？　あの“つながり”とは関係なく」

「いいや」

返事は短かった。ニアナはひとまずほっとしたものの、何か口にされなかった内容がありそうな気がして、じっとネイシスの横顔を睨みつける。ややあって彼は、根負けしたように白状した。

「君はとても、見えにくいんだ。大方の人間は単純な色しかまとっていないのに、君はあまりにも複雑で、本心からの声はひとつも聞こえない。だから、最初は驚いた」

「じゃあ、個性的だって言ったのは、見た目の話じゃなくて」

「私にとっては、それも『見た目』なんだが。まあ、そういうことだ」
「……」
ニアナは何がなし不愉快になって、沈黙した。心を見られていなかった、と安心して良いはずなのだが、なぜか逆に、よりあからさまに暴露されたような気がしたのだ。
常に何かを演じ、本心を決して外に出さないよう隠している、おまえは嘘つきだ――そう断じられたような。
むっつりと押し黙って歩く彼女の背中を、何を思ったのか、ネイシスがそっと軽く叩いた。

（4）

翌日になっても、ニアナ達は相変わらす客人待遇だった。
これまで同様、食事は部屋まで届けられ、自由を制限されるでもなく、召使が丁寧にあれこれの必要を満たしてくれる。
恐らく王宮の外ではゲニクス議長が調査と根回しに精を出しているのであろうが、一日で成果が出るものではない。当面ニアナ達に出来るのは、せいぜい文化委員らしく美術品の記録を作ることだけだ――偽竜侯のぼろが出ないよう気を付けながら。
エディクスは姿を見せなかったが、代わりに執事が来て、鑑定してもらいたい品物を揃えました、と告げた。案内された広い居間には、燭台や酒盃、香油瓶などの工芸品がずらりと並べられていた。
ニアナはネイシスと一緒に、重さや大きさを測ったり、意匠を写したりと真面目に仕事をしたが、半日も経たずに音を上げた。普段あまり書き物をしない手はすぐに疲れてきたし、何より、ずっと黙っているのが耐えられなかったのだ。高価な美術品を一部屋に集めているため、しっかり騎士の見張りがついており、ニアナもネイシスも迂闊な発言が出来なかったのである。
「先生、ちょっと休憩して散歩に行きません？」
うんと伸びをして提案する。彼女の鬱積した不満を察したネイシスは、眉をちょっと上げたものの、「そうだな」とうなずいて手を休めた。
庭を歩いてくる、と騎士に告げ、二人はぶらぶら当てのない風情で外へ出て行く。近くに人がいなくなると、ニアナはやれやれと肩の力を抜いて、手近にあった彫刻の台座に寄りかかった。
「ぅあー、もう、死ぬかと思った。これ以上黙ってたら、窒息しちゃう」
「君はしゃべりながらでないと息が出来ないのか？」
「それ、皮肉のつもり？　まったくもう……。ねえ、相変わらずあ

たし達を文化委員扱いにしてるってことは、竜侯の王女様を受け入れたくないってことかしら。騎士団長はすっかり乗り気だったし、王宮内にも知れ渡っちゃってるみたいなのに」
「国王陛下が渋っているんだろうな。君を正式に王家の一員として迎え入れたら、国王の地位と権威が脅かされる。単なる手駒として利用するには、竜侯というのは扱いづらいんだろう。決断を遅らせてくれたら、それだけ時間が稼げるから助かるが」
ネイシスは端的に応じ、さり気ない動作でニアナの横に並んだ。そして、唐突な事をつぶやく。
「フェリニアナ、というのは本名なんだな」
「呼ばないでよ。その名前、嫌いなの。いかにも、女の子らしく優しく麗しく、って親の願望そのまんまなんだもの」
ニアナは顔をしかめた。河川の女神フェリニムはたおやかな美人だとされているので、あやかって名付けられる女児は多い。だが自分の生まれ育った家を思い出すと、馬鹿馬鹿しくて笑えるほど分不相応な名前だ。
さして豊かでもない漁村の中で、彼女の家はとりわけ貧しかった。父親は一応は漁師だったが、ろくに船を出さず、ほとんどの時を飲んだくれて過ごしていた。その口から、愚痴と憤懣と怒鳴り声以外が出てきたことなど、あっただろうか。フェリニアナ、などと呼ばれた記憶はないし、今、そう呼ばれる事を想像すると怖気がする。
母親は細々した内職をして家計を支えていたが、常に疲れ、苛々して、ため息をついてばかりいた。ちょっとした事で頬や尻をぶたれ、腕をつねられた。
（所詮、あたしを売った奴らじゃないの）
ニアナは頭を振って、古い記憶を追い払おうとした。
怖気がする、憎しみさえ感じる。だのに、それでも、思い出すと胸が痛んだ。どんなに否定したくても、あの家が故郷だし、あの二人が親なのだ。ほんの数回、優しくされたり笑いかけられたりした記憶が、棘のように刺さって取れない。

ニアナが無意識にむっつり押し黙っていると、古傷を覆うように、胸の奥で柔らかい光が手を広げた。同時にネイシスが、静かに口を開く。
「以前、君に断られた件だが。今度は受けてもらえないか」
「……何のこと？」
唐突な話について行けず、ニアナは瞬きして聞き返した。穏やかな光がゆっくり心に沁みて来るのが感じられ、ますます当惑する。こんな優しさを与えられる理由など、何も思い当たらない。憐れみでも同情でもない、ただ純粋な優しさなどを。
身じろぎも出来ずに固まっているニアナに、ネイシスは淡々といつもの口調で続けた。
「共和国で定職に就けるようにはからう、という話だ。恐らく今後、事態がどう転んだとしても、君はパルテニア国内には居辛くなるだろう。船を使えばパルテニアを通らずによそへ行くことも可能だが、共和国に定住するなら、その必要もない」
「……」
「どんな暮らしが望みか、考えておいて欲しい。君がいなければここに入り込むのも難しかっただろうし、騎士団長のたくらみを知る事さえ出来なかっただろう。だから、出来る限りの礼をしたい。仮に私一人の力では叶えられない望みであっても、大抵の事は議会が認めてくれるはずだ。役者を続けたいなら、ナナイスに行けば劇団がある。他の仕事が良ければそれでもいいし、家庭を持ちたいのなら……」
「やめて」
我知らずニアナは遮り、後ずさっていた。差し出されているものの大きさに気付いた途端に、怖くなったのだ。首を振り、二歩、三歩と離れる。
「そんな……そんなの、あたしは」
唇が震え、考えることも出来ずにただ言葉をこぼす。ネイシスが訝しげに眉をひそめたが、ニアナ本人も自分が分からなくなりかけ

ていた。
（嫌だ、怖い）
見たくない。どうして今になって――何が望みか、だなんて。
息を飲み、彼女はやおら身を翻して逃げ出した。とにかく今すぐに、ネイシスを、胸奥の光を、振り払ってしまいたかった。
（捨ててきたのに）
苦い過去も、幼い憧れも、夢も希望も。月日と共に次から次へと、諦め、打ち捨て、顧みることなく置き去りにしてきた。何も手に入らないのが当たり前、人生とはそんなものだ。そう自分に言い聞かせて、いつも“誰か”を演じることで、捨てたものが見えないようにしてきたのに。
（差し出さないで）
落としてしまう。もう、この手には受け取る力がないのだから。
落として、また壊してしまう――
「危ない！」
鋭い叫びが耳をつんざき、ニアナはがくんと前のめりになった。息を切らせて我に返ると、片腕をしっかりと誰かに掴まれていた。目の前には、材木と切り石がごろごろ転がっている。未完成部分の為の、資材置き場のようだ。
「あ……？」
瞬きすると、涙が頬を伝った。それを指で拭いながら、ニアナは恐る恐る振り返る。見知らぬ若い騎士が、心配と困惑の入り混じる顔で、彼女を見つめていた。
「お怪我はありませんか」
戸惑い気味に問いかけられ、ニアナはともかくうなずいた。必死になって感情を抑え、小さく畳んでぎゅうぎゅうに押し潰して、頑丈な箱に詰め込んで閂と鍵をかける。代わりに、少し破けてしまった王女の衣を引っ張り出して、苦労しながら身にまとった。
「ありがとう、大丈夫です。……ごめんなさい、見苦しいところを」
ニアナが痛ましい微笑を浮かべると、騎士はどぎまぎして手を離

した。
「いえ、そんな……、あの、何かあったのですか？」
「何でもありません。少し……昔の悲しい出来事を、思い出してしまって」
言いながら、最後の涙を拭う。王女の衣が身になじむと、危険なものをしまいこんだ箱も、どこかに消えてくれた。ほっ、と息をついて顔を上げる。
「驚かせてしまいましたね。もう大丈夫です。……本当に、ありがとう」
深い悲しみを堪える気丈な声と笑みに、騎士は感銘を受けたようだった。畏まり、無意識のように姿勢を正す。王女で竜侯だと信じきっているのだろう。
ニアナは小さくうなずいて騎士の敬意を受け止め、おもむろに周囲を見回した。
「ああ……こんな所まで来てしまったのですね。もしかして、立ち入ってはいけない場所だったかしら」
資材置き場の向こうには、足場が組まれたままの石壁があった。見上げると、それが例の“貴人専用の牢獄”だと分かる。もしかしても何も、こうして騎士が見張り番をしているのだから、立ち入り禁止に決まっているだろう。だが騎士は歯切れ悪く曖昧な返事をした。
「高貴の方がおいでになる場所ではありませんよ。見ての通り外側は大体出来ていますが、まだあちこち仕上がっておらず工事中ですので、あまり近付かれると危険です」
はっきり禁止だと答えると、王女様に失礼だとでも思っているらしい。だが早く立ち去って貰いたがっている証拠に、彼は周囲を見回してから忙しなく言った。
「お部屋まで、お送りしましょう」
おやおや。ニアナは内心握り拳を作った。どうやら当たりくじを引いたようだ。

もちろん、顔にはそんな気配など微塵も出さない。優雅にほんの少し首を傾げ、おどけた気配をまじえて苦笑する。
「ありがとう。でも、持ち場を離れてはいけないでしょう？」
「いいえ、そのようなお気遣いは」
騎士が赤面してしどろもどろになった直後、塔の内部からくぐもった悲鳴が聞こえた。騎士がさっと顔色を変え、ニアナも驚いて見せる。
「何かしら。誰か怪我をしたのではなくて？　早く行ってあげて」
あくまで何の疑いも下心も持たない、純粋善良な王女様らしく思いやる。騎士はどうしたものかと躊躇し、その場で数回足踏みした。ニアナはきっと厳しい顔を作り、重ねて命じた。
「行きなさい。あなたは騎士でしょう。私の心配は無用です、一人で戻れますから」
「……はっ」
騎士は一礼すると、散在する資材を器用に避けながら、塔へと走り去った。ニアナはじっとその場に留まり、騎士の背中を見送る。
ややあって、予想通り背後から足音が近付いてきた。ネイシスだ。ニアナは慎重に振り返り、人差し指を唇に当てて見せた。それだけで彼はおよそ察したらしく、表情から気遣いの色を消して塔を見上げた。
ニアナはゆっくり静かにその傍らへ近付き、目つきだけで問いかける。ネイシスは眉間に険しい皺を刻み、ため息ひとつの後、手を差し出して「戻ろう」と促した。ニアナは逆らわず、彼の手を取って一緒に歩き出す。塔を振り返って見ることはしなかった。
塔から充分離れて中庭に出ると、ニアナは改めてその位置を確認した。右手に塔、正面には最初に割り当てられた客室のある棟、そして左手には騎士団詰所と、王宮外へ出る通用門。
ニアナの考えたことが分かったらしく、ネイシスも口元に手を当てて考えながら、つぶやいた。
「前の客室だと、騎士団詰所で何か騒ぎがあった場合には聞こえた

かも知れないな。それに、誰かを塔へ連れて行くところが見えたかも知れない。だから移らせたんだろう――他にも理由があるかも知れないが」
「やっぱり、塔に誰か捕まってるみたいだった？　壁越しだったけど……」
「君に話しかけている騎士が何を懸念しているか、わずかながら見えた。それがなくとも、近くであれだけ必死に叫ばれたら、目を瞑っていても“見える”」
ネイシスは苦々しく唸った。珍しく、露骨な感情が顔にあらわれている。
「……酷かったの？」
ニアナがささやくと、ネイシスは沈鬱にうなずいた。
「宿屋のあの男だろうと思う。拷問されているようだった。ほかにも数人、弱った気配が見えた」
「弩を作るのに使えそうな人材、ってことね。あるいは、共和国の情報を知っていそうな旅人とか」
確かめるように口に出し、ニアナはぶるっと震えた。ネイシスと出会わなければ、一人旅の自分も同じ目に遭っていたかも知れない。お駄賃をちょろまかすぐらいのことでも、騎士団に目をつけられたら投獄の理由になる。
我が身を抱いたニアナの横で、ネイシスが決意を込めて言った。
「ゲニクス殿の手筈が整ったら、詰所や武器庫を押さえるだけでなく、塔の虜囚も解放しなければ。口封じに殺される前に」
横顔は厳しく、手は無意識のように剣の柄に置かれている。どうやら、それは自分の仕事だと考えているらしい。ニアナは深く考えもせず、口をつくまま申し出た。
「あたしも手伝うわ」
「……」
言った直後にしまったと思ったが、案の定、ネイシスは非常に嫌そうな顔をしてニアナを見つめてくれた。正気を疑う、どころか、

ここにいるのは果たして案山子か猿かと訝るような目で。
「そこまで酷い顔しなくてもいいじゃないの」
「君はお荷物に徹するんじゃなかったのか、足手まといのお姫様」
「それは前の話でしょ！？」
うっかり大声になりかけ、慌ててニアナはそれを飲み込んだ。ひそひそ声で、ちくちくねちねち攻撃を続ける。
「本当に、余計な事はしっかり覚えてるんだから！　嫌な奴！　あのねぇ、議長さんがどの程度の人数を動かせるか知らないし、塔の見張りが何人いるかも知らないけど、あなた一人じゃ無理に決まってるでしょ？　捕まってる人が自力で歩けるのか、担架がいるのかも分からないんじゃ、扉を蹴破って騎士を倒しても、そこでお手上げになるかも知れないじゃないの。何もあたしまで剣を振り回して暴れるつもりじゃないわよ」
「しかし」
「前に言ったでしょ。あたしは、自分の行動に不相応な幸運は信じないの。何でも望みを叶える、なんて馬鹿げた破格の報酬を、こそこそ逃げ隠れしただけで手に入れるなんて、冗談じゃないわ」
「……何でも、とは言ってないぞ」
「うるさいわね、似たようなもんでしょうが。そりゃね、確かにあたしには、精霊の加護もなければ共和国の後ろ盾もない。お金もないし、一撃必殺の踵落としが出来るわけでもない。けどね、意地ぐらいはあるのよ。手伝おうかって言ったのも、竜侯なんてものを持ち出したのも、あたしが自分で決めたことなんだから、後始末だけ他人に押し付けて逃げるような格好悪い真似、出来るもんですか」
勢いが言わせた台詞かもしれない、偽りであっても王女で竜侯だという自負に酔ったのかもしれない。それでもニアナは、後に退くつもりはなかった。
無自覚にではあったが、理解していたのだ。ここで退けば――芝居の途中で舞台を降りれば、自分はただの役立たずだ、と。王女や竜侯どころか、役者ですらもいられない。無力で哀れな、売り飛ば

された子供に戻ってしまう。それぐらいなら、無謀でも何でも前へ進み続ける方がましだ。
　決然と睨みつける彼女の前で、ネイシスはしばし、額に手を当ててうつむいた。頭痛を堪えているのか、あるいは声を出さずに精霊と相談でもしているのか。結局彼は、大きなため息をひとつついて降参した。
「分かった。最後まで手伝って貰う。だが無茶はしないでくれ」
「当たり前よ。キツイところは全部あなたに任せるつもりだから、安心して」
　しれっと応じたニアナに、ネイシスはもはや返す言葉もなく、琥珀色の目で彼方の空を見やったのだった。

八章　幕が下りても気は抜くな

（1）

緊張をはらんだ静けさのうちに、一日、二日と過ぎてゆく。とは言え水面下では、誰もが無為に見せかけつつ慌しく活動していた。

ゲニクスは議員仲間と密会し、彼らの命を受けた者が鍛冶屋や木工職人のもとへ走った。王宮では何人かの騎士がシグルスの部屋を訪ね、その従者が私用で街へ出ることが増えた。エディクスとティリウスは暇さえあれば一緒にこそこそうろつき回り、フィロス騎士団長はなんとか国王を説得しようと、王妃と二人がかりであの手この手を尽くし。

その間ニアナとネイシスは、文化委員の仕事にいそしむ一方、塔を襲撃する段取りについて打ち合わせを重ねた。とは言え、何しろ二人しかいない上に下調べも出来ないのだから、決めておける事は限られていたが。

「議長が動いた時には、敵となる騎士のうち詰所周辺で捕らわれなかった者は、フィロス殿の下に集まろうとするだろう。塔に回る人数は多くない筈だ」

「騎士の相手は全部お願いしとくわ。そりゃ、いざとなったらあたしもナイフを使うけど、まともに正面からやり合って本職の騎士に勝てる腕前じゃないから。まずあなたが踏み込んで暴れてる間、あたしは外で見張ってた方がいいかしらね」

「そうしてくれ。内部を片付けるだけなら私一人で問題ないが、増援が来て閉じ込められたら厄介だ」

「いつ行動を起こすか、議長さんはあたし達にも知らせてくれるわよね？」

ふと不安になってニアナは確かめた。王宮に滞在してもう七日目だが、議員らが訪れるのは公の用向きだけで、客室の近くまでは決

して入って来ない。もちろん、その連れている従者もだ。もしゲニクスが何かを知らせたいと思っても、先日のようにたまたま二人が外に出ない限り、手紙を託すことさえ難しいだろう。
と思ったのだが、ネイシスはあっさり「ああ」とうなずいた。
「昨夜こっそり抜け出して、議長の屋敷に行って来た。あちらの段取りは順調のようだ」
「はァ！？　ちょっ、抜け出し……、って、いつの間に！」
同じ部屋で寝ていたのに、全く気付かなかった。ニアナが呆れると、ネイシスは小さく肩を竦めた。
「君に気付かれるようではおしまいだ」
「……いちいちムカつくわね。そりゃ、夜中にこっそり泥棒の真似の出来る人が、あたしみたいに善良素朴な一般人に見咎められるようなヘマするわけないですけど！」
「それは厭味か？」
「いーえ、事実ですわよ先生。お好きでしょ」
べえっと舌を出してから、ニアナは頭を振って脱線した話を元に戻した。
「とにかく、知らせがあるなら助かるわ。議長さんはシグルス殿下とお仲間の騎士を連れて、騎士団の詰所を包囲するのよね？」
「そうだ。武器庫の方は、味方の騎士が当直につくように細工すると言っていた。そんな騎士が何人いるのか、信用して良いのかは微妙なところだと思うんだが……近隣住人の協力は取り付けたらしい。あとは議員達の個人的な護衛士が荒事に当たる」
「なるほど」
ニアナは納得してうなずいた。
王都における武力集団が騎士団ひとつ限りであれば、いささか不穏なことにもなり得る。だが各議員がそれぞれ身を守るための護衛を引き連れていれば、国王と騎士団に睨まれる法案を提出しても、首の皮はつながるというわけだ。もっとも、フィロスが国王を上手く操縦して議会を形骸化させてからは、そんな心配はなかっただろ

うが。
「詰所と、武器庫と、……で、あたし達が塔へ行く、と。うん。そう言えば、共和国からの助っ人はどうなってるの？　ゴタゴタが終わって安全になってから、外交の出来る人が後の処理をするっていう段取りなのかしら。権限がある人に来てもらうって話だったわよね？」
　思い出して問うたニアナに、ネイシスは一瞬なぜか怯み、いつも以上に素っ気なく答えた。
「大丈夫だ、間に合う」
「……精霊さん情報ってわけ？」
　ニアナは胡乱げに目を細めたが、ネイシスはそれを見もしないでうなずいた。
「ああ、精霊さん情報だ」
「開き直ったわね」
「でないと君の相手は務まらないさ」
「そういうの、相手してるとは言わないんじゃないの？」
「……」
　言い負かされてネイシスが黙る。ニアナは鼻を鳴らして椅子にふんぞり返った。
「精霊さんでも何でもいいけど、すったもんだしてる最中に来て怪我しないように伝えてあげてよね」
「その点は心配ない。状況は逐一知らせているし、自分の身は充分守れる人物だ」
「そうなの？　いいわねー、精霊さんって便利そう。あたしにも一人紹介してよ」
　ニアナはおどけつつ、ちくりと毒の棘で刺す。ネイシスは無言だった。ニアナも返事は期待していないので、ただ肩を竦める。もはや、彼を守護しているのが“精霊さん”だなどとは、微塵も信じていなかった。
　目に見えない何かと話し、人の心を見抜き、光を操って闇の獣を

退ける。
ただの人間が精霊に守られているだけで、それほどの力を持つとは到底考えられない。
（そりゃ、あたしが知ってるのは芝居の世界だけだけど）
精霊も、小人族も、闇の獣も、気高い竜たちも。すべて、現実に接したことはなく、“正しい記録”を読んだこともない。だが、芝居に出てくる精霊は儚い存在だ。人間の頼みに応じて、少し天気を変えたり、花を咲かせたりする程度。
（あなたは何もかも桁違いなのよ、ネイシス先生。自覚してる？）
そんなネイシスが竜ではないと言うのなら、残る可能性はひとつだ。
竜の命と力を分け与えられた、特別な人間――竜侯。
ニアナがこの結論に達したのはつい今朝のことだったが、思いついた瞬間、すべてがストンと腑に落ちた。
よりによってなぜ竜侯なんだ、と言った時の呆れ声。美術品を慈しむ理由を話した寂しげな横顔。一般に知られていない竜と竜侯について、やけに詳しく知っているのも。竜侯閣下ご本人の手でつるし上げられる、などと言ったのは、彼なりの諧謔（かいぎゃく）なのだろう。
（まったく、よくもこのあたしを騙してくれたものだわ。芝居なんてろくすっぽ出来そうにないくせに）
いささか恨みがましく相手を睨み、ニアナはふうっと息をついた。
「ひとつ確認させて。もしあなたがヘマやって、刺されたり斬られたりしても、あたしは助けに行かなくていいわね？」
「……ああ」
ネイシスは観念した様子でうなずいた。相変わらず、ニアナを見ようとしないままだったが。
「首を落とされたのでもない限り、慌てなくていい。君はまず自分の身の安全を確保してくれ」
「はいはい、しつこく言われなくても身の程ぐらいわきまえてるわよ。どうせあたしは何にも出来ない、ちっぽけで無力な虫けら風情

でございますから」
いーだ、と歯を剥いて自虐的な厭味を返す。相手が本物の竜侯だと悟ってしまった今では、気遣われるほど己が惨めに感じられた。はったりで繕った表面だけの、しかもそれさえ剥がれ落ちかけている、みすぼらしく滑稽な道化。本来の自分自身がどれほどつまらない存在か、否応なく思い知らされる。むろん、意地でも最後まで演じ通すつもりではあるが、落ち込むのはどうしようもない。
（馬鹿みたい。やめとけば良かった）
泣きたくなるのを堪えていると、胸の奥に光が灯った。自己憐憫に乱れていた心の水面が、ゆっくり落ち着いてゆく。同時にネイシスがそばまで来て、軽くぽんと頭に手を置いた。
「やめてよ。そうやって余裕を見せつけられると、余計に落ち込むから」
ぺし、と手を払う。だがネイシスは懲りずにまた、ぽんぽんと頭を撫でた。
「余裕なんかない。正直に言って、君と話す時はいつも緊張するんだ。反応が全く予想できないから、……傷付けたのなら、すまない」
ぎこちない謝罪を聞いて、ニアナは複雑な気分になった。次いで、自分も同じ事を言ったと思い出し、苦笑する。子供扱いするな、と怒るティリウスの声が脳裏をよぎった。
彼女が笑ったので、ネイシスは当惑顔をする。ニアナはいつもの不敵な表情を作って彼を見上げた。
「他人に言われると本当、むかつく台詞だわね。よく分かったわ」
「……？？」
「なんでもない。気にしないで、どうせあと数日のことなんだし」
ニアナは勢いをつけて立ち上がり、無意味に室内を歩き回った。
あと数日。そう、早ければ今日明日にも、決着がつく。そうしたら、もう文化委員のふりをしなくていいし、竜侯の前で竜侯を演じるなどという赤っ恥をさらさなくてもいい。
――どんな生活が望みか、考えておいてくれ――

ネイシスの言葉がこだましたが、ニアナは無意識に首を振ってそれを退けた。
（いらない。何もいらないわ）
すべてが終わったら、エディクスに謝って許しを乞うて、王宮の下働きにでも雇ってもらおう。芸人一座があるなら、紹介してもらうのも良い。とにかく、ネイシスや共和国の世話になるよりはましだ。もうこれ以上、関り合いになりたくない。
（そりゃまあ、少しぐらいなら、お駄賃を貰ってもいいかなとは思うけど。でも）
手に余る希望は要らない。身の丈に合わない報酬を、高望みしたりなんかしない。
今はもう、知っているから――自分には天翔る翼などないことを。両手を広げて飛び降りたら、そのまま地面にぶつかって死ぬ。あるいは死なないまでも、二度と立ち上がれない。
風に乗って舞い上がれるのは、芝居の中でだけだ。
ニアナは無意識に唇を強く噛みしめていた。胸の奥で心配そうに瞬く光を、強いて見えないところへ押しやりながら。

（2）

「晩餐会の打ち合わせ？」
朝食のパンで頬を膨らませたまま聞き返した国王に、王妃カティアは冷ややかな一瞥をくれ、素っ気なく「そうです」と応じた。
「昨日、父の使いが来ました。友人の息子が婚約したので、祝いの席を設けると。その段取りについて私の意見も聞きたいというので、この後、出て参ります」
「ふむ、そうか。しかしおまえの意見だと？　妙な話だな」
むぐむぐ唸った国王に、カティアは何も答えない。言うべき事は言った、あとは用もないのにしゃべりたくない、とばかり、黙りこくって朝食を片付ける。同席していたエディクスは、ティリウスと素早く視線を交わした。
だが概ねそれは、いつもの朝食の光景だった。連絡事項を一方的に告げるだけの王妃、黙って興味なさげに食事を取るシグルスとヴィーナ、何かとティリウスを気遣うエディクス。そして、彼らの態度も機嫌も気にかけず、一人自分のことだけしゃべり続ける国王。
昨日までとなんら変わらぬ食事が済むと、エディクスはティリウスと一旦別れ、自分の部屋に戻った。その上で、召使に適当な用事を言いつけて遠ざける。隙を窺ってこっそり部屋を抜け出した彼は、そのまま客室へ向かった。
「ニアナ殿、ネイシス殿」
小声で呼びかけながら室内に入り、二人が既に準備を始めていることに驚く。ネイシスは剣の留め具を確認しており、ニアナは机上にあれこれ並べていた。彼女の仕込みナイフと、小型のノミ、ヤスリの類。本来ネイシスの仕事道具で、こびりついた汚泥などを落とす為の物だ。
エディクスはなにやら思案げな目でそれらを瞥見してから、ネイシスに歩み寄った。

「お二人とも、既にご存じでしたか。母上は今日、議長に呼ばれて屋敷に向かうそうです」
「そのようですね」ネイシスがうなずき、剣をきちんと佩く。「王妃の輿が向こうに着いたら、ゲニクス殿が彼女の身柄を確保し、同時に伝令を出します。それを受けて、シグルス殿下が味方の騎士に召集をかけ、詰所を包囲してフィロス殿を拘束する。……エディクス殿下、王妃の部屋に忍び込まれるのなら、くれぐれもご用心を」
最後の一言は、ひときわ小さな声でささやかれた。エディクスが緊張に顔をこわばらせる。ニアナは厳選した道具を携帯用の布にくるりと巻いて紐を結び、二人に向き直った。
「何も今、行かなくても良いんじゃありません？」
どうせじきに全て終わるのだから、急いで家探しせずとも良いだろうに。カティアとフィロスを取り押さえてから、じっくり部屋を隅々まで調べたら、証拠が見付かるはずだ。敵味方が入り乱れている最中に王妃の部屋にいるところを見付かったら、王子であっても何をされるか分からない。
ニアナはそう案じたのだが、エディクスは首を振った。
「いいえ、今だから行かなければ。どさくさ紛れに母の侍女か誰かが、証拠を持ち出すか焼き捨ててしまうかもしれません。今日まであちこち探しましたが、帳簿どころか証文や伝票一枚、見付かりませんでした。あとはもう母上の部屋だけです。ベッドの下なのか、抽斗の二重底だか、そこまでは分かりませんが」
「見付けたら、速やかに安全な場所へ避難して下さい」
ネイシスは気をつけろとも無理するなとも言わず、端的に指示を出す。エディクスはぎこちなく微笑んだ。
「そのつもりです。……お二人も、どうかお気をつけて。私の祈りなど必要ないでしょうが、それでも……幸運を祈ります」
「殿下にも」
ニアナが短く答えて一礼すると、エディクスはうなずきを返し、そそくさと姿を消した。

その足音が聞こえなくなってから、さて、とニアナは両手を腰に当てた。
「あたし達も、そろそろ出かけますか」
「そうだな。庭の美術品をもう一度確認しながら、時機を待とう」
「……ふりじゃなくて、本当にするの？　一から全部？」
思わずニアナは嫌そうな顔をする。ネイシスはもちろん、取り合わなかった。
「どうせ同じ時間があるのなら、有効に使いたい」
「はぁ～い、せんせぇ～」
「緊張感がないな」
「こんな時にまでお仕事しようって方が、緊張感ないと思うんだけど」
ぶつくさ文句を言いつつも、おかげで肩から余計な力が抜けたようだ。ニアナは軽くため息をついてから、いつもの仕事道具を揃えて、ネイシスと共に庭に出て行った。
「うっ、暑い……」
真夏の日差しが照りつける。ニアナは目蔭を差してうめき、涼しい顔のネイシスを恨めしげに睨んだ。思えば、この青年が汗をかいているところを見た覚えがない。もっと早く正体に気付いても良かったのに、とニアナは内心で自分の不注意に舌打ちした。
今日は一段と暑く、まだ日が真上に来てもいないのに、陽炎が立っている。エディクスと違ってネイシスは、日陰を選ぶという配慮をしてくれなかったので、ニアナは降り注ぐ陽光の下で水盤の実物と記録とを照合した後、がっしと相手の腕を掴んで止めた。
「ちょっと待ってくださいな先生。あたしを干物にするつもりでなきゃ、あっちの方から順に回って欲しいんですけど」
唸りつつ日陰を指したニアナに、ネイシスは初めて気付いたとばかり瞬きした。
「……ああ、すまなかった。そうだな、真っ直ぐ庭を突っ切るのも不自然だし」

謝罪に付け足されたつぶやきで、ニアナも彼の意図を察した。塔になるべく近付けるよう、最短距離で進もうとしたのだ。日向だろうと日陰だろうとお構いなく。今度はニアナの方が気後れした顔になった。

「あー、何を考えてたかは分かったけど……やっぱりちょっと、日向を真っ直ぐ、ってのはおかしいと思うわ。誰にも見られてなかったとしても、向こうに着くまでにあたしが干からびちゃう。それじゃ役に立たないでしょ」

「そうだな」

合意に達すると、二人は建物の影に入っている作品から順に回り始めた。

彫刻を二体、噴水一箇所。さて次は、という所で、ネイシスが眉を寄せて背後を振り返った。ニアナもつられてそちらを見やったが、広い庭園が続いているだけで、何も見当たらない。ただし、ずっと視線を先に延ばせば、騎士団の詰所と通用門がある筈だ。

「動いた？」

ニアナがささやくと、ネイシスは小さくうなずいた。記録用の紙を折り畳み、鞄にしまう。ニアナも手にしていた道具を横から一緒に突っ込んだ。そして、鞄はそのままそこに放置し、必要最小限の軽装で走り出す。

「こっちだ」

先導するネイシスは、時々わざと植え込みの陰や、建物の一部を突っ切って行く。ニアナは黙って従った。自分の感覚では、どこに人がいるのか、いないのか、とても分からない。

しばらくして、微かに背後から騒ぎが聞こえてきた。大勢の怒声や叫び、武器の重い金属音が。

（上手く不意を突けたんならいいけど）

ニアナはちらりと胸に浮かんだ不安を押し殺し、自分の役目に集中した。

同じ頃、フィロス騎士団長は詰所におらず、国王の部屋で話し込んでいた。内容はもちろん、竜侯である王女フェリニアナの処遇について、である。
「くどい！」国王はうんざりして声を荒らげた。「本当に王女だというなら、客人待遇で王宮に滞在させるのは構わん。だがあくまで客人だ！　今さらそんな昔の王女に出て来られたら、何もかも混乱してしまうではないか！」
「陛下、何度も申し上げている通り、王族としての権利を与える必要はないのです。ただ竜侯の力を我々の為に役立てさせれば、パルテニウス一門の威光はさらに増し……」
「団長！　フィロス殿！！」
突如、熱弁が騒々しい足音で遮られた。邪魔されたフィロスは険しい顔で振り返る。視線の先で、扉を蹴破らんばかりにして、騎士数人が飛び込んで来た。
「取り乱すな、馬鹿者！！」
フィロスが鋭く叱責し、騎士らは慌てて姿勢を正す。だがそれも一瞬だった。常の作法を無視し、彼らは騎士団長のそばへ駆けつけた。
「一大事です、詰所が包囲されました！　シグルス殿下が、参事会議員らと手を結び、騎士の半数近くを取り込んで……」
息を切らせながら、声をひそめて報告する。取り乱すなと言ったばかりのフィロスも平静を保てず、息を飲んで顔色を変えた。
「何事だ、フィロス！　そこでこそこそするな、報告せんか！！」
焦れた国王が椅子から身を乗り出し、子供のように肘掛を叩く。フィロスは彼に背を向けたまましばし黙考し、やがて沈痛な顔でおもむろに振り向いた。
「畏れながら、陛下、どうぞお心を静めてお聞き下さい。……シグルス殿下が、議員どもと結託して謀叛を起こしました」
「な……ん、だと？　何と言った、シグルスがどうしたと！？」
動転した国王は、無意味な反問を繰り返す。フィロスは厳しい声

音で続けた。
「謀叛です、陛下。騎士団の中にも、主君に背いた恥知らずがいる模様。このような事態を予見出来なかったとは、いかような批難叱責も免れません。しかしどうか今しばし、私に汚名を雪ぐ時間をお与え下さい。増長した愚か者どもには、陛下の御身に指一本触れさせません！」
「なっ！？　奴らは儂の命を狙っておるのかッ！　おのれ、身の程知らずどもが！！」
　国王は真っ赤になって喚き、やたらと肘掛を叩きつける。
「フィロス！　何をしておる、さっさと行け！　行って謀反人どもを粛清せよ！！」
「御意に。陛下はどうかここにお留まり下さい、この者らが扉を守ります。何人たりとも破らせはしませんので、ご安心を」
　フィロスは一礼し、報告に来た騎士らにそのまま王の守護を命じて、ひとまず退出し――かけて、ふと振り返った。
「畏れながら陛下、相手がシグルス殿下となれば、いかに逆賊と言えども、騎士たる我々が首を落とすわけには参りません。討伐の勅命を頂けますか」
　底冷えする声音だったが、取り乱した国王の頭には、その冷たさまでは伝わらなかった。
「ああ出してやる、だからさっさと片付けて来い！　儂に刃を向けたからには、もはや息子でもなんでもないわ！」
「ご心痛、お察し致します」
　フィロスは笑みを隠すために深く頭を下げ、今度こそ、踵を返して部屋を後にした。

（3）

容赦ない日差しの下を駆け抜け、ニアナとネイシスは塔を囲む木立の陰に身を潜めた。

そっと様子を窺うと、先日ニアナを止めたあの騎士が、槍を片手にゆっくりと塔の周囲を歩いていた。資材置き場も変化はなく、しばらく材木一本動かされた様子がない。大工や左官の姿もないのだから、工事などしていないのは明らかだ。

（さて、どうするつもりですかね先生）

心の中で問いかけつつ、ニアナはネイシスを振り返る。と、相手はじっと彼女を見つめていた。そして、無言のまま騎士を指差し、こちらに招き寄せるような手つきをする。ニアナは顔をしかめた。

「またアレをやれってんじゃないでしょうね」

ニアナが小声で唸ると、彼は呆れ顔をした。王女で竜侯のふりをしているくせに、娼婦はまずいだろう、そんな事も分からないのか――と、表情だけで語ってくれる。ニアナは思い切り相手の爪先を踏んづけたい衝動に駆られたが、なんとかこの場は堪えた。後で見てろ、と心に誓いつつ、ため息ひとつ。

心を静めてから彼女はそっと木陰を離れ、一歩、二歩、塔に近付いた。そして、

「きゃっ！」

大声ではなく、しかし騎士には聞こえる程度に、悲鳴を上げてすっ転ぶ。振り返った騎士に素早く手を振り、なんでもない、と言うように恥ずかしげな苦笑をして見せた。

計算通り、騎士は曲者めと怒鳴ることもせず、ただ訝しげに首を傾げながら、無用心にこちらへやって来た。ニアナは「ごめんなさい」と抑えた声で謝った。

「また、あなたの邪魔をしてしまいましたね。この前、誰かが怪我をしたようだったから、少し気になって来てみたのですけれど……

自分が転んでしまうなんて」
　恥ずかしいわ、と言いながらニアナは身を起こして座り込み、足をさする。親切な騎士は狙われていることにも気付かず、彼女の傍らにしゃがんだ。
「大丈夫ですか？　どちらの足です、見せて――」
　言いかけた言葉が途切れる。無防備な喉元に、今にも刺さりそうなほどぴたりと、ナイフが突きつけられていた。
「ごめんなさい、声を上げないで。あなたに尋ねたいことがあるの」
　ニアナは王女の衣をまとったまま、凄みのある笑みを浮かべた。騎士が目を見開き、身じろぎする。その手が槍を握り直したのに気付き、ニアナはナイフをほんのわずか、突き上げた。途端に騎士はぎくりと竦み、手を開く。槍が乾いた音を立てて倒れた。
「あなたは、この塔に誰がなぜ囚われているのか、すべてを知っていますか？　知っていてなお、騎士団長に協力しているのですか。それがパルテニアの為であると信じて？」
　問いかけに返事はない。騎士は硬直したままだ。ニアナは彼の目を見つめ、厳しく続けた。
「そうだと言うなら、心得違いも甚だしい。王都パルテノスは人を喰う魔窟だ、と恐れられても構わないのですか。あなたは私に親切にして下さった。その優しさが、ただの傲慢であったとは思いたくありません。パルテニアを破滅させようとしている騎士団長のたくらみを阻止したいなら、私達に協力して下さい。出来ないと言うのなら……残念ですが」
　ニアナは静かにささやき、冷ややかなまなざしで騎士の返事を待つ。長くはかからず、じきに彼は目の動きで肯定した。ニアナがナイフと喉の間に少しゆとりを持たせると、彼はほっと息をつき、改めてうなずいた。
「竜侯閣下がおっしゃるのなら、団長のやり方は間違っているのでしょう。実のところ、私もいささか……疑問を抱いてはおりました。しかし、何をなさるおつもりです？　まさか、塔を襲って捕虜を解

放しようとでも？」
　ひとまず味方になりそうな態度だが、ニアナは油断せず、じっと目を離さずにいた。代わりに、木陰に隠れていたネイシスが進み出て、「そうだ」と答える。
「塔に何人の騎士がいるか、教えて欲しい。あなたはどうやら、中での事に直接手を染めてはいないようだが」
　見透かされた騎士は、さっと顔を赤らめた。どうやら彼の若さからして、重要な部分には関れず見張りだけを命じられていたのだろう。それでも、中で何が行われているかに気付いてはいたわけだ。
「……尋問係が三人。それと、捕虜の世話をする下男が一人。捕虜は恐らく、四人か五人……いや、はっきりとは分かりません。私は彼らが連れて来られるのを、たまに見るだけで」
「生きて出て行った者はいない、ということですか」
　ニアナは冷ややかに確認した。騎士は言い訳のように首を振る。
「分かりません。私は見た事はありませんが、しかし協力者になれば解放するという話でした。ただ塔に閉じ込めておいても、パルテニアの益にはならないでしょう」
　多少強引であっても、有用な人材を確保するため――それが、彼の聞かされてきた建前だったのだろう。ニアナは肯定も否定もせず、ネイシスと目配せを交わしてから言った。
「じきに真実がはっきりするでしょう。あなたは出入り口を開けてください。怪しまれないよう、普段通りに。あとはネイシスが片付けます」
「誰も殺しはしない」ネイシスが言い添える。「だから、気を変えないでくれ」
「……分かりました」
　騎士は不安げにネイシスを一瞥したものの、逆らわずに立ち上がった。落とした槍を拾い、すっかりしょげた様子で先に立って歩いて行く。ニアナは少し気の毒になったが、彼が己の罪と向き合い、立ち直るまでの手伝いは出来ない。言われるがまま盲従してきた責

任は、本人が負うしかないのだ。
騎士は塔にたどり着くまでになんとか気を持ち直し、背筋を伸ばした。そして、何気ない態度を装って、扉を二回、拳で叩く。間を置いて一回、それからまた二回。中で誰かが動く物音がした。
ニアナは扉の陰になる位置に控えていたが、向かいに立っているネイシスが、仕草で指示を出すのに気付いた。
『目を瞑っていろ』
ニアナは一瞬、指示とは逆に目をみはり、慌ててぎゅっと瞼を閉じた。何をするつもりか、すぐに分かったのだ。
扉が何の警戒もなく開かれる。直後、
「うっ！？」
「わぁッ！！」
真っ白な閃光が弾け、騎士達は目を潰されて叫びを上げた。ニアナは扉の陰で目を瞑り、しかも両手で顔を覆ってうつむいてまでいたのに、瞼越しに感じた光の強さでくらくらして、すぐには目を開けられなかった。
身動きできずにいる間に、騒音が数回、塔の中から響く。
ドタン、ガシャン！　ガラガラバタバタ、ゴン！
さして長くもかからず物音はおさまり、何事もなかったかのように辺りは静まり返った。
恐る恐るニアナが目を開けて振り返ると、最初の騎士は戸口の外側で倒れていた。両腕で目と頭を庇い、叱られた子供のように体を丸めている。
気を失っているが、とりあえず死んではいないようだと見ると、ニアナは彼をそのままにして塔の中を覗きこんだ。
一階部分には窓がなく、吹き抜けの二階から差し込む光が白々と床を照らしていた。奥の壁に沿って、階上へ続く階段がついている。横手の一隅は鉄格子で仕切られており、中では幾つもの人影がうずくまっていた。鉄錆の臭いが鼻をつく。
中央付近の広い場所には、ひっくり返った机と椅子。そして、伸

びている騎士が一人、二人。
　ニアナは恐る恐る敷居をまたぎ、小声で呼びかけた。
「……ネイシス？」
　と、壁際の暗がりからガタゴト音を立てて、当人が出てきた。なにやら引きずっていると思ったら、三人目の騎士だ。
「これで三人だな」
　よいせ、とネイシスはその騎士を残り二人の近くに放り出す。ニアナはやや呆然としながら、内部を改めて見回した。
「あたしが外で見張ってる必要もなかったわね。あっという間じゃないの。きゃー、文化委員さん、強ぉい、カッコイイー」
　しらけた棒読み口調で賞賛する。ネイシスは嫌そうに顔をしかめ、何か言おうとして、……やめた。代わりに、騎士の体を探って鍵束を見付け、投げて寄越す。
「捕虜の戒めを解いてくれ。こっちは騎士を拘束しておく」
「はいはい、仰せのままに」
　意外と簡単に片付いたので、ニアナはすっかり気楽になって、捕虜の方へ近付いていった。全員が閃光の目潰しをくらってしまい、気絶しているようだ。何の反応もない。
　鉄格子のそばまで来て、ニアナは彼らの首にはめられているものに気付き、顔をしかめて唸った。かつて奴隷のしるしに使われた首輪だ。鍵などなく、鍛冶屋で切らない限り取れない。しかもそれが、細い鎖で壁につながっている。
（解放する気なんて、最初からないってことね。鎖の継ぎ目を狙えば、これでも外せるかしら）
　念のために持ってきた道具入れを広げ、ノミとヤスリを取り出した。それから鍵束を手にして、出入り口を探す。見付けたそこに駆け寄って、あれ、と彼女は目をしばたいた。
「開いてるわ。誰かを出そうとしていたのかしら……」
　つぶやきながら、格子に手をかける。直後、
「離れろ！」

ネイシスの叫びと同時に、格子の内側から何かが飛び出してきた。

（4）

「うッ……！」

思い切り突きとばされ、ニアナは床に倒れて呻く。まともに頭を打ってしまい、一瞬、気が遠くなった。ぶつけた場所に手をやろうとする間もなく、無理やり引きずり起こされる。視界は暗くなったまま、赤や緑の輪がチカチカしていた。

「寄るな、動くなっ！！　こ、こ、殺すぞッ！？」

耳元で男が喚いた。声は明らかに恐怖と動転で上ずっている。ニアナは喉に何かが押し付けられるのを感じたが、それもガタガタ震えていた。

「落ち着いてくれ」ネイシスが静かに話しかける。「あなたをどうこうするつもりはない。彼女を放してくれたら、どこへ行こうと自由だ」

「嘘だッ！！　ち、畜生、このっ、化け物めッ！！　出てけッ、ここから出て行け！！　俺の目の前から失せろ！！」

頭の後ろでがなりたてられて、ニアナの耳はわんわん鳴った。

（世話係の下男……忘れてた、もう一人いたんだったわ。幸い、喉のこれ、ナイフとかじゃないみたいだけど）

血が出ている感覚も痛みもないので、彼女が落としたヤスリか何かだろう。思い切り突かれたら致命傷になるが、少しでも身じろぎすれば切れるというものではない。

ニアナは自分の状態を確かめて、決意を固めた。

大丈夫、動ける。

目は焦点が合わずに視界がぼやけ、足もなんだか感覚が鈍っているが、この腕を振り払って前へ走るぐらいのことは出来る。否、やらねばならない。

（足手まといのお姫様なんて、あたしの柄じゃないし。大体、気安くいつまでもくっついてんじゃ……）

「ないッ！！」
気合と共に、踵で男の足の甲を力いっぱい踏みにじった。
「ぎひァッッ！？」
絶叫と共に男がのけぞった隙に、ニアナは身を振りほどく。が、走り出そうとした途端、くらっと眩暈がして倒れそうになった。
たたらを踏み、体勢を立て直した時には、男に腕を掴まれていた。
「ニアナ！」
ネイシスが駆けつけようとしたが、折悪しく騎士の一人が意識を取り戻し、呻きながら立ち上がった。しかもすぐさま剣を抜き、状況も分からないだろうに振りかぶる。ネイシスは舌打ちすると、先に騎士を沈めに向かった。
ニアナは彼の助けを待たず、闇雲に下男を振り払い、よく見えないまま当てずっぽうに逃げた。階段に突き当たり、反射的に駆け上がる。ぼやけた視界では方向や障害物を捉えづらいから、一階を逃げ回っても不利だ。階段なら、下からしか敵は来ない。
「待ちやがれ小娘ぇ！！」
男が絶叫した。もはや怒りしか頭にないようで、暴れ馬のごとく階段を駆け上がり、つんのめって倒れそうになりながら、ニアナの足首を掴んだ。
「っこの……、乙女の足に何すんのよッ！」
ぞわっと悪寒が走ったのを金切り声で隠し、ニアナは足を振り回して男の鼻面を蹴ってやった。ぎゃっ、と男は悲鳴を上げて反射的に手を離し、顔を押さえる。そのまま体勢を崩して、階段を転げ落ちて行った。
この隙に、とニアナは更に上へ逃げる。視界が揺れるので、屈んで階段に手を触れながら、這うようにして。だがもう、追って来られる事はなかった。
いつの間にか静かになっているのに気付き、ニアナはその場に座って息を整えた。じきに、ずっと下の方からネイシスの声が届いた。
「ニアナ、無事か？　怪我は」

「大丈夫よ！　そっちは片付いた？」
「ああ。全員拘束した、もう降りてきても安全だ」
「……はぁ、良かった……。ちょっとさっき、頭ぶつけちゃって。くらくらしてたのよ、捕まるかと思った」
「何だって？　待て、動くな、そこにいろ。迎えに行く」
ネイシスの声が剣呑になる。ニアナは言われた先から立ち上がり、「大丈夫ってば」と明るい声を上げた。もう危険はないのだから、こんな程度のことで、大袈裟にお姫様扱いされたくなかったのだ。
「もうちゃんと見えてるから、平気、平気。すぐ行くわ」
言いながら、壁に手をついて段を降りる。実際はまだ、体から魂が一部はみ出ているかのような状態だったが、それでも手足は一応ちゃんと動いた。
（変なとこ打ったかな、嫌だなぁ。後で医者に診せなきゃ駄目かしら。面倒なことになってなきゃいいけど。っていうか治療費は誰が……）
己の失敗を苦々しく思い返しながら、平気なところを見せようと足早に降りる。じきにネイシスが上がって来るのが見えた。その顔が、ぎょっとなるのも。
「え？」
あれ、と思った瞬間には、壁についた手が向こうへすこんと抜けていた。窓があったのだ。
「きゃ――」
支えを失った体が、呆気ないほど簡単に倒れていく。駆け上がるネイシスの姿が一瞬で視界の端へ流れ去り、代わりに青空が見えた。
（嘘でしょ、こんな）
格好悪い。
そんな言葉が脳裏をよぎったが、今さらどうしようもなかった。窓から身を乗り出して手を伸ばすネイシスが、見えたような、見えなかったような。
景色が滝のように上へと流れ、滲んでぼやけて。

――ぼふん！
予想外に柔らかな衝撃が、ニアナを包み込んだ。
「うえ？」
思わず間の抜けた声を漏らす。まったく突然に、見える範囲すべてが柔らかく真っ白なものに埋め尽くされていた。まるで、天上の雲のただなかに落っこちたかのように。
「な、何これ、あれっ、え……のぁ！？」
混乱している間にも、ニアナの体は柔らかな雲の上をころころと転がり落ちて、最後には結局やはり、地面にべしゃっと倒れこんだ。
「あっ、たぁ～……何がどうなって……」
かろうじて顔は死守したニアナは、呻きながらよいせと両腕で上体を起こした。それからゆっくり振り返り、自分を受け止めてくれたものを見上げる。
「……う？」
正体がよく分からず、顔をしかめる。ぼやけた視界一面に、もやもやと白いものがあるばかりだ。ニアナはぎゅっと目を瞑ってこめかみを揉んだ。次に目を開けた時には、視界はすっきり鮮明になっていたが、白いものはどこにもなかった。
「ニアナ！」
慌しい足音がして振り返ると、ネイシスが青い顔で駆け寄って来た。彼女の返事も待たず、そばに膝をつき、頭や肩や腕に次々と手を触れていく。
「ちょ、ちょちょちょちょっと待って、待った！！　大丈夫よ、どこも怪我してないから、そんな触りまくらないで！」
流石に大慌てで制止するニアナ。だがネイシスは構わず、背中から足まで一通り手を触れてから、ようやく長々と安堵の息を吐き出した。
「大丈夫だって言ってるのに」
赤くなってニアナが抗議すると、ネイシスは気の抜けた表情で「ああ」と応じた。無意識のような仕草で手を伸ばし、くしゃりとニ

アナの頭を撫でて、またひとつほっと息をつく。
「良かった、どこにも支障はないようだ」
「お陰様で。なんだかよく見えなかったんだけど、白くてふわふわしたのが受け止めてくれたわ。あなたの精霊さん？」
「……ああ、まあ、そうだ……な」
「何その曖昧な返事」
「安心したら気が抜けた。まったく、君は……どうして、そこにいろと言った端から」
「はいはいはいゴメンナサイあたしが悪かったです無茶して申し訳ありませんでした！　だってまさか、あんなところに窓があるなんて思わなかったんだもの！」
「窓があろうとなかろうと、あんなにフラフラではいつ転がり落ちても不思議じゃなかったぞ」
「えぇ？　そんな筈ないでしょ、大袈裟な」
「……」
　無言でじろりと睨まれ、ニアナは言い訳をやめて縮こまった。自分ではしっかり歩いているつもりだったのだが、どうやら違ったらしい。数回瞬きしてから、改めてニアナは周囲を見回した。もう大丈夫だ、ちゃんと鮮明に見えているし、首を動かしても眩んだりしない。
「とりあえず、医者の世話にはならずに済みそうね。本当、もう大丈夫だと思う」
「ああ、医者は必要ない」
「……なんで分かるの」
　ニアナが不審げに問うと、ネイシスはいつもの無表情に戻って端的に答えた。
「さっき診た」
「って……ちょ、つまりさっきのって、ちょっと待ってよ何それ、手を触れただけで何が見えるって言うのよやめてよ信じられない！！　最低！！」

「なぜ怒る？」
ネイシスは心底不可解そうだ。うら若き乙女の恥じらいなどというものは、察するどころか、その存在すら知らないのではなかろうか。ニアナは唸り、何か投げつけられないかと探したが、生憎と手頃なものがない。やはり専用投げ枕を用意すべきだった。
一人でじたばたしているニアナに、ネイシスはやれやれと呆れた風情で首を振った。
「ともかく、ここはもう大丈夫だ。見張りの騎士が目を覚ましたから、後を頼んでおいた。私は殿下方の首尾を確かめに行かなければ。……君はここで休んでいるか？」
「答えが分かってるような訊き方しないでよ。行くに決まってるでしょ」
ふん、とニアナは鼻を鳴らして立ち上がる。不思議と、怪我をする前よりも体の調子が良いような気がした。

（5）

一方、フィロスは無事だった騎士を集め、反撃の手筈を整えていた。

詰所を包囲されたのは痛手だが、どのみち敵は国王の身柄とフィロスの首を求め、王宮に攻め込んで来るだろう。あるいは本当にシグルスが、しつこく玉座に居座る強欲な父王を蹴落とすことにしたのだとしても、フィロスとしては一向に構わなかった。

取るべき対応は同じだ。国王の部屋へ通じる廊下で待ち伏せし、少しずつ敵の勢力を削ぐ。その間に国王の勅命を正式な書類にしてしまえば、危機に瀕して国王は騎士団長に全権を委ねた、という“事実”が出来上がるのだ。

あとは、失意の王に自決して貰うも良し、なだれ込んだ逆賊どもの手で弑されたというのも良し。王の勅命があれば、今は敵方にいる議員とその手勢も、いくらかは考えを改めるだろう。

（奴らは私を出し抜いたつもりだろうが、むしろ好都合だ）

フィロスはこの危機を逆に利用することを考え、内心ほくそ笑んでいた。

必要な指示を出して守りをかためさせ、書記に大急ぎで作らせた書類を持って、王の部屋へと向かう。署名を貰ってしまえば、こちらのものだ。

――だが、部屋の前でフィロスは胸騒ぎをおぼえた。奇妙な予感がして、扉を守っていた騎士に確認する。

「誰かここを通ったか」

「はい」騎士は迷いなく答えた。「エディクス殿下です。国王陛下のおそばを守りたいと仰せられたので」

「……」

フィロスは眉を寄せた。不自然ではない話だし、正嫡の王子の残り一人が一緒にいてくれたら、片付けるのも手間がかからなくて済

む。だが、エディクスが？　危険が迫れば自分の部屋でベッドに潜って、頭から布団をかぶっているに違いない、あの王子が何故？
フィロスは勅命の書類を読み直し、反逆者誅罰の命令だと見えることを確認した。巧妙に言を弄して書かれており、この状況下で読めば、そうとしか思えないだろう。だが少し解釈を変えれば、それは、フィロスが王国のすべてを委ねられたと読むことが出来るようになっていた。
気付かれはすまい。そう考え、フィロスは扉を静かに開いた。
「陛下、現況報告に参りました。陛下の忠実な騎士らが反撃に出られるよう、勅命にご署名を」
言いながら、室内にゆっくり足を踏み入れる。背後で扉が閉じたと同時に、彼は不吉な予感が当たったことを悟った。
王は憤激のあまり蒼白になり、肘掛を握り締めてこちらを睨みつけていた。その傍らには、こわばった顔のエディクスが立っている。両腕で抱きしめるようにしているのは、フィロスも見覚えのある帳簿だった。
フィロスはひとつ呼吸をすると、まったく平静な声音で言った。
「エディクス殿下、こちらにおいででしたか」
「ぬけぬけとよくも顔を見せられたものだな、フィロス！」
怒鳴り返したのはもちろん、国王の方だった。
「貴様が持ってきたものには、金輪際、二度と、署名せぬぞ！！すべては明るみに出たのだ！　貴様はもう終わりだ、このこそ泥が！　よくも儂の金を掠め取りおったな！！」
「何のことを仰せられているのです、陛下」
フィロスは冷淡に応じ、静かに歩を進めて王の前へ近付いてゆく。その時になって国王はようやく、自分と相手を隔てるものが何もないことに気付いたようだった。豪奢な椅子のそばには水差しと果物を置いた小卓があるだけで、客用の椅子も、幅の広いテーブルもない。
王は目に見えて青ざめた。焦って腰の剣をまさぐったが、しょせ

ん飾り物だ。しかも、重くて邪魔だからと何年も前に短剣だけにしてしまっていた。いつもなら壁際に控えている騎士達も、今は誰一人いない。

「く、来るな、フィロス！　それ以上近付けば、貴様を反逆者とみなすぞ！！」

彼は腰を浮かせて叫んだ。エディクスも帳簿を抱いたまま、二歩ばかり後ずさる。だがフィロスは足を止めない。落ち着き払った態度で、わずかに残念そうな表情を浮かべているほかは、まったく普段通りに見えた。

「どうも、陛下は誤解をなさっているようですな」

「誤解、だと？」

王はごくりと固唾を飲み、言われた言葉を繰り返す。フィロスはもう、剣の届く距離まで近付いていた。だがフィロスは柄に手をかけもせず、優しいとさえ見える微笑を浮かべている。

もしかして、と、甘い望みが国王の警戒を緩めた。次の瞬間、

「貴様の金などではない」

フィロスの笑みが消え、鋭い刃が閃いた。

「がッ……！！」

王の叫びに血が混じる。フィロスの剣は王の体を貫通し、椅子の背もたれに突き刺さっていた。

ごぼごぼと湿った喘鳴が、静かな部屋に響く。フィロスは王の耳元に顔を寄せ、消え去ろうとしている魂に最後の追い討ちをかけるがごとく、茨の声音で告げた。

「王国の金を、正しい目的に使ったのだ。貴様を肥え太らすためではなく、真にパルテニアの血肉とするためにな！」

むろん返事はない。ごほっ、と小さく咳き込んだのを最後に、王の首はがくりと垂れ、動かなくなった。

確実に死んだと分かるまで待ち、フィロスは剣を引き抜いた。だらりとくずおれてきた王の体を避け、嫌悪と侮蔑をこめて見下ろす。長い年月、抑えこみ隠してきた黒い怒りをすべてぶつけるかのよう

に。
だがそれも束の間だった。彼は冷ややかな平静を取り戻すと、ゆっくり頭をめぐらせ――エディクスを、見据えた。
同じ頃、王の間に通じる廊下では、シグルスが苦戦していた。
手勢を率いて攻め込んだものの、思いのほか騎士団の守りが堅く、なかなかフィロスのもとへ辿り着けない。少しずつ押し込んではいるのだが、今、彼の前に立ちはだかっている騎士はこれまで以上に手強かった。
「こんな状況でなければ、我が騎士団の精強なること、誇りに思えるのだがな、ヴェルス」
にやりとして皮肉を言った王子に、反逆騎士ヴェルスも不敵な笑みを返す。
「私も、こんな状況でなければ殿下を誇りに思いますよ。我々の目を欺き、これほどの鍛錬を積んでおいでだったとは。しかも我ら騎士団の結束にひびを入れ、密かにあなたの手駒として抱き込みまでして。あの愚王の息子とは思えぬ狡猾さ、実にもったいない」
「ぬかせ！　副団長でありながら団長の専横を止めるどころか、その尻馬に乗りおって」
シグルスは鼻を鳴らし、素早く踏み込んで突きを繰り出す。だがかわされた。反撃され、折角の一歩をまた後退する。シグルスが舌打ちすると、聞こえたらしい、ヴェルスがふっと笑った。
「しかし流石に、私と互角に戦えるほどではありますまい。剣を収められてはどうです、殿下。アレイオス陛下は国王たるに相応しくない。それは殿下もお分かりでしょう、だからこそ左様に陰で手を回してこられたのだ。殿下とフィロス団長が手を組めば、パルテニアは真の強さを備えた国家となる」
「世迷言だな」
「果たしてそうですか？……剣を引いて下さい、殿下。無用の争いというものです。殿下がお力を貸して下さるとなれば、我々も強いて現王家を廃することにこだわりはしません。他の殿下方の安全も、

保証します」
「……」
弟達のことを持ち出され、シグルスの顔をためらいがよぎった。
剣先が下がりかけた、刹那。
「時間稼ぎです、殿下！」
鋭い声と共に、誰かが横を駆け抜けた。ぎょっとなってシグルスが目をみはった時には、見知らぬ青年がヴェルスの剣を受け止め、跳ね上げていた。
「なッ――」
驚きがヴェルスの動きを鈍らせる。一瞬の隙に青年は己の剣を捨て、徒手でヴェルスの腕をとり、鮮やかに投げ倒していた。
ゴシャッ、と嫌な音が響く。咄嗟に身を庇えなかったヴェルスが、顔面を床でまともに打ったのだ。鼻と、歯の数本は折れただろう。
青年はヴェルスの利き腕を背中にねじ上げたまま、シグルスを振り返った。
「早く先へ！」
力強い声に押されるように、シグルスは疑問を置き去りにして走り出していた。

（6）

閉ざされた王の間では、フィロスがエディクスと向き合っていた。
「驚きましたな」
フィロスの口元に、再び優しげな笑みが浮かぶ。そのわずか数歩先で、エディクスは帳簿をしっかり抱きしめたまま、逃げもせず、命乞いもせず、青ざめながらも足を踏んばっていた。
「私の知っている殿下なら、泣いて逃げ出し、たやすく壁際に追い詰められているところですが。いや、そもそも最初から、この部屋には来られなかったでしょう」
「……」
エディクスは無言で、ただ精一杯瞳に力をこめて睨み返していた。もちろん、その程度では相手に全く何の影響も与えられなかったが。
フィロスはゆっくり一歩、彼に近付いた。
「それを渡しなさい、殿下。そしてこの勅命に、王の代理人として署名を。国王陛下は王太子殿下に背かれ、悲憤のあまり自裁なさった。後を託されたのはもはや唯一の嫡子、エディクス殿下――というわけです」
幼子に説いて聞かせるように語りかけ、フィロスは手を差し伸べた。
「従って下さるなら、命までは取りませんよ」
「おまえは……っ！　どこまで、勝手なんだ！」
エディクスは怒りと恐怖にわななき、かすれ声で罵った。フィロスは動じない。
「勝手？　それは、パルテニアの民から吸い上げた血税を、己の金だと言うような者のことでしょう。違いますか、殿下。私は王家を本来あるべき姿に戻そうとしているのですよ。敵と戦い退け、民を守り豊かさをもたらす、守護者たる姿に」
「その為なら、何をしても良いと言うのか！？」

「時には望ましくない手段に依らねばならぬこともあります。さあ殿下、引き伸ばすのはお止しなさい。帳簿をこちらに」
淡々と言いながら、フィロスはさらに一歩近付く。エディクスが唇を噛んで、いっそう強く帳簿を抱きしめたので、彼はため息をついた。
「殿下。あなたを殺して帳簿を奪い、すべての罪を反逆者に着せて皆殺しにすることも、我々には出来るのですよ。騎士団の実力はご存じのはずだ。無駄な抵抗は止しなさい。……あなたにしては、よくやった」
ねぎらいの言葉をかけられて、エディクスがはっと顔を上げる。フィロスはうなずきを返した。
「正直、この土壇場での殿下の行動には驚かされました。感嘆しておりますよ。だが所詮、剣の前では無力だ。死に急ぐ事はありますまい。……さあ」
重ねて促され、エディクスは悔しそうにうつむいた。身の程を思い知った子供のように、渋々と腕をほどき、ゆっくりと帳簿を持ち直す。そして一歩、進み出た。最後の抵抗とばかり、ほんのわずかにだけ、帳簿を差し出して。
「そう、それが賢明だ」
フィロスは微笑み、近寄って手を伸ばす。直後、
「――ッ！？」
帳簿の陰から繰り出された鋭い突きを、反射的に振り払った。帳簿が落ち、エディクスの手からナイフが弾き飛ばされる。
チィン、と遠くの床で澄んだ音がした。エディクスは手首を押さえ、素早くフィロスから離れている。
フィロスは信じられない様子で小さなナイフを見やり、エディクスを見つめた。そして、思わずのように笑いをこぼす。
「はッ――はは、殿下、まるで女のようですな！　仕込みナイフとは！　いや恐れ入った、まさかそこまで覚悟をなさっていたとは」
「黙れ」エディクスは赤くなって唸った。「私を嘲笑う前に、足元

を良く見るんだな」
「……？」
言われてフィロスは、床に目を落とした。帳簿が無残な姿をさらしているが、それだけだ。
（まさかこれが偽物だと？）
それはないだろう。国王に見せ、納得させるのには本物が必要だった筈だ。
訝りながらも用心深く拾い上げ――はっ、と息を飲んだ。
愕然としたフィロスに、エディクスは勝利の笑みを見せた。帳簿は、表紙とわずか数頁だけだったのだ。残りはやっつけ仕事で括りつけた白紙の束。
「他の部分はティルが既に持ち出した。今頃はゲニクス議長の手に渡っているだろう。私を殺して、すべての罪をシグルス兄上になすりつけようとしても、もはや不可能だ！」
「……この、小童が……っ」
ぎりっ、とフィロスが奥歯を噛みしめる。怒りに顔を赤黒く染めて、剣を握り直した。礼儀正しさも、余裕も、すべてが消し飛んでいる。
「よかろう、それが望みというなら、父親と同じところへ送ってやる！　腰抜けの分際で英雄を気取ったことを、異世で後悔するがいい！！」
フィロスが吼え、エディクスに襲いかかる。咄嗟にエディクスは走り出していた。扉の方へと。
直後、それを待っていたかのように扉が破られた。
「エディクス！！」
シグルスが叫び、弟の方へ走り寄る。同時に駆け込んできた青年が、素早くフィロスの進路を阻み、二人を守った。
「邪魔だ、どけ！」
フィロスが青年に斬りかかる。だが青年は予期していたようにその剣を受け止め、たやすく受け流した。力を殺がれたフィロスは危

うく体勢を崩しかけ、すんでのところで持ちこたえる。素早く剣を構え直し、彼は相手が雑魚ではないと認識を改めて向かい合った。
が、次の一撃を繰り出す寸前、その表情が訝しげに歪んだ。
「まさか……貴様は、まさかっ！」
怒りと驚愕に混乱した、その一瞬に、運命は決していた。目の前でいくつもの火花が弾け、顔を覆ったと同時に、足が宙に跳ね上がった。体がふっと軽くなったかと思った直後、彼は背中を床に叩きつけられ、暗い淵の底へと沈没した。
鎧を着込んだ大の男を投げ飛ばした青年に、エディクスとシグルスは目を丸くするばかりだった。
絶句したきり固まっている二人の前で、青年はきょろきょろと周囲を見回してから、これでいいか、とフィロスの剣帯を解いて、持ち主の手足を拘束した。作業が済むと、彼は二人の王子に歩み寄り、改めて一礼した。
「お怪我はありませんか、殿下方」
丁寧だが、態度にも声にも、充分な力と余裕が満ちているのが分かる。騎士らを倒した腕前と言い、先ほどいきなり空中に散った火花と言い、只者でないのは明らかだ。
兄弟王子が返事も出来ずに呆然としていると、彼は困ったように微笑んで、小さくうなずいた。
「このような慌しい場でご挨拶するのは残念ですが……お初にお目にかかります。私の名はフィニアス＝エルファレニア＝オアンディウス。共和国の天竜侯と言えばお分かりでしょう。どうぞお見知りおきを」
「……」
シグルスの手から力が抜けて、剣が床に転がる。同時にエディクスの顎も、ぽかんと落ちた。
気の抜けたような沈黙の上に、ばたばたと慌しい足音がかぶさる。外に残っていた騎士を片付けた味方のものだろう。
エディクスが無意識にそちらを振り返ると、騎士数名にまじって、

ネイシスとニアナまでがいた。
「ニアナ殿！」
こんな所に、と驚きの叫びを上げる。自分の声で我に返り、彼は慌てて彼女に駆け寄った。
「駄目です、ここに来ては。女性が見るべきものではありません」
室内には、無残な国王の死体が転がったままなのである。だが案じる彼の肩越しに、ニアナはそれを見てしまった。眉をひそめ、ああ、と嘆息する。
「間に合わなかったんですね。……残念です、殿下」
「あなたがそんな顔をされることはありません。さあ、早く外へ……ネイシス殿！」
エディクスはおたおたし、助けを求めた。が、いつもニアナのそばにいる彼が見当たらない。首をめぐらすと、ネイシスは天竜侯と向かい合っていた。
「あ……」
そうか、とエディクスは納得した。彼は共和国の文化委員だ。まさかこんな所で自国の竜侯と出くわすとは、予想外だろう。いや、それとも、もしや。
「ネイシス殿……あなたが呼んだのですか？　そちらの、竜侯閣下を」
「え」
妙な声をもらしたのは、訊かれた当人ではなくニアナである。場にそぐわぬ間抜け声に、皆の視線が集まった。ニアナ自身はそれに気付かず、ネイシスと向かいの青年をまじまじ見比べている。
「竜侯？」
「ええ、そうですよ」エディクスが答えた。「共和国の竜侯フィニアス殿だそうです」
「……え、えええぇぇ――！？」
化けの皮を全部吹っ飛ばすほどの、素っ頓狂な絶叫が、ニアナの口から飛び出した。

驚く王子達と、混乱するニアナをよそに、竜侯は面白そうな顔で
咳払いし、ネイシスは何とも言えない顔で天を仰いだのだった。

（1）

終　嘘つき姫と竜の騎士

アレイオスの遺体を清めて安置し、フィロスと反逆騎士全員を投獄し、血で汚れた王宮の内部を掃除して。あれやこれやの後片付けで、数日が瞬く間に飛び去った。塔に囚われていた者も保護され手当てを受けたが、その中には、かつて闇の獣の被害者とされた行方不明者もいた。語るに落ちたというものだ。

忙しなさに紛れるようにして、なぜか共和国の天竜侯までが、当たり前の顔をしてあれこれの雑用を手伝っていた。むろんネイシスとニアナもご同様である。

ようやく目の回るような慌しさが一段落すると、シグルスは一室に関係者を呼び集めた。すなわち、他の二人の王子に加え、ニアナとネイシス、それに天竜侯とゲニクス議長を。

「遅くなったが、まずは御礼を申し上げる。竜侯フィニアス殿、貴殿の援護があったおかげで、エディクスの命を救うことが出来た。それに言うまでもなく、今回の件はすべて、貴国の文化委員ネイシス殿の尽力があればこそだ」

そこでシグルスは視線をネイシスに移し、その隣でとぼけているニアナを見て、にやりと笑った。

「お二人の演技はなかなかのものだった。私もうっかり、本当に竜侯かと信じかけたぞ」

「お褒めにあずかり、恐縮です」

ニアナは答え、言葉通りに縮こまった。ごほ、と咳払いしたのは本物の竜侯だ。失笑をごまかそうとしたらしい。ネイシスがじとっと恨めしげな視線を送る。ニアナはそんな二人の様子を胡散臭げに盗み見た。

（おっかしいなぁ……絶対、ネイシスが竜侯だと思ったのに）

考え込むニアナをよそに、話は事後処理へと移っていった。カティアはこのまま自宅に幽閉すること、王位にはシグルスが即き、騎士団は再編、弩は解体し、図面の類があれば破棄すること、等々。両国の貴人の間で様々な取り決めが交わされる間も、ニアナは密かに観察を続ける。そうする内に、ふと気付いた。

（……似てる？）

共和国の天竜侯と、ネイシス。二人の間に、よく似た気配が感じられた。色彩で言えば、竜侯は黒髪と藍色の目なので、輝く金髪と琥珀の目をしたネイシスとは全く違う。だが顔の造りそのものは、よく注意して見ると共通点があった。生真面目そうな眉と口元、意志の力と知性を感じさせる目。

会談がお開きになった後で、天竜侯とネイシスは連れ立って庭園に出た。ニアナも後からついて行き、他に人がいなくなったところで、その思い付きを口にした。

「ネイシス？　あのね、もしかして、あなた……」

「ん？」

「竜侯様の、兄弟か何か？」

ぶっ、と失笑が漏れた。驚くニアナの目の前で、当の竜侯様が口元を覆って肩を震わせ、ネイシスがうんざり顔をする。ニアナが何も言えずに当惑していると、ネイシスがやれやれと頭を振って竜侯を睨みつけた。

「そんなに可笑しいですか、父さん」

「――は？」

ぽかん、とニアナが口を開ける。今のは何だ？　聞き間違いだろうか？

竜侯はようやくどうにか笑いの発作を抑えこみ、藍色の瞳に優しい思いやりを浮かべて、ニアナに向かい合った。

「言うのが遅くなって申し訳ない。息子が色々と、お世話になりました」

「え……って、あの、え、えええぇ！？　いやでもあの、息子って、

ネイシスが！？」
「そうです。私と天竜、双方の血を引いているので、見た目はこんななりですが、中身はまだまだ子供でしてね。特に、普通の人間の心理や常識は、竜には理解しにくいものなんです。ですから、あなたもさぞご迷惑だったでしょう」
苦笑しながら、竜侯は頭を下げた。慌ててニアナは両手を振って否定する。
「いえあのそんなことはっ、全然！　やめてください、竜侯様が頭を下げるなんて、畏れ多い！」
「竜侯と言っても、私は元々、ただの人間ですよ。だから遠慮は無用です。なんでしたら、お詫びに専用投げ枕をご用意しますが」
言ってから、竜侯は堪えきれずに失笑する。ニアナは呆気に取られ、次いで猛烈な勢いで首まで赤くなった。
「ネイシスッ！　あなた全部話してたの！？　精霊さんって、つまりそういう事！？　何考えてるのよ、信じられない、馬鹿ッ！　大馬鹿ッッ！！！」
今こそまさに、投げ枕が大量に必要であろう場面だった。ニアナは両腕を振り回して、むちゃくちゃにネイシスを殴りつける。ネイシスは避けも防ぎもせずに、甘んじてそれを受けていた。
竜侯は二人の様子を楽しそうに眺めていたが、ニアナが少し落ち着くと、こほんと咳払いした。
「まあ、何しろ子供ですから。大目に見てやって下さい。……さてと、ネイシス。私は一度ナナイスに戻るが、おまえはどうする？」
「仕事がまだ終わっていませんから、もうしばらくここに居ますよ。状況は知らせます」
「そうか」
短く言って、竜侯はネイシスの頭をくしゃりと撫でる。見た目は二人とも似たような年頃の青年だが、明らかにそれは、親が子にする仕草だった。
竜侯はもう一度ニアナに目礼してから、ふと空を仰ぐような仕草

をした。瞬間、その場に白い輝きが翼を広げる。
「あっ――！」
ニアナ思わず声を上げた。塔から落ちた彼女を受け止めてくれた、白く柔らかなものの正体が分かったのだ。巨大な竜が黄金の双眸をニアナに向けて優しく細めたが、彼女はあまりのことに何の反応もできず棒立ちになる。幼い日にたった一度だけ、遥か遠くからこの竜を見上げた記憶が、鮮やかによみがえった。
と、竜は優雅に首を動かして、鼻先で息子に軽く触れた。声はなかったが、何か言葉を交わしたらしい。ネイシスが微かに笑みを浮かべてうなずいた。
竜がすいと顔を上げて空を仰ぐ。飛び立つつもりだと気付き、ニアナは反射的に叫んでいた。
「あのっ！」
金の瞳が振り返る。呼び止めたものの、ニアナは言葉が続かなくなってしまった。
かつて抱いた願いが胸をよぎる。だが、それを口にする事は出来なかった。目の前の存在に圧倒され、対比した己自身の姿に今さらながら愕然とする。
――もし、あの日、あの時のままの子供であったなら。きっと迷わず、その背に乗せてくれと頼んでいただろう。自分も空を飛べると錯覚していた頃ならば。
だが今のニアナには、もうそれは出来なかった。無意識に止めていた息を、やっとのことで吸い込み、吐き出す。そうして胸をふさぐ灰色の石を、そっと押しのけた。もう必要ない、重しをせずとも、ちゃんと分かっているから。
「あの……、助けて下さって、ありがとうございました」
微笑んで感謝し、頭を下げる。
そんな彼女の葛藤をすべて見通したかのように、白い竜は小さく首を傾げて、聞こえるか聞こえないか、優しい声で微かに笑った。
ニアナが驚いて瞬きした時にはもう、天竜は竜侯と共に空へと舞

い上がっていた。羽ばたきにあおられて庭園の木々がしなり、草がざわめく。ニアナは乱れた髪を押さえ、茫然と空を見上げていた。

（2）

それから三日ほど、ニアナはネイシスの仕事を手伝って過ごした。もちろん、文化委員本来の仕事だ。正門の門柱の足元に屈んで、刻まれているはずの定礎年月日を探しながら、彼女はぶつくさぼやいた。

「こんな状況でまだ美術品調査とか、どんだけ神経太いのよって感じよねー。お役人様の鑑だわぁ」

「太い細いの問題じゃない。そっちは終わったか？」

「はぁい、先生〜」

だらけた返事をしながら、見付けた日付を記録して立ち上がる。腰がミシッと鳴り、思わずニアナは「うぉっ」っと呻いた。どこのおっさんか、というような声だ。むろんネイシスは何の反応も見せなかったが、代わりに別の人物がくすくす笑った。

おやと振り向くと、エディクスである。ニアナは顔を赤らめ、どうも、とごまかし笑いを浮かべた。

「熱心ですね。まだかかりそうですか？」

「いえ、もうこれで最後です。長らく居座って、お世話になりました」

エディクスの問いに、ネイシスは答えて用紙を畳み、ぺこりと頭を下げる。「そうですか」とうなずいたエディクスは、少し寂しそうだ。ニアナもちくりと胸の痛みを感じた。

（そっか、もう……これきりなんだ。ネイシスの仕事が終わったら、あたしも……、って、うわ、じゃあ今、謝っておかなきゃ！　でもって雇って貰わないと！！）

慌ててニアナは姿勢を正し、「殿下！」と呼びかける。なし崩しにこのまま、それではさようなら、となったら、また無職に逆戻りだ。今後もネイシスの世話になる取り決めはしていないし、その意志もないのだから。

「あの……今さらですけど。騙して、本当にごめんなさい」
「いいえ」
エディクスは一瞬ぽかんとしたものの、すぐに柔らかく微笑んで首を振った。そして、ニアナが話を続けるより先に、思いもよらないことを言った。
「あなたが王女でも竜侯でもないのは、最初から知っていましたから」
「――え？」
ニアナはぎょっとなり、まじまじとエディクスを見つめる。と、彼は恥ずかしそうに目を逸らし、もじもじとうつむいた。
「その様子だと、あなたは覚えていないんでしょうね。七、八年ほど前……ですか。旅芸人の一座がこのパルテノスに来て……そこで、あなたを見たことがあるんです。庭にあなたが現れた時、すぐにあの子だと分かりました」
「……」
「とても忘れられない、鮮烈な印象だったんですよ。その時のあなたは、帝国の小さな皇女様を演じていました。本物の王族である自分よりも、遥かに気高く立派に見えて……あれこそが本物の貴族ではないのかと、感銘を受けたものです。それに、その……あなたは、とても、……可愛らしかったので」
エディクスはどうにかその言葉を押し出し、かあっと耳まで赤くなった。うつむいて上着の裾を虐待しながら、早口になって続ける。
「本当は、あの時、声をかけたかったんです。その、素晴らしい舞台でした、とか、馬鹿みたいな一言でもいい、とにかくあなたに……声をかけたかった。でも、出来なくて。意気地がなかったんです。昔から私は、その……つまり、あまり、美男というのじゃありませんから。それでも勇気を振り絞って、こっそり楽屋に近付いてみたんですが……ちょうど、怒鳴り声が聞こえて」
そこまで言い、エディクスはため息をついた。顔を上げ、過去を見るように視線を彼方へやる。

「父があんなでしたからね、怒鳴り声は聞き慣れていました。でも、それはまったく違っていて……私は生まれて初めて、本物の暴力とはああいうものかと知りました。悪意と怒りで、人の心を押し潰す、有無を言わさぬ暴力。そんなものが、この世にはあるのだと……。おかしいですよね。自分が殴られたわけでもないのに、軟弱だと思われるでしょう。でも、その時の私には……衝撃だったんです。女の子に声をかけるだとか、甘い考えは消し飛びました。泣きそうになりながら逃げ帰ったんです。……今でも、はっきり覚えています」

「殿下……」

ニアナは言葉もなく、ただエディクスを見つめるばかりだった。知っていた。この、ぬくぬくと温室で育った、優しいだけで何も知らないと思っていた王子様は、昔の自分とその暮らしを、わずかとは言え知っていたのだ。

エディクスは変わらず優しい笑みを浮かべたまま、ニアナに向き直った。

「今度こそ、あなたの力になりたかった。あなたがどんなつもりで嘘をついているのか、私には分かりませんでしたが、あなたを……救い出せるのならと」

「……」

真正面から、あまりにも純粋で穢れのない想いをぶつけられ、ニアナは堪えきれずその場にへたり込んだ。真っ赤になって顔を覆い、長々と呻きを漏らす。

「〜〜〜〜っっ……ぅあぁぁ……最悪……。騙してるつもりが、逆に騙されてたなんて……。赤っ恥もいいとこ、格好悪いったらもう……自信なくすわぁ……」

「えっ？　い、いえあの、あなたの演技はとても素晴らしかったですよ！？　知っていても時々、もしかして本当に竜侯なんじゃないかと、つまりあの、旅芸人に身をやつしていたほうが演技で、本当に王女様なんじゃないかと思いましたし……だからあの、そんなに落ち込まないで」

慌ててエディクスがせっせと慰めの言葉を量産する。横でネイシスが、面白がっているのか何なのか、こほんと白々しく咳払いした。
と、そこへ。
「ニアナ？」
第三者の声が、おずおずといった風に割り込んできた。ニアナは屈んだままで眉を寄せ、これは誰だ、と考える。知っている声だ、確かに。
立ち上がって振り向いたニアナは、あっ、と叫びを上げた。
「エオン！？　あんた無事だったの！？」
「やっぱり、姉ちゃん！　なんでこんなとこにいるんだよ！？」
声をかけたのは、まだそばかすの残っている少年だった。二人は同時に叫び、てんで勝手にしゃべりながら手を取り合う。
「うっわ、本当にエオンじゃないの！　何やってたのよ今まで！」
「こないだ仕事中に窓からぼーっと見てたら、姉ちゃんがなんかキラキラ頭の偉そうな奴と一緒に歩いてるから、何事かと思ってさぁ。そういや金持ちに囲われたんだっけかとか思って、やばそうだから隠れたんだけど」
「無事だったんなら連絡ぐらいしなさいよね！？　あの時に皆、殺されちゃったもんだと思って、あたしてっきり……、って、他には？　誰か逃げられた人いるの！？」
「連絡しろったってどうやってだよ！？　いや、俺も他には誰も知らねーよ。たまたま俺、しょんべんしに離れてたからさ。ってか、姉ちゃんここで働いてんのか？　いいなぁ、俺も紹介してくれよ。あの宿屋の旦那、すぐに答を出してくるんだもんよー」
おしゃべりが二倍で騒々しさは二乗。すっかり気圧されていたエディクスが、そこでようやっと我に返って口を挟んだ。
「ニアナ殿、こちらは弟さんですか？」
途端に少年、エオンは目を剥いてのけぞった。
「ニアナ『殿』ぉ！？　姉ちゃん、何やったんだよ！！」
「黙んなさい！」

バシッ、とニアナは少年の頭を平手ではたく。それから、ぐいぐい無理やり押さえつけてお辞儀をさせた。
「ごめんなさい、殿下、育ちが悪いもので。この子はその一座にいた頃の弟分なんです。ほらエオン、ちゃんと挨拶なさい！」
「あだだだっだだっ、爪！　爪立ってる！！　血ィ出るって！！」
ぎゃあぎゃあ喚きつつも、なんとか初めましての挨拶をこなし、エオンは涙目でニアナの魔手を逃れた。最初は勢いに呑まれていたエディクスも、その頃には面白がるだけの余裕が生まれていた。くすくす笑いながら、元気な弟さんですね、などとニアナをからかう。
そこでネイシスが、ふむと考える風情で切り出した。
「エディクス殿下。もし良ければ、二人を王宮の仕事に就かせて頂けませんか？　私の助手というのは、一時的な契約ですので」
ニアナとエディクスが揃って驚き、ネイシスを見つめる。ネイシスはニアナを振り向き、いつもの無感情な口調で確認した。
「それが君の望みなんだろう？」
「……まあ、そう……だけど。って、ちょっと！　勝手に人の心、覗いたわね！？」
「そこまでしなくても、顔を見れば分かる。共和国に来ればいいと思っていたが、エディクス殿下が君の素性を承知していたのなら、話は別だ。折角、親しい身内にも会えたんだから、あまり遠くに離れたくはないだろう」
「って言っても……」
雇うか雇わないかは、王家の側が決めることだ。ちらとニアナが見やると、エディクスは当然とばかりにうなずいた。
「あなたがパルテノスに残って下さるなら、私もちょうど、お願いしたい事があったんです」
「それなら好都合ですね」
ネイシスが勝手に承諾したので、ニアナは慌てて割り込んだ。
「好都合って、そんな厚かましい！　って言うか……そりゃ、あたしは助かるけど、でも……あなたはそれでいいの？」

何を訊いてるんだ、と内心自分を蹴飛ばしながらも、ニアナは曖昧な顔でネイシスの返事を待つ。だが相手はまったく彼女の心情を察する気配もなく、心底不思議そうに問い返してくれた。
「君の話だろう？」
「――っっ、ええハイそうでしたわね、あたしの身の振り方を話してるんでございました、お役人様にはどうでも良いことでしたわね失礼致しました！！」
「？？？」
いきなり怒ったニアナに、ネイシスは眉を寄せて首を傾げる。ニアナはその爪先を踏んづけてやってから、憤然とエディクスに向き直った。
「という事ですから、殿下、エオン共々お世話になります、宜しくお願いします！」
ぶん、と音がしそうな勢いで頭を下げる。エディクスは目をぱちくりさせてから、良いのかな、と遠慮するような苦笑をこぼした。
「実は、隣接する神殿に併設されている孤児院が、人手不足でして。特に、なんというか……子供達を楽しませることの出来る人がいれば良いのにと、前から思っていたんです。ニアナ殿なら、適任かと思ったのですが」
「子供ですか」
うっ、とニアナが怯んだので、エディクスは意外そうに瞬きする。ニアナは苦笑で説明した。
「子供っていうのは、一番容赦のない観客なんですよ。退屈だとすぐにぐずったり、大声を出して勝手に遊び始めたりしますからね。でも、ええ、やります。やらせて下さい。ほらエオン、あんたもちゃんとお願いして」
「いちいち言わなくても分かってるって……。あの、えーっと、俺も頑張りますんで、よろしくお願いします」
ぺこりと曖昧に会釈した少年に、エディクスは鷹揚な笑みを見せた。

「こちらこそ。私も楽しみが増えました。ですが、あなたは今、別のところで働いているんですね？」
「あ、はい。でも掃除とか雑用ばっかで、大したことしてませんから、辞めても全然問題ないです」
けろっと応じたエオンに、ニアナは思わず眉間を押さえた。
「あんたね……そもそも真面目に働いてないでしょ。今だって、お使いの途中なんじゃないの？」
「ひでえな、ちゃんと働いてるよ！　そりゃまぁ……お使いの途中だけど」
「やっぱり！　もう、仕方ないわね、あたしが一緒に行って、ちゃんと話を通して謝って辞めさせてもらうから！」
ニアナは怒りながら言って、ネイシスを振り返る。
「ってわけで、あたしちょっと行って来るわ。はいこれ」
借りていた筆記具などを押し付けるようにして返し、ニアナはふと考えてから、やおら深々と頭を下げた。
「今まで色々お世話になりました、先生！――さて、これでもう助手の仕事は終わりよね。これっきりサヨナラってことで。預かってる物もないし、あたしが戻るまで待ってなくてもいいわよ。それじゃ」
口を挟む隙を与えず一方的にまくしたて、ニアナはぷいっと踵を返して歩き出す。止められるかと思ったが、ネイシスは彼女の背中に向かって声をかけただけだった。
「ああ。ありがとう」
――と、たった一言。
ニアナは足を止めて拳を握り締めたが、振り返るのも癪で、意固地になってずんずん大股に歩を進めた。エオンが目を白黒させながら二人を見比べる。
「姉ちゃん、ちょっと……いいのかよ、ああもう！」
その場で足踏みしてから、彼は結局、小走りでニアナを追いかけた。

少し行ってから、ニアナは歩調を緩め、盛大なため息を吐き出した。
（何を怒ってんだろ、あたし）
馬鹿みたいだ。相手は半分竜だという、人とは全く異なる存在だったのだ。自分のこんな感情が理解されなくても、受け入れられなくても、当たり前ではないか。
無意識に立ち止まり、そっと胸に片手を当てて目を瞑る。だがもう、あの優しい光は感じられない。つながりも消えてしまったようだ。
はあ、ともう一度ため息。そこへエオンが追いついた。
「ったくもー、歩くの速いよ姉ちゃん。あのさぁ、よく分かんねえけど……姉ちゃんはこれでいいのかい？　言っとくけど、俺は俺で、ちゃんと仕事してるよ？　別に無理しなくても」
「してないわよ！　あんたは余計な気を回さなくていいの！」
ニアナは強引に遮り、エオンの額をびしっと指で弾いてやった。
「エディ殿下の紹介なら待遇も良いだろうし、子供相手に毎日芝居の腕を磨けるってことなんだから、願ってもない仕事よ。ちび助の世話なら、あんたで慣れてるしね。そうだ、今度のことをネタにして芝居を創るのはどうかしら」
しゃべりながら思いつき、ぱっと笑顔になる。芝居のことを考えると、それだけで余計な悩み事が全て吹き飛び、新しい活力が湧いてきた。エオンも興味を引かれ、目を輝かせる。
「やっぱ姉ちゃん、何かでかい事に関わってたんだね！？　俺にも聞かせてよ、そんで一緒に芝居にしようぜ！」
「そうね、さすがにそのまんまじゃ、子供相手でもまずいだろうから……こんなのはどう、『嘘つき姫と竜の騎士』って」
興奮して往来で相談を始めたところへ、
「誰が姫だって？」
「のぉう！！」
無粋な声が水を差し、思わずニアナは竦みあがった。反射的に身

構えつつ振り返る。案の定、ネイシスが呆れ顔で立っていた。
「脅かさないでよ、毎度毎度！！　なんなのよ、もうあたしに用はないでしょ！？」
一瞬喜んでしまった自分が恥ずかしくなり、ニアナは猛烈な勢いで怒鳴る。通行人がじろじろ見るのもお構いなしだ。
ネイシスの方は、人目どころかニアナの剣幕さえまるで気にかけていないように、涼しい顔のまま彼女に歩み寄った。
「言い忘れていた事があったんだ」
「何よ。今さら、最初のお駄賃返せとか言わないでしょうね」
がるる、と噛み付かんばかりに唸るニアナ。美人も台無しだ。が、相変わらずネイシスは平静である。その顔のまま、彼は唐突な一言を告げた。
「君が好きだ」
「……」
なんだそれは、とニアナの思考が真っ白になる。彼女が呆然自失している間に、ネイシスは淡々と続けた。
「だから、これからも時々、君の様子を見に来る。不自由や危険に見舞われていないか、幸せに暮らしているかどうかを確かめに。――ああそうだ、また誰かを騙して小銭を巻き上げたりしていないかどうかも」
「しないわよ失礼ね！」
ニアナは反射的に怒鳴り返し、相手が小さく笑ったのを見て赤面する。
「～～～っっ、ああもう、信じられない！　なんで今、そんなこと……っていうか、様子を見に来る、って何なのよその発想は！　普通そこは、『やっぱり一緒に来て欲しい』とか続くべきところでしょ！？」
「そうなのか？」
ことんとネイシスが首を傾げる。ニアナは両手を振り上げて叫んだ。

「そうよ！　芝居も見たことないの！？」
「すまない。次に会うまでには勉強しておこう」
「だあぁもう！　一発殴らせろこの馬鹿男！！」
「……姉ちゃん、めちゃくちゃ目立ってんだけど……」
エオンがちょいと袖を引く。ニアナはようやく怒鳴るのをやめ、肩で息をしながら周囲の人垣をねめまわした。にやにや笑いで痴話喧嘩を見物していた野次馬が、おっかねえ、と首を竦めて三々五々退散する。
ニアナは息が整うまで待ってから、不機嫌な顔のままネイシスに向き直った。忌々しいキラキラ頭を見上げ、はあっ、とため息。
「分かった。あなた半分竜だもんね、普通じゃないのは仕方ないわ。だけど半分人間なんだったら、それで少しは人間らしく生きていこうと思ってるんなら、好きな相手にはどういう態度を取るべきか、しっかりみっちり勉強してらっしゃい。芝居でも、小説でも、人の経験談でもいいから。とにかく、今よりマシになってなかったら、次に来たって会わないわよ。そのキラキラ頭がちらっとでも見えた時点で、地平線まで逃げるからね！」
その言い草に、ネイシスはわずかに面白がるような表情を見せたが、すぐに真面目くさって応じた。
「努力しよう。その代わり、出来れば君も、少し竜についてちゃんとした知識を仕入れてくれ。エディクス殿下に頼めば、帝国時代の記録をどこからなりと取り寄せてもらえるだろう」
「……努力するわ」
ニアナはむすっとしたまま譲歩する。と、その頬にネイシスが軽く指を触れた。
「これだけは知っておいて欲しい。君の幸せを願っている。竜が人を好きだというのは、そういう意味だ」
琥珀の双眸に見つめられ、ニアナの鼓動が大きくひとつ打つ。胸の奥に黄金の光が流れ込んでくるのが分かった。以前の“つながり”よりも、もっと深いところへ。

「ちょっ――ネイシス、これは」
戸惑うニアナに、彼はややおどけた微笑を見せ、手を離した。
「次に会う時まで、君を見失いたくないからな。何しろ、君はどこで何をやらかすか予測がつかない」
「本っ当に、いちいちムカつくわね」
照れ隠しにニアナが唸ると、ネイシスは軽くぽんと一回頭を撫でてから、
「じゃあ、また」
淡白な別れの言葉を残して、あっさりと背を向けた。ニアナはこっそりべえっと舌を出してから、自分もぷいと踵を返す。エオンはすっかり混乱して、首がどうかなりそうなぐらいに何度も何度も、二人を交互に見ていた。
「エオン！　良いから、行くわよ！」
「でも、姉ちゃん」
「い・い・の！」
ほらッ、と急かして手招きする。ようやくエオンが追いかけてきたのを確かめ、ニアナはまた歩き出した。その口元は自然と緩み、温かな笑みを浮かべていた。
（いいのよ。だってほら、こんなに近くにいる）
胸の奥に宿った光が、優しく瞬いた。幼い日に諦めた遠い憧れが、緩やかによみがえり、心の中で翼を広げる。長い長い眠りから覚めたさなぎが羽化するように。
ニアナは軽い足取りで歩みながら、晴れやかな気持ちで蒼穹を仰いだ。
空は飛べなかった。でも、落ちてすべてが終わったわけじゃない。
――夢はまだ、そこにある。

（完）

（2）（後書き）

これにて終幕です。お付き合い下さり、ありがとうございました。
一言なりと、ご感想を頂ければ幸いです。

千客万来満員御礼（1）（前書き）

本編完結の数ヵ月後。これといった出来事はありませんが、その後の様子など。

千客万来満員御礼（1）

「これより我ら、かの竜侯に従いて行かん！　大空を翔る翼が、我らに希望をもたらすであろう！」

子供っぽさの残る声が、古風な台詞を朗々とそらんじる。そこへ、さらに幼い声が和音の波となって重なった。中央に立つ少年が高々と剣を掲げると、歌声も最高潮に達する。

すべてが終わるのを待ちきれず、誰かが手を叩いた。途端に、どっと万雷の拍手が起こる。

野外に設えられた簡易舞台の上で、主役の少年は誇らしげに頬を染め、合唱をつとめた子供らも、端役や裏方で舞台袖に引っ込んでいた子供らも、皆がぱあっと輝くような笑顔になった。

と、そこで、舞台の手前に一人の娘が現れた。自らも拍手を送りながら中央まで進み出ると、観客に向かって一礼する。それが合図となり、子供達も揃って姿勢を正すと、

「ありがとうございました！！」

ひとつ巣にひしめく雛鳥のように礼を叫んで、いっせいに頭を下げた。喝采がさらに大きくなる。鳴り止まない拍手の雨を浴びて、子供達は夢見心地に陶然としていた。

――そうして、雛の群がぴよぴよふわふわ退場すると、あとは大人の時間である。

「皆様、惜しみない拍手をありがとうございます！　この日の為に練習を重ねてきた子供達には、何よりの褒美となるでしょう」

舞台前に残った娘が笑顔で声を張り上げる。

「あの子達がこれからも健やかに育ち、今日の舞台で皆様を楽しませたように、いずれこのパルテノスを舞台として大きく羽ばたき、皆様のお役に立てるように！　どうか、さきほどの拍手に劣らぬ温かいご支援をお願い致します！」

娘が頭を下げると、再び拍手が起こった。木箱を抱えて待ってい

た数人が、観客の中へ分け入ってゆく。次々と手が伸び、落とされる貨幣がチャリンチャランと心地よい音を奏でた。
金を落とした手には、代わりに小さな焼き菓子が渡された。原価はほとんどかかっていない、そして作ったのは子供だろうことが一目でわかる、お粗末なものだ。それでも客は満足し、にこにこと笑顔で会場を後にする。
最後の客がいなくなる頃には、太陽もかなり西へ傾いていた。黄金色を帯びた日差しに落ち葉の匂いが加わって、まるで少し焦がした糖蜜のようだ。
「はぁー、やっと終わったぁぁ」
口上を述べた娘――ニアナは、盛大なため息をついて舞台の端にどすんと腰を下ろした。その横に、弟分のエオンが並んで座る。
「お疲れー。なんとか無事に終わって、良かったよな！」
「まったくだわ、一時はどうなるかと思ったわよねー」
うなずきあう二人に、寄付金を集めていた男がいたわりのこもった笑顔を向けた。まだ中年に差しかかったばかりだが、孤児院の院長だ。
「ありがとう、ニアナ、エオン。君達のおかげで助かったよ」
「本当に、ニアナちゃんが来てくれて良かったわぁ」
舞台の袖に使ったカーテンを外していた女も、朗らかに礼を言う。薄っぺらなお世辞ではない、真情のこもった声だった。こちらは院長の妻である。
ニアナは恥ずかしそうに首を竦め、よっ、と気合を入れて立ち上がった。緊張の切れた心身は今すぐ倒れこんで眠りたがっているが、まだ片付けが残っているのだ。
「成功を祝うのは、お金を数えてからにしましょうよ。なんだかんだで、結構いろいろ物入りだったでしょ？」
「それはそうだが」と院長が応じる。「これで市民の関心がこの院にもっと向けられたら、寄付も継続的に集まるだろうから、今回の金額自体については、どうこうと判断できるものじゃないよ。それ

に何より、子供達のあの顔がね！」
「脇役になってふてくされてた子も、最後はちゃんと助け合ってたものねぇ。主役だけがすべてじゃない、皆でひとつの舞台を作り上げたんだ、ってことは、あの子達にとってもいい経験だわ」
「正直、初めて提案を聞いた時には、何を言い出すんだ、って呆れたがねぇ」
　院長が苦笑しながら、全ての硬貨を集めた木箱を覗き込んだ。
「こうして目に見える結果を手にすると、ぐうの音も出んよ。ここだけの話、君がエディクス殿下のご好意に付け込んで、やりたい放題しようってんじゃないか、って、陰口を叩く者もいたから……」
　総額いくらぐらいだろう、これで新しい布団を買えるかな、などと妄想を膨らませていたせいで、彼は新たな客人が近付いていることに気付かなかった。
「それは残念なことですね」
　予想外の声が応じたもので、院長は「ひゃっ！？」と奇声を上げて竦んだ。慌てて振り返ると、噂のエディクス王子その人がいるではないか。
「あっ、でででっ、殿下！　失礼しまっし、したっ！」
「いえ、こちらこそ驚かせてしまいまして。舞台は大成功ですね。おめでとうございます、セラノス院長」
　エディクスは柔らかく温かな声音で、悪意の欠片もなく祝辞を述べた。次いで舞台にいる姉弟の方へ顔を向け、含羞の笑みを浮かべる。
「ニアナさんも、おめでとうございます。素晴らしい舞台でした」
「うわあ、大袈裟に褒められると照れちゃうから、やめて下さい」
　ニアナは軽く笑ってごまかし、肩を竦めた。
「でも、あの子達が聞いたら喜びます。あれでも一生懸命、練習した成果ですから」
「お世辞ではありませんよ。あんな幼い子供達に言う事を聞かせて、きちんとしたお芝居を演じさせるなんて、いくらあなた自身が優れ

た役者でも難しかったでしょう」
　大真面目にそんなことを言って、エディクスは純真な賞賛のまなざしを注いでくれる。ニアナは渋面になりかけたのをどうにか堪え、鈍感愚直な態度を貫いた。
「そうでもありませんよ。まずあたしが芝居を始めて、皆を巻き込んでしまえば良いようなものでしたから。殿下の後押しを頂いていながら、無様な失敗はさらせませんから、それだけは本当に胃が痛くなる思いでしたけどね」
　あはは、と屈託無さげに笑いつつ内心では、
（だからそんな風に、人目も憚らず“ご好意”だだ漏れにするのは、やーめーてー！！）
　……と、悲鳴を上げて身をよじる。実際の所、ニアナにとってエディクスの好意は、どう扱って良いやら途方に暮れる代物だった。
　むろん好意は嬉しい。昔の自分の演技に感激したと言ってくれたのも、役者冥利に尽きることだ。
　加えて正直に言うなら、王子の好意には利用価値がある――浅ましいようだが、それは事実だ。資金集めと広報活動を兼ねた演劇祭、という催しを発案したのはニアナだが、エディクスの人脈を通じた観客集めが出来なければ、これほどの成果は得られなかった。
（ご本人は、利用されてるなんて感じてもいないみたいだけど）
　むしろ自発的に、ニアナの為に協力しているつもりだろう。そしてこの善良な王子様は、恩を売って愛を買おうという下心など、微塵も見せないのだ。いっそ打算が見え隠れしていたら、ニアナとしても遠慮なく勝負を挑んで利用できるのだが、これでは逆にいたたまれない。
　そんな彼女の居心地悪さを、エディクスはまるで察してくれなかった。今日も今日とて上機嫌に、こうして会話が出来るだけでも嬉しいとばかりにこにこしている。
（あーもう、駄目。この純真さ、すれっからしの身には堪えるのよおお）

耐え切れずに天を仰ぎ、ため息ひとつ。それからニアナは頭を振って、鈍感娘の仮面を被りなおした。
「そういえば、もしかして殿下、今日はずっと舞台をご覧になっていたんですか？　お疲れじゃありません？」
「いいえ、残念ながら途中からしか見られなかったんです。お土産を用意していたもので……っと、あれ？」
彼はそこまで言ってやっと、自分が手ぶらだと気付いたようだった。慌ててきょろきょろし、何かを探す。と、そこへ、
「しっかりしなよ、エディ。ほら、これだろ」
呆れ声が、手提げ籠と共に割り込んできた。エディクスはホッして籠を受け取り、ニアナも口元をほころばせる。
「ティリウス殿下、お久しぶりです」
ぺこりとお辞儀をしたニアナに対し、金髪の少年は不機嫌そうな顔をしただけで、答えなかった。だがニアナは怯まず、優しい笑みを浮かべたまま馬鹿丁寧に続けた。
「本日はわざわざお運び下さり、ありがとうございました。心より御礼申し上げます。拙い舞台でお目汚しを……」
「やめろ」
苛立ちを隠しもせず、ティリウスはニアナを遮った。そして、笑いを堪えているニアナを見て、忌々しげに唸る。
「子供扱いするなと、何回言わせるんだ。厭味が分からないと思うのか？　エディが優しいからって、調子に乗るなよ。俺はおまえのこと、許してないんだからな」
「ティル！　まだそんな事を……。あの件でニアナさんを責めるのは筋違いだと、何回も話し合っただろう？」
エディクスが小声でたしなめる。だがティリウスは横目で兄を一瞥し、処置なしと言いたげに深いため息をついた。その心情が分かり、ニアナは苦笑を堪えてうつむく。
ティリウスが怒っているのは、ニアナが王宮の皆を騙した件ではない。そうではなくて、エディクスが彼女にのぼせている事だ。図

々しく兄の恋人になることなど許さないぞ、という意味の発言だったのだが、エディクスはまったく取り違えている。
ティリウスはげんなりし、ニアナの同情的な目に気付くと、さらに渋面になった。エディクスの手から、最前渡したばかりの籠を奪い返し、
「そら」
つっけんどんこの上ない態度でニアナに押し付けた。
「ティル！」
「叫ばないでよ、エディ。とにかく渡せばいいんだろ」
ああもう、とティリウスは空いた片手を振る。ニアナは勢いで籠を受け取った後、礼を言って中身を覗いた。布巾で覆われているが、甘く香ばしい香りがあふれている。めくってみると案の定、無花果の焼き菓子だった。
「ありがとうございます、殿下。子供達が喜びます――というか、大人も」
笑いながら一言付け足したのは、香りにつられてエオンや院長までふらふら吸い寄せられてきたからだ。院長の妻も小走りにやって来たが、こちらはお菓子が目当てというより、夫がそのまま食いつかないように引き戻すのが目的のようだった。
「まあまあ、エディクス殿下、ティリウス殿下、もったいのうございます。折角ですから、お持たせで失礼ですけれども、お茶を用意しますから召し上がってゆかれませんか」
妻の言葉で院長も立場と役目を思い出したらしく、慌ててしゃきっと背筋を伸ばして、二人の王子に向き合った。
「ああそうでした、こんなところで立ち話など……どうぞ、中へ」
「ありがとうございます」
エディクスは笑って礼を言ったが、すぐ残念そうに首を振った。
「ですが今日はこの後、兄上やゲニクス議長と会議があるので、すぐに帰らなくてはなりません。これは皆さんで召し上がって下さい。また日を改めて伺います」

小さく頭を下げて詫びる。態度はあくまでも丁寧で、王子が臣民に対するものではなく、一人の若者が年長の大人に対するものだ。にもかかわらず、彼のまとう雰囲気は、静かな力強さを持っているようだった。

（あの一件で、殿下も急に成長したみたい。なんだか……変な感じ）

ニアナはつくづくとエディクスを眺め、そんなことを思った。

ふにゃふにゃ軟弱な、世間知らずのお坊ちゃん。それが第一印象だったのに、今ではそんな弱さはすっかり薄れている。相変わらず優しいし、控えめで温和で、もじもじ照れるところもそのままではあるのだが。

ついじっと見つめていたせいで、振り向いたエディクスとまともに視線がぶつかった。途端にエディクスは赤面し、ぱっと目をそらしてそわそわする。察した院長夫婦が白々しくエオンを促して立ち去り、ティリウスは厳しい目つきでニアナを牽制してから、くるりと踵を返して十歩ばかり離れた。

残されたニアナは、それじゃあたしも、と立ち去るわけにもゆかず、馬鹿のようにきょとんとしたまま立ち尽くすはめに陥った。

（うわやだ、何これ。ちょっと皆、妙な気を利かせないでよ！！戻ってきてー！　ティル殿下ー！　いいから兄上様を引きずってでも王宮に連れ帰って！！）

心の叫びは、しかし届かなかったようだ。ティリウスはこちらに背を向けたまま、苛々と爪先をトントン鳴らしている。

エディクスは少しためらってから、「あの」といきなり口を開いた。慌ててニアナは正面の王子に視線を戻し、なんですか、と素知らぬふりで小首を傾げる。エディクスは恥ずかしそうに微笑みながら、遠慮がちに言った。

「ニアナさん、……あなたが、ここにいてくれて本当に良かった。セラノス院長も、よくあなたの事を褒めていますよ」

「そんな、大したことはしてないと思うんですけど。恐縮です」

「あなた自身は、大したことではないと感じられるのでしょうね。

ですが、誇張でも社交辞令でもなく、本当に……私は、あなたが、……得難い方だと信じています。才能や技能だけのことではなくて、その、お人柄も」
褒められた当人よりも、褒めている方がどんどん真っ赤になっていく。段々とうつむいて、袖口を虐待する手が忙しなくなって。
ニアナが何とも答えられずに黙っていると、エディクスはふっとひとつ息をつき、袖を苛めるのをやめた。そして、意を決したように顔を上げ、正面からニアナを見つめた。
「どこにも、行かないで下さい」
「……」
「あっ――つまり、その、ずっとここに……いえあの、この街で、いっ……い、」
一緒にいて欲しい。
口に出されなかった言葉が、ニアナの胸にひらりと舞った。

（普通そこは、『やっぱり一緒に来て欲しい』とか続くべきところでしょ！？）

往来で叫んだ自分の声が、脳裏にこだまする。
（ああ、そっか）
いまさらながら理解してしまう。ニアナは、ごめんなさい、と心の中でエディクスに両手を合わせた。合わせながら、表面上はまるきり何も気付いていないように笑って見せる。
「もちろん、ここにいますよ！　今さらよそに行く当てもありませんし、何より、こんな素敵な仕事に就かせて貰えたんですから。ちびっ子達がちゃんと大きくなるまで見届けたいですし、あたしに出来ることがある限りは、投げ出したりしません。ご安心下さい、殿下」
「……あ、ええ……そう、ですか。……良かった、それを聞いてホッとしました」

肝心の一言を伝え損ねて、エディクスは傍目にもはっきり分かるほどがっかりした。が、すぐに気を取り直し、良かった良かった、と繰り返す。自分の失敗を取り繕うためというより、ニアナに気遣わせないように、と考えているような態度だった。

「あの、そ、それでは、今日はこれで……。また今度、ゆっくりお話ししましょう。その、皆さんと、一緒に」

たどたどしく言いながら、エディクスは赤い顔で逃げるように帰って行く。ティリウスもそれを追って少し歩いたが、エディクスが振り返りもしないで一目散に王宮へ向かっているのを確認すると、彼は用心深くニアナのところまで戻ってきた。

少年の厳しい顔を見て、ニアナは罪悪感のまじる微苦笑を返し、頭を下げた。

「申し訳ありません。エディクス殿下には、あの……」

「あれで諦めるエディじゃない」

「えっ」

「おまえは知らないだろうが、エディはああ見えてしぶといんだ。昔からそうだった。俺がどんなに怒っても拒絶しても否定しても、絶対に諦めないんだ。一日中どころか、何日でも何ヶ月でも、しつこく話し合おうとするんだぞ」

苦々しい表情は、過去の兄弟喧嘩の連敗記録でも思い出しているためだろう。ニアナはうっかり失笑し、それから、笑い事じゃなかった、と思い直してひきつった。

「はっきりお断りすべきでしょうか」

あたしが一緒にいたいのは、別の人なんです――と。

正直、なんであんなのに、と思うのだ。どう考えても、エディクスを選ぶ方が得に決まっている。

どこがそんなに気に入ったのか分からないが、こんな自分を好いてくれている。どころか、崇めているとさえ言えそうなほどだ。正直で、反応が分かりやすくて、善良で優しくて、金持ちで。

（ここで振ったら絶対後悔するわよねぇ。ああ目に浮かぶわ、歳取

ったあたしが『昔は王子様に求婚された事もあったのに』とかぼやいてる姿が！　ぎゃあぁ！）

なのに、それなのに、なぜか。どうしても、違うのだ。

一緒にいたいのは、この胸の奥に宿っている光の主だけ。ほかの誰も、その代わりにはなれない。

己の度し難さにため息をつく。知らずうなだれたニアナに、ティリウスはそっぽを向いて鼻を鳴らした。

「ちゃんと聞いてたか？　言っただろう、どんなに拒絶しても、って」

「……え」

「俺はまだ、許すつもりはない。けど、エディがどうしてもと言ったら、それを止められないのも分かってる。だから――もし、おまえがエディを嫌いじゃないのなら、許してやってもいい」

「……」

随分と偉そうに許すの許さないのと言ってくれるが、そもそも王子様が誰かと結婚したいとなったら、それについて可否を決められるのは、国王だとか、あるいは議会なのではなかろうか。

それとも単にティリウスが言っているのは、家族として、弟として、ニアナが姉になるのを認めるか認めないかという話なのだろうか。

ニアナが困惑して黙り込んでいると、ティリウスはそれをどう取ったのか、改めて彼女に向き直った。その目の高さは、初めて会った時よりも確実に近付いている。

「身分や立場が違うというのなら、そんなもの気にするな。どうせパルテニウス一門だって、元をたどれば大した家系じゃない。でっち上げの王女だの竜侯だのがあれだけ威力を示す、その程度の血筋だ。とやかく言う奴はもちろんいるだろうが、そいつらはどうせ誰が何でも文句を言うんだ」

彼は軽蔑の口調で言い捨てたが、語尾に屈辱が滲むのは隠せていなかった。庶子の生まれを“とやかく”言われてきたためだろう。

「殿下……励まして下さるのは嬉しいんですが」
「励ましてない！　なんだその、『小さい子が無理するな』と言わんばかりの目は！　俺はただ、エディが嫌いじゃないならさっさと観念しろと言ってるんだ」
「嫌いではありませんよ、もちろん。好ましい方だと思いますし、色々良くして頂いて本当に恩義を感じています。そうですね、ティル殿下と同じぐらいに好きですけど」
ふと悪戯心を出して、ニアナは要らぬ一言を付け足した。途端にティリウスは真っ赤になり、
「ふざけるな！……っ、もういい！！」
怒鳴って足を踏み鳴らすと、ほとんど走るような勢いでずかずか大股に歩み去ってしまった。
あらら、とニアナはそれを見送り、一人小さく舌を出す。多感な年頃の男の子を、からかうものではなかった。エオンに知られたら、だから姉ちゃんは酷いってんだ、と批難されるだろう。
「あーあ……」
はふ、とため息。両手に抱えた籠から立ち上る香気も、あまり気分を明るくしてくれなかった。
細い絹雲がたなびく空を仰ぎ、光を顔に受けながら目を瞑る。
（ねえ、どうしてる？……あの時、あたしの方が『一緒に行きたい』って言うべきだったのかな。あなたは、あたしがそばにいなくても、平気なの？）
ねえ、ネイシス。
呼びかけても、返事はない。胸奥の光が仄かに暖かくなったような気がした、それだけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9359v/

嘘つき姫と竜の騎士

2011年10月10日03時21分発行